

印形ニ可被差出、右ニ趣無混雜様相心得取斗可有之事○圖二三〇一及圖二七七八を見よ

(同上)

柴田康直被免

○圖五八七 六月八日 柴田日向守殿老衰ニ上病氣ニ付、願ニ通御役御免ニ事、柴田日向守老衰其上病氣ニ付、願ニ通御役被爲御免、此旨三郷町中可觸知也○圖五七四五を見よ

亥六月八日

加賀

(同上)

○圖三六 六月廿九日 釜屋町大坂屋又兵衛下人重吉外十四名、盜賊差押ハニ付、夫ニ御褒美被下ニ事、

釜屋町 大坂屋又兵衛下人

重

吉

柏原町 大和屋玄藏借屋

北渡邊町河内屋清兵衛借屋 伊豫屋彌兵衛借屋

同

吉

長

池田屋久兵衛

同町垣外番天王寺長吏下 若キの彌七弟子

多

吉

新

橋屋兵衛支配借屋

同町垣外番道頓堀長吏下 若キの良助弟子

南堀江貳丁目

同

同

同町垣外番道頓堀長吏下 若キの嘉七弟子

幸町壱丁目名田屋木知兵衛 支配借屋瀧屋清八下人

大和屋六右衛門借屋

同

同

同町垣外番天満長吏下 若キの嘉七弟子

同町垣外番天満長吏下 若キの嘉七弟子

森屋治

同

同

同町垣外番天満長吏下 若キの嘉七弟子

同町垣外番天満長吏下 若キの嘉七弟子

同町垣外番高田長吏下

同

同

同町垣外番天満長吏下 若キの嘉七弟子

同町垣外番天満長吏下 若キの嘉七弟子

若キの善治郎弟子

同

同

同町垣外番天満長吏下 若キの嘉七弟子

同町垣外番天満長吏下 若キの嘉七弟子

六月 日付は廿九日なり、
○南組惣年寄の副書

(同上)

○圖五八六 七月朔日 川路左衛門尉殿大坂町奉行被仰付ニ事、

町奉行川路 聖設

川路左衛門尉殿大坂町奉行被仰付、此旨三郷町中可觸知者也○圖五九三〇を見よ

亥七月朔日

加賀

(同上)

○圖三九 同日 七夕短冊竹精靈祭ニ品々、川ニへ捨間敷、尤右品々々々 公儀御入用ニ

て船を出し、取捨させニ事○圖二八六に同じ

○圖五八九 七月六日 是迄三郷并攝河在ニ入交ニお仲間組合罷在、奉行所一手ニ取締相立來

ハ口々、都前々々々々再興付ニ事、

去ル寅年中株札并問屋組合等停止、是迄納來ハ冥加金銀不及上納旨等ニ義、從江戸表御下知ヲ以相觸置ハ處、其已來商法取締相崩、諸品下直ニも不相成、却お不融通ニ趣相聞ハ付、此度諸問屋組合共、都前々々々々通再興付渡ハ、左ハ逆彌以冥加金銀上納ニ義ハ、不被及御沙汰ハ間、諸品價引下ケ方ニ義厚心掛、實直ニ渡世相營ハ様、大坂諸商人諸職人共ハ中渡○圖二二八ハ、就あり在ニ義も、是迄町在入交ニお仲間組合罷在、奉行所一手ニ取締相立來ハ口々等、都前々々々々再興付付ハ間、一統其旨を存、諸物價引下ケニ御趣意致貫通ハ様、精々取斗可々、委細ニ義ハ、大坂元仲間組合ニハ其等々爲中通ハ間、是又可存ハ、

右ニ通攝河兩國村々ハ相觸ハ條、此旨可存ハ、

右ニ趣三郷町中可觸知者也○圖五八九

亥七月 形日付は六日なり

在府 左衛門

加賀

(御觸書承知印形幅)

攝河在々々々 於ける仲間 組合の再興

盜賊を逮捕 せる下人重 吉外十四名 に錢を賜ふ

編纂 七六六 ○圖七二二に同じかるべし、

編纂 七六九 ○圖七一に同じ、

圖三〇〇 七月十一日 町、明地面、寺社境内、所、請負地、并町家において、淨瑠璃又ハ俄狂

言ニ紛敷催致間敷事、且又醫師供方ニ中、品々名目を付、於病家金錢乞請の者有之ハ、可訴出事、

口達

四業を名として淨瑠璃又ハ俄狂言の興行を禁ず

難波新地、野井西横堀川流末、築地二ヶ所、興行物の取締

一 近比町、明地面、寺社境内、并所、請負地、又町家等(二股)あつても、昔嘶、或神道講釋、心學道話、軍書講談等、相催の趣ニ奉行所に斷出、内實を其義を引違、道具建杯いせし、鳴物を取交、淨瑠璃又ニワカ狂言ニ紛敷催致し、見物人を集、茶代其外名目を付、徳用取の不少哉ニ粗相聞、不埒に至るハ、右鉢如何に催いせしハ義不相成と申すも無之、當地ニワカ狂言ニ義ハ、哥舞妓ニ紛敷品ニ付、ニワカ師共身分取締方ニ義ニ付るも、兼ハ觸渡置の趣も有之上ハ、其段無違失相守、右昔嘶外三業以外、猥成催いせしハ義彌以不相成ハ、尤右四業相催の度毎、奉行所に斷出ハ、勿論ニ義、右場所の婦人差出ハ義も是亦不相成ハ、自然此後も右申渡を相背ハもの有之於ハ、當人并所役人迄も急度可申付ハ、

一 難波新地、野井西横堀川流末、新築地ニ義ハ、地所惡敷、作物等生立不宜、或建家等自力ニ及兼ハニ付、追々小見セ物小屋等ニ地所貸渡、助成ニ致來ハ譯ヲ以、右貳ヶ所ニ限、前段四業以外類業相催ハ義勝手次第、併哥舞妓ニ似寄ハ義不相成ハ勿論、右四業相催ハ節、取締方ニ義ハ、外場所同様ニ相心得可申旨も、兼申渡置の處、是亦奉行所へ斷ニ品ニ引違、内實哥舞妓ニ似寄ハ催杯致シハ族も有之哉ニ相聞、以ハ外ニ申ハ條、右申渡ハ趣自然相背ハもの有之ニあつてハ、前同様夫ハ急度可申付ハ○圖二一三五を見よ、

醫師の供方病家に於て金錢を強請するを禁ず

一 近年醫師ハ供方風義一躰ニ惡敷相成ハニ付、取締方ニ義、先達ハ相觸○圖五四八ハ趣も有之ハ處、追々相弛、病家に罷越ハ度毎、酒料或弁當代別駕籠賃杯品々名目を付、金錢乞請ハ義も有之哉ニ相聞ハ、病鉢ニ方ハあつて、時刻并風雨ハ無差別、醫師相招、療治請ハ申も有之ニ付るも、病家ニ心得を以、供ハ者ハ手當いせし遣ハ義ハ格別ニ心得共、供ハ者共ハ鉢せりケ間敷義ハ、決有之間敷申ハ、其仕義ニ寄、容易ニ醫師相招、療治請ハ義難相成次第ニ至、醫業ハ本意(拘)も抱ハ筋ニ付、以來右様ニ義無之様、供ハ者ハ嚴重可申付ハ、万一此後も是迄ハ弊風ニ泥ミ、於病家金錢鉢せりケ間敷申掛ハもの有之ハ、如何様ニ相斷置ハ、早々月番ハ奉行所へ可訴出ハ、尤申立ハ義をいとハ、供ハもの任サ、金錢差遣ハ様子相聞ハ、夫ハ急度可及沙汰ハ、

右ニ通三郷町中并所ニ請負地ハ者共へも、不洩様可申通ハ事、

亥七月○町中家持の承知判形日付は十一日なり、

(御觸書承知印形帳)

圖三〇一 同日 米價高直ニ付、市中難澁人貳萬二百四十七軒ハ者へ、軒別ニ鳥目三百文

宛差遣ハ事、

去秋以來米高直ハ處、大坂表ハ義々、諸國咽喉ハ場所ニ付、寂寄國ニ在、等々無宿野非人共當

近國の無宿非人大阪に集る

御觸及口達 嘉永四年辛亥年

無宿非人を
高原溜に收
容す
貧民に粥を
施す

市民の義捐

貧民二萬二
百四十七軒
に軒別錢三
百文を頒つ

表を目差、追々多人數集來、右に内この如何にも不便に躰にもの不少、町家おゐても、右躰に
しり門先等ニテ、食物杯乞ひ内こ、風と出來心こゝ、目間見合、盜心掛ひ分も有之、無左ひ共
店セ商ひ等と邪摩(魔)ニ相成、可致迷惑義にて、取締(拘)も抱ひ付、右無宿野非人共、病氣又
を老幼にもの、或可及飢餓躰に者の高原溜に爲差遣、食物其外世話致遣シ、且町に宿持難澁人
共、西御役所附公賣人下宿共へ焚出付、日々人數五百人程ツ、粥爲差遣、其外米直段引下
ケ方等ニ付あも、品々手を盡、世話致遣シ次第等、御用掛町人始外町人共、内及承、難有存
ひ由こゝ、夫々身元ニ應米金錢等差出、右御救筋ニ差加ひ義、寄特(寄)と志願を以出ひ付聞
届、此節迄に御救御入用ニ、右米金錢差加へ遣、殘多分有之ひ、然ル處米直段と義、追々引下
ケ方との乍ア、いまも平準と場合この無之ひ付、右御救と儀、今一際時合立直ひ迄、先是
迄に通取斗遣ひ、就めを平日と違、盆前と義にも有之ひ付、町人共も差出ひ御救筋差加殘金
錢ニ、御役所銀取足、兼取調置ひ町に難澁人、貳万貳百四拾七軒と者共へ、軒別ニ鳥目三百
文ツ、當節救錢差遣ひ間、一統難有存、右と者共へ嚴重ニ配當致し可遣事○圖二二九三及
二二九七を見よ、
下ケ紙にて

差出ひ米・金・銀・錢・薪・塩等と員數名前を、追々相達可事、

○御觸帳に、年寄の副書
日付を七月十一日とす、

圖二二九二
に同じ、

圖三〇三 七月廿二日 相圖に紛敷花火を拵、市中川内等こゝ揚ひ儀致間敷事、

(同上)

狼烟類似の
花火を禁ず

口達

御城近所の不及、諸役所辺其外人家程近キ場所等にて、大造と花火を揚ひ義致間敷を勿論、
都多花火ニ支寄、相圖揚火等ニ紛敷火業致ひ者及見聞ひ、所と者無遠慮早速可訴出旨等と
義、先年方追々相觸置○圖二二七
九を見よ、ひ趣も有之ニ付あり、此節大川筋難波橋寄川中こゝ、其筋渡
世と者商ひひ花火の、相圖に紛敷義も無之、殊に例年仕來ひ趣この上ひ、子細無之ひ得共、諸
家藏屋敷詰等と内この、相圖に紛敷大造と花火ヲ拵、市中川端等へ持出、揚ひ向も有之哉と粗
相聞ひ、前段觸渡と趣意にも差障ひ付、向後狼ニ揚火等致ひ義可爲無用旨、諸藏屋敷詰と面
こは中渡ひ間、町とこゝおゐても其段相心得、兼取觸渡と通無違失可相守ひ、
右と通三郷町中端と迄不洩様可事通○圖二七二
六を見よ、

亥七月 ○町中家持の承知判
形日付は廿二日なり、

(御觸書承知印形頼)

圖三〇三 七月晦日 富嶋町貳丁目上荷船乗佐助外十七名、難船助遣又の盜賊差押ひ付、

夫々御褒美被下事、

富嶋貳丁目

上荷舟乗

佐

助

難船を救助
せる佐助外
九名に錢を
賜ふ

此者并外九人、先月二日安治川口おゐて、備前國赤崎村大黒丸廻船壹艘、強風こゝ淺瀬へ被吹
付、難儀およぶ節、早速右船へ漕付、情と相働、危難を助ケ遣ひ段、兼取(兼)「中渡」難船助ケ方と

御觸及口達 嘉永四年辛亥年

義、厚相心得の故に義に付擧置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣ひ、猶此上無油斷心掛、様可致ひ、
右に通ず渡ひ條、所に者共可令承知ひ、

七月二日

- 立賣堀中丁 檜皮屋清兵衛下人
- 七 炭屋吉兵衛 七郎右衛門町貳丁目 堀屋徳治郎下人 作兵衛 同 清助
- 玉造稻荷新町 長堀茂左衛門町夜番人 同町同所設樂八三郎御代官所
- 河内屋幸助同居伴 和泉屋八三郎支配クレーヤ 攝易西成郡西高津村
- 幸 三郎 京屋徳兵衛同居伴 明石屋九八同居伴 奥野屋岩治郎同居伴

盜賊を逮捕せる下人定七外七名に錢を賜ふ

其方共義、盜賊を差押、夫に所に者中合、召連訴出ひ段、兼お觸渡し趣相守、寄特に儀に付、爲褒美鳥目貳貫文ツ、差遣ス、

○南組惣年寄の副書
日付は七月晦日なり、

(同上)

- 補 一八 七月 中山道蕨宿外十ヶ宿、人馬賃錢割増し事 ○圖五七〇八及圖一九三三、
八月四日 戸田山城守殿卒去に付、鳴物停止し事 ○圖三六八五に同じ、
- 五九 八月十六日 馬附荷物し事、并馬士共不法に儀致問敷事 ○圖一九〇二に同じ、但し、「賣取
字を加ふ、尙圖
二六八四を見よ、
- 三〇五 九月四日 白米小賣直段に儀、米相場に應し正路に賣方可致ひ事、

口達

白米小賣直段は堂嶋米相に準據す可し

此節堂嶋米相場追々際立下落致シ得共、町に搦米屋共は内この元附に割合を立、小賣直段不引下族も不少趣相聞ひ、元來搦米屋白米小賣直段に義を、米相場高下に隨ひ賣出可はずにて、既米相場相進ひ時を、元附に不拘、速に直上ケルをせしなら、右躰下落し時節に差向、容易に不致直下段、不埒に仕方付、早に相改、小賣直段高直にて、身薄に者共別お致難義候次第を顧、銘々一分の利欲を離き、年來右商賣向ヲ以、身命を保ひ冥加に程をも弁、搦米屋共精々差働、相互に勵合、成丈ケ下直に賣出可ず、夫に所に者共も能く心ヲ付可致世話ひ、自然此上にも不正路に取斗致しむもの相聞ひ、無用捨召捕、嚴重可及沙汰の間、其期に至後悔致問敷ひ、

右に趣三郷町中搦米屋共等に不洩様可ず通事 ○圖二二八七及二三三二を見よ、

○本令端書に、九月四日御觸とあり、

(同上)

三〇六 九月十日 北久太郎町五丁目繪屋彌七儀、御城内繪方定御用達相勤ひ事、

北久太郎町五丁目

繪屋彌七

右彌七義、御城内(繪方)定御用達相勤ひに付、御用に節を、同人名前ヲ以役差致し、い、無滞可罷出、尤賃銀と義を、御定直段に掛り物引、渡方可致ひ間、三郷繪師職しもの、寄る可ず聞置ひ事、

○南組惣年寄の副書
日付は九月十日なり、

(同上)

御觸及口達 嘉永四辛亥年

一九六七

城内繪方御用達繪屋彌七

市民上書し
て町奉行所
の貧民賑恤
を謝す

參考 三二四 九月十四日 米價高直ニ付、種々御救爲成下、必至ニ困窮を相凌ハ段、市中一
統方御禮申上ハ事、并西御奉行様御永勤被爲有ハ様出願事、
先月十四日三郷火消年番町年寄西御番所様ニ、左ニ通御禮書付差上ハ、
乍恐以書附御禮奉申上ハ、

一去秋以來米價高直ニ付、身薄シ者共困窮差迫、難澁可致シ、種々御救○三二九七・三三〇一・被成
關七七八等を見よ下、猶又當夏以來、極難澁シシノ共へ御慈悲爲御救數十口御粥被爲下置、誠以必至ニ危難を相
凌ハ段、全御仁惠ニ御慈悲難有奉存ハ、猶其上米直段存ニ外下落ニ相成、當時一統安穩ニ時節
ニ差向ハ儀、格別ニ御仁情故ニ儀々、市中一統御厚恩ニ程御禮無シ量、冥加至極重疊難有仕合
奉存ハ、乍恐此段私共三郷町中爲惣代々、右御禮奉申上ハ、以上、

三郷火消年番町

年

寄連印

御

右同日猶又左ニ通、書付差申上ハ、

乍憚口上

西町奉行本
多安英の永
勤を出願す

一西御奉行様御儀、去戊年方當表御在勤被爲在ハ所、米直段高直ニ時節ニシ、市中一統身薄シ者
共別及難澁ハ所、格別ニ御仁惠を以、種々御救被爲成下、米直段等も下落ニ相成、當時安穩
ニ相凌ハ段、誠以廣太(大)ニ御慈悲難有可奉存ハ、何卒恐多御儀ニ御座ハ得共、永ニ御在勤被爲成

下ハハ、此上ニ御慈悲難有仕合ニ奉存ハ旨奉願上度段、町人共一統申上ハニ付、奉恐入ハ得
共、私共爲惣代々奉願上ハニ付、何卒各々様方宜被仰上被下ハハ、難有可奉存ハ、以上、
亥十月

北組郷中惣代
南組郷中惣代
天満郷中惣代

町々年寄連印

惣御年寄中

當月朔日三郷火消年番町々年寄東御番所様に被爲召出、於御前左ニ通り被仰渡ハ、

三郷町々人共惣代

船越町年寄

長濱屋平兵衛

外貳拾人

其方共儀、本多加賀守當表永勤ニ儀相願ハ旨、惣年寄共迄差出ハ願書ニ外ニ、申立ハ趣意々無
之ハ哉、丁人共一統願立ハ趣、神妙ニ至ニ得共、願ニヨリ永勤被仰付筋者無之ハニ付、願
書差返ハ、尤右ニ趣御城代ハ相達ハ申上渡ハ間、此旨可令承知ハ、
右ニ通御承知ニ上、早ニ御順達留方御戻可被下ハ、以上、

亥十一月

年番

瓦町壹町目印

(御觸帳)

町奉行永勤
の願書を却
下す

三〇七 九月晦日 生駒町中村屋甚藏外五名、盜賊差押ひこ付、并六軒屋濱上荷船乘善次郎外六名、難船助遣ひこ付、夫々御褒美被下事、

生駒町

中村屋甚藏

盜賊を逮捕せしめる中村屋甚藏に錢を賜ふ

其方共、先達用向有之、他行致ス途中、無宿田川の富吉外貳人に出會、其方着用と衣類剝とらまひ砌、可捕押を立向ひ、所々疵受ルなま共、精力を掛、右々者共と内壹人と其場所捕押、引連可訴出の所に、捕方役人廻り合ひこ付、右々趣申立、捕押ひもの相渡ス段、健氣と至、兼あ觸渡と趣相守、^(奇)寄特と義と付、爲褒美鳥目拾貫文差遣ス、

九月二日

西高津新地八丁目

同所六丁目和泉屋梅太郎

池田屋藤助

同町 嘉

助 吉田屋茂七

長瀬清兵衛町

同町垣外番天王寺長吏下

若キモの元七弟子

治兵衛

盜賊を逮捕せしめる池田屋藤助外四名に錢を賜ふ

其方共儀、盜賊を差押、夫々所々者共申合、召連訴出ル段、兼あ觸渡と趣相守、^(奇)寄特と義と付、爲褒美鳥目貳貫文ツ、差遣ス、

九月

六軒屋濱上荷船乘善次郎

善次郎

元庄三郎

源七

喜三郎

伊助

助

難船を救助せしめる善次郎外六名に錢を賜ふ

右々者共義、當月十二日於安治川口、廻船貳艘強風なる淺瀬に乗揚、及難儀の節、邊々居合、早速右船に漕付、精々相働、危難を助ケル段、^(奇)寄特と義と付譽置、爲手當善次良外五人に鳥目壹貫文ツ、虎吉へ同五百文差遣ひ、

○南組惣年寄の副書
日付は九月晦日なり、

(御觸書承知印形帳)

〇

三〇八

十月五日 大坂三郷并攝河在、質屋古銅古道具屋古手屋儀、仲間再興申付の事、并大坂三郷下屎儀も、先前と通、攝河兩國と内三百十四ヶ村并加入村へ

引請申付の事、

大坂三郷并攝河在の質屋古銅古道具屋古手屋仲間を再興す

大坂三郷并攝河兵庫西宮、其外攝河兩國在、質屋并古銅古道具屋古手屋、右三商賣人共取締りた決、此度先前と通壹商限、町在一手に組合再興申付ひ成就あり、去ル寅年觸渡^(〇圖五四八)と趣を自然弃捐相成、夫々渡世筋と義の、文化以前と定法に復、諸品融通合等厚心掛、^(御觸書)實直ニ渡世相營、聊不取締り義無之様可致^(〇圖五八八九及六〇一一を見よ)、

右三商年寄の設廢如何は追て沙汰す可し

但、三商年寄名目與廢り義を、猶取調り上追お可申渡ひ、夫迄と處、先惣年寄に掛申付、取締爲差心得の間、其旨も可存ひ、

○一大坂三郷下屎と義、先前攝河兩國と内、三百拾四ヶ村并加入村へ引請、高割箇所割等ヲ以、取附來ひこ付あり、仲間組合の姿に相當ひこ付、去ル寅年株札并問屋仲間組合等停止の節、右村々ニ限引請り義差止、町在相對次第取遣可致旨申渡^(〇圖五五〇を見よ)、ひ以來、村々と者々と内にて一己

御觸及口達 嘉永四年辛亥年

一九七一

下尿相對引
請の流弊

攝河三百拾
四ヶ村并加
入村々の下
尿請負を再
興す

大阪市史第四

一九七二

と利欲に耽り、銘々作用相當に見積り不均、下尿取附箇所多引請、身薄し百性共は高直に賣肥
手致し、或代銀取遣ヲ以、箇所賣買致の風義に相成の付、町家に手筋ヲ求、追々直増を以、
箇所糶取の族不少、正路に百性共は、年來作用手當に肥手ニ相離、難義の甚し、町家と者と右
ニ乘、彌増下尿糶賣致の仕義に至、止ル處肥手直段は差響の事由相聞の、然ル處此度諸問屋
組合とも再興ヲ渡の上、右ニ准、下尿糶賣も、先前と通攝河兩國の内、三百拾四ヶ村并加入
村に引請に積付の間、其旨可存の、尤右下尿糶賣、商物にも無之上の、兼お定直段の外、
糶賣直増致の筈無之而已ならず、肥手高直にあつ、田畑養ひ方不行届、諸作出來劣、自然万價
に拘の筋に付、町在の者共其義を厚相弁、猶取締方と義の、天保九戊年中町在の合、奉行所へ
差出有之規定書と通無違失相守、双方共不正路に取斗無之様可致の○圖五六二九及圖
二八一三を見よ

亥十月五日

左衛門
加賀

(同上)

參考 三五 十月十五日 米賣買方窮届に無之様可相心得旨被仰渡、御請證文と事、
被仰渡御請證文と事

近來打續米價高直に上、去成年と義異作に國々多、土地有米及減少の付あつ、彌増直段も引
上ひに付、米賣買方掛引、他處と義諸國稻作一作而已にあつ、去年來に入合も行届不申道理に
の間、時節前後を弁、多分米高買注文引請の義を勘弁可致事にいへ共、最早是迄通と差略に

米賣買の融
通を計る可
しくた

帳合米の本
意を失す

堂嶋米相場
の影響

と不及、賣買方格別窮届に無之様、融通合專一に可相心得、向後右に事寄、不正路に取斗致間
敷旨、米仲買共一統へ可申通、○圖二〇九及
二一八を見よ

○米方年行司の副書
付は十月十五日なり

(米商舊記)

參考 二六 同日 帳合米賣買の濱法を取亂し、正米掛繫の意味取失の様成儀致間敷旨被

仰渡、御請證文と事、

被仰渡御請證文と事

堂嶋帳合米と義を、正米掛繫融通第一の品に付、前々右相庭妨致、者を、吟味上夫、御仕置
申付のに付あつ、猶又取締方と義も度々申渡有之處、近來米仲買共の内にも、正帳對用掛繫と
意味取失ひ、別物と様に未熟と心得違ふ、不作法に仕方多、甚敷に至りあつ、兼お定と限市に
差向、又と平常にも同志と米仲買共申合、内々仲買共を手先に遣、濱法取亂し、其次第により
まくと唱、最前立廻の無頼物を語らひ、押あ市場へ爲立交、可立相庭を差出、様仕成、混雜
爲致、然而已からば、時合をも不願、正米買置、其外米代銀取渡、義に付あつ、等閑と取斗致
し事由、止る處近來と姿にあつ、帳合米を正米掛繫に不相成、却あ右と爲に正米直段に
障り、義、無之共難申哉に付、年行司共始重立の米仲買を、品と申諭ひへ共不相用、不行儀及
増長ひに付、諸國客先と氣請にも拘り、自ら市場と衰微を招、様仕成、族不少哉に相聞、以
外と事にい條、元來堂嶋米市場と義を、諸國米直段と基本にあつ、其上米穀を以仕出の品を勿
論、諸品とも米直段を元として、賣出の道理にの上と、右米相庭と模様に寄り、万價に拘り

御觸及口達 嘉永四辛亥年

一九七三

享保度天明
米仲買
取締

掛米を一時
に買入る可
からず

かに付、享保年中格別御世話○株札を下付せることをいふなも有之、天明度にも米賣買方儀に付、米仲買共へ別段被仰諭○圖三四七、趣も有之、夫是厚相弁、已來銘一己利欲に耽り儀無之様、急度相慎、米仲買共相互に心を付取締、享保度已來規定を堅相守、實直に渡世相營、諸向に氣請宜、市場繁昌爲致、義を專一に心掛、正米帳合米とも平準に相庭相立、正路に賣買致、様精申合、掛引可致、若又此上にも右申渡を不相用、不直に取斗致、者有之に於ても、無用捨召捕、嚴重可申付、間、其節後悔致間敷旨、米仲買共一統へ能可申通、○圖二一〇及二一八を見よ、

○米方年行司の副書日
付は十月十五日なり、

(同上)

圖五六五 十月廿四日 酒造屋共掛米一時に不買立、入用度毎夫程ツ、買入様可致事、市在酒造に義、兼多觸渡置の次第嚴重に相守、隱造過造の勿論、都多不取締に取斗致間敷の、中迄も無之事の、然ル處酒造屋共義、配米に外掛米を唱、酒造取掛仕込仕廻迄に内、追々右配米に差加ひ米分をも、此節一時に買立、手當致置の族も有之、最寄米直段に拘ひ義も有之哉に相聞の條、當年に義の去戌年に模様を違、諸國稻作豊熟に趣に得共、一作而已にあり、去年來に入合にも不行届道理に間、時節前後を顧、右掛米に分一時に不買立、先繰入用度毎、夫程宛買入、何きにも米直段不障様、厚致勘弁可令掛引、自然此後右申渡相背、不直に取斗致の相聞のこおひて、急度可申付、右に趣三郷町中可觸知の趣○圖五六八三及五九三五を見よ、

亥十月廿四日

左衛門

加賀

(御觸書承知印形帳)

圖五六六

十月廿七日 古金銀引替所に儀、猶又來子十月迄、是迄に通被差置の事○圖五八六八及五九三九を見よ、

圖三〇八

十月廿八日 山本町夜番人天王寺屋與吉外壹名、盜賊差押の付、并安治川南三丁目上荷船乘市三郎外九名、難船助遣の付、夫に御褒美被下の事、

山本町夜番人

竹屋嘉介代判吉右衛門借屋

天王寺屋与吉

同町夜番人

同借屋

廣嶋屋宗八

盜賊を逮捕
せる天王寺
屋與吉外壹
名に錢を賜
ふ

其方共義、盜賊を差押、所と者中合、夫に召連訴出の段、兼多觸渡に趣相守、(奇)特に義に付、爲褒美鳥目貳貫文ツ、差遣の、

十月廿六日

- 安治川南三丁目
上荷船乘
- 市 三 良 安 兵 衛 德 兵 衛 伊 八 傳 兵 衛
- 九 兵 衛 彌 兵 衛 宇 治 良 安 助 米 藏
- 同南四丁目
目印山に罷在
- 同北三丁目
- 御觸及口達 嘉永四辛亥年

難船を救助せしむるに九名に錢を賜ふ

右を當月四日於安治川口、讃芻津の村浦織藏所持し廻船一艘、強風を難^(船)舟可及處、辺に居合、助ヶ遣、ニ付、爲手當鳥目五百文ツ、被下^(事)事、

○南組惣年寄の副書日付は十月廿八日なり、

(御觸書承知印形帳)

圖五九七

圖三〇九 十一月三日 穢多共取締事、

穢多の横暴

穢多共取締方義、兼あ^(柄)渡置^(五)〇圖三〇一、趣も有之處、近來風俗惡敷、履物類賣買并損直等、

右體の者あらば告訴す可し

町家者難題^(柄)懸ケ、其品柄不相當に代錢^(柄)繰り取、又と猥ニ大道を場取致シ、職道具杯取散シ、往來に妨致シ、其外賣賣屋小酒屋等に立入致飲食、見咎^(柄)得と、事六ヶ敷^(柄)掛^(柄)へ共、町家者外聞を厭、用捨致し置^(柄)ニ乗シ、次第に及増長、甚敷^(柄)至^(柄)あ^(柄)と、町家飼犬飼猫打殺盜取、或盜賊惡黨者宿^(柄)勿論、盜物賣捌^(柄)世話を引受、品^(柄)法外^(柄)及所業^(柄)ニ付、追^(柄)召捕、夫^(柄)御仕置^(柄)付^(柄)得共、兎角風俗不相直由粗相聞^(柄)ニ付、右躰^(柄)者召捕手當等嚴敷^(柄)付、穢多村年寄共へも、猶又格別取締方^(柄)渡置^(柄)ニ付^(柄)あ^(柄)と、町^(柄)こ^(柄)あ^(柄)りても其旨を存、以來穢多共身分をも不憚、法外^(柄)及所業^(柄)の、聊無用捨留置、早^(柄)月番^(柄)奉行所^(柄)に可訴出、

○町中家持の承知判形日付は十一月三日なり、

(御觸書承知印形帳)

圖三三〇 十一月廿七日 青蓮院宮貸付銀支配人并貸付所代り事、

青蓮院宮役人

- 渡邊河内介
- 林 甲斐介
- 小西 左内
- 小西傳右衛門

青蓮院宮貸付銀支配人及貸付所の變更

右を新戒町泉屋源兵衛方^(役)止宿、同人方^(役)あ^(柄)青蓮院宮貸付銀取^(柄)斗^(柄)段、斷出^(柄)ニ付^(柄)開届^(柄)條、序^(役)に節三郷丁中^(役)に可相通^(柄)ひ、尤是迄右宮用所攝^(柄)あ^(柄)東成郡天王寺村馬場先町無量壽庵^(役)に相詰^(柄)改^(役)人足立志津摩義^(柄)の、永^(柄)暇被差出、用所^(柄)あ^(柄)貸付銀取^(柄)扱^(柄)方^(柄)義相止^(柄)事^(柄)〇圖一七〇一及二四二八を見よ、

(御觸書) 亥十一月廿七日

(同上)

圖三三一 同日 南傳法濱上荷船乘孫三郎外十七名、難船助遣^(柄)ニ付、夫^(柄)御褒美被下^(柄)事、

- 南傳法濱 上荷船乘 孫 三郎
- 目印山^(柄)に罷在^(柄) 岩 右 衛門

難船人命を救助せしむるに三郎外十七名に錢を賜ふ

其方共外拾六人義、當月十九日安治川口あ^(柄)る、廻船高浪打込乘沈、難義あ^(柄)よ^(柄)ひ^(柄)節、早速右船^(柄)漕付、銘格別相働、海中^(柄)沈居^(柄)者共を引揚、厚介抱致^(柄)、人命を助^(柄)ヶ遣^(柄)段、兼あ^(柄)渡^(柄)難船助^(柄)ヶ方^(柄)趣、厚相心得^(柄)故^(柄)儀^(柄)ニ付^(柄)譽置、爲手當孫三郎外九人^(柄)鳥目壹^(柄)百文ツ、岩右衛門外七人^(柄)壹^(柄)百文ツ、差遣^(柄)、猶此上無油斷心掛^(柄)様可致^(柄)、

御觸及口達 嘉永四辛亥年

一九七七

右に通ず渡り條、所々者共承知可致し、

○御觸書承知印形帳には、其郷惣年寄の副書目付を十一月廿八日とし、御觸帳には廿七日とす

(同上)

觸五九六

十一月晦日 當月廿二日、従水戸中納言殿線姫君様へ、御結納被差上り事○體規圖三四五八

に同じ、尙圖五八七
○及五九四六を見よ、

觸五九九一五九〇〇

○觸圖九及
一〇に同じ、

達三三二

十二月十六日 門松注連繩等を忍々こつ取、或は押あ貫掛ひ儀仕間敷事○圖一
九

に同じ、

補達 六七

同日 ろくと穴打道中双六辻寶引と類禁可事○圖三〇

觸五九〇一

十二月廿二日 川筋掟事○圖一
一

觸五九〇二

十二月廿六日 當九月十二日夜、信州高井郡坂田村百姓孝太夫女房をめぐり娘てる外貳人を及殺害逃去ひ、同人雇人倉治事助六并松五郎人相書事圖

達三三三

同日 南堀江貳丁目夜番人坂屋與三七外貳名、盜賊差押又ハ孝心を竭ひこ付、并安治川南貳丁目上荷船乘利右衛門外十九名、難船助遣ひこ付、夫々御褒美被下

ひ事、

南堀江貳丁目夜番人

同町藤屋由三良代判
佐兵衛借屋

坂屋与三七

同町垣外番

道頓堀長吏下
若キとの五郎助弟子

長 四 郎

盜賊を逮捕
せむ坂屋與
三七外番名
に錢を賜ふ

其方共儀、盜とんせりひものと同類に相見へひものを合差押、訴出の段、兼あ觸渡し趣相守、
(奇)寄特と義こ付、爲褒美鳥目貳貫文ツ、差遣ひ、

十二月二日

釘屋町

才賀屋榮助支配借屋

川 村 屋 龜 吉

孝子川村屋
龜吉に錢を
賜ふ

右龜吉儀、父得兵衛と炭商ひんせり、夜と町内番人に被雇罷在ひ處、幼年と砌古釘を延ひの職業を覺、得兵衛家事賄方と手助ケひせり、拾壹ヶ年已前之ときを病氣に取合ひ節、乍幼年厚致介抱ひ得共、養生不叶致病死、得兵衛義後妻を專貴請、弟兩人妹壹人致養生、去戌年得兵衛儀病氣に取合ひ節、繼母をなすや合、實意に藥用致介抱、養生不叶終に病死ひせり後も、死跡懇に相營、繼母を太切にひぬ、弟妹を憐、家内睦間敷相暮、行狀相慎、若年この孝心寄特こ付譽置、鳥目五貫文差遣、年若し儀彌此上行狀相慎、渡世出情可致ひ、

安治川南貳丁目
上荷舟乘

利 右 衛 門

市 兵 衛

清 治 郎

源 三 郎

長

七

御觸及口達 嘉永四年辛亥年

一九七九

難船を救助
せる利右衛
門外九名に
錢を賜ふ

其方共儀、當月七日於安治川口、土佐國野根村大黒屋吉助舟五百石積空船、壹番水尾木辺迄罷下之處、俄ニ西北風強高波相成、南潟淺瀬に被吹寄、及難義の節、相詰罷在、早速右舟の漕付、精々相働、危難を助ケ遣の段、兼あや渡の難舟助ケ方と義、厚相心得の故に儀ニ付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣の、猶此上無油斷心掛の様可致の、

安治川南四丁目
上荷舟乘

- 傳 三 郎 安 治 郎 仁 三 郎 彌 兵 衛 傳 七
- 与 三 郎 長 兵 衛 安 右 衛 門 吉 三 郎 清 治 郎

難船を救助
せる傳三郎
外九名に錢
を賜ふ

其方共儀、當月十六日於安治川口、防嘉玖珂郡柳井定治郎舟、柳川米七百五拾石積罷在、壹番水尾木辺迄罷越、俄ニ西風強高波相成、南潟淺瀬に被吹寄、及難義の節、相詰罷在、早速右舟の漕付、精々相働、危難を助ケ遣の段、兼あや渡の難舟助ケ方と義、厚相心得の故に儀ニ付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣の、猶此上無油斷心掛の様可致の、

亥十二月廿三日 ○前令と共に、町中家持の
承知判形日付は廿六日なり、

(御觸書承知印形帳)

十二月廿九日 市中取締宜、火事沙汰も無之、一段と事この、猶此上無油斷世話
行届の様可致事 ○題二二五に同じ、但し、冬向火事沙汰少井盜賊
取締方も相付とあるを、「火事沙汰も無之」に改む、

嘉永五壬子年

○五九〇三 正月二日 徳川右衛門督殿御事、被任中納言、田安中納言殿を被稱の事 ○體裁圖四
五〇六に同
じ、

○五九〇四 正月三日 久世大和守殿御事、御本丸勤被仰付、内藤紀伊守殿御事、連判と御列
被仰付、右大將様へ被爲附、脇坂淡路守宅 ○安殿所司代被仰付の事 ○體裁圖五六、六八に
五八六、二、五九八、三、六一
二五、及六一八八を見よ、

○五九〇五 正月十一日 手嶋流心學道話の儀、隨分ひろまりの様、町内々世話可致の事
○圖七五
二に同じ、

○五九〇七 正月廿一日 問屋組合再興相成の分り、素人直賣買不相成、前々通其筋問屋へ
相拂可の事、

問屋再興の
分は素人直
賣買を禁ず

諸家國産類
も亦其筋問
屋に賣却す
可し

去ル丑年問屋組合仲間等停止の節、菱垣廻船に積來の諸品の勿論、都々何國々出の何品こあも、
素人直賣買勝手次第なるへ旨觸置の處、今般問屋調の上再興相成の分り、都々素人直賣買不
相成の間、如前々可相心得の、
一諸家國産の類、其外江戸表に相廻の品も、問屋に不限、銘々出入の者をも等引受、賣捌の義
も勝手次第の旨觸置の處、是亦調の上、問屋組合再興相成の分り、前々通其筋問屋に相拂可
の、
右通町中不洩様可被相觸の、

亥十二月

右、通江戸表におひて町奉行に被仰渡り段、被仰下り條、一統承知仕、尤大坂表と義も、今般調上、問屋組合等再興相成り分り、都も同様相心得可なり、右と趣三郷町中可觸知の地○圖五四五八・五八八一・及圖二三五六を見よ。

子正月〔廿一日〕

左衛門 加賀

(御觸書承知印形帳)

圖三三五 正月廿七日 瓦町壹丁目備前屋五郎兵衛借屋河内屋幾助外七名、盜賊差押ひに付、

夫と御褒美被下り事、

瓦町壹丁目 備前屋五郎兵衛借屋 淡路町壹丁目垣外番高田長 相生西町夜番人 菱屋藤兵衛借屋 同町垣外番天王寺長吏下 若キの元七弟子 河内屋幾助 源 美濃屋彌三良 六兵衛

其方共義、盜賊を差押、夫と所とをのゆ合、召連訴出り段、兼觸渡り趣相守、寄特と義に付、爲褒美鳥目貳貫文ツ、差遣ス、

正月十九日

安土町壹丁目 和泉屋重七支配借屋 同町垣外番高田長吏下 若キの源助弟子 上魚屋町夜番人 伊丹屋万兵衛支配借屋 南濃人町壹丁目夜番人 磯屋徳兵衛支配借屋 和泉屋清兵衛 市兵衛 河内屋久兵衛 平野屋藤助

○前文に同じ、

正月廿七日

(同上)

圖五九〇八 正月 日光道中徳次郎宿困窮に付、人馬賃錢割増し事○圖五七一七及六一〇一を見よ。

圖五九〇九 同月 中山道今須宿外五ヶ宿困窮に付、人馬賃錢割増し事○圖五七二三及圖一九五を見よ。

圖五九一〇 同月 東海道關宿奥州道中氏家宿外四ヶ宿困窮に付、人馬賃錢割増し事○圖五七二二及六一〇六を見よ。

圖五九一一 〇圖三三三に同じ、

補遺 六九 二月廿二日 追手外番場明地へ松木植付被仰付り事、

覺

來ル辰年朝鮮人來聘し節、當地於御城御行札(禮)に積被仰出り、右に付追手外番場明地見切りた然、

追手外番場明地に松樹を植付く

(御觸帳)

圖三三六 二月晦日 新淡路町河内屋甚兵衛支配借屋大坂屋宗兵衛、孝心奇特成者に付、御

褒美被下り事、

新淡路町

河内屋甚兵衛支配借屋

大坂屋宗兵衛

右宗兵衛義、常々兩親と意ヲ不背、誠實ニ仕向、父善兵衛存命中、聊宛菓物に類買調、一分ニ辻賣商ひのせり、家事賄ふに差加、父に手助けいせり罷在り内、母ふさ義七ヶ年以前病氣に取合、善兵衛俱に介抱し居り折節、同人も四ヶ年以前中風の症差發不相勝、兩親共起臥自

御觸及口達 嘉永五壬子年

孝子大坂屋宗兵衛に錢を賜ふ

由不相成、必至難澁之處、一藥用介抱等爲行届、其透問(に)の兩親日用給物等調、隣家(に)のものに留主中世話頼置、出商ひも精ヲ入相稼、兩親を太切(大)に相養ひひ得共、善兵衛義終(大)に養生不叶、去亥正月病死(い)後、佛事等懇(い)に相營、其上母ふさ義追、病氣差重(い)を、不相替藥用介抱爲行届、尤同人義氣力慥(い)に食事等相好(い)の方(い)に付あき、程能相勤、兩便(い)に穢物杯も其度毎(い)に叮嚀(い)に取片付、前同様商ひ(い)に罷出(い)の節(い)、留主中心付等(い)に義、隣家(い)に者に頼置(い)の付、病人見苦敷(い)の、近寄吳(い)のものも有之間敷(い)を心を配、衣類洗濯(い)にも自身(い)の多(い)、鹿服(い)から度も着替(い)させ、程を見合、湯沐等爲致も人手を不頼取斗遣、其身の諸事相慎相稼(い)に付、父善兵衛存生中(い)も三拾ヶ年余、書面(い)に借屋住居致(い)に得共、家賃銀爲滞(い)の義も無之、右躰長病(い)に老母を大切(い)に看病萬端爲行届、孝心ヲ竭段(い)、寄特(い)に義(い)に付譽置、鳥目五貫文差遣、年若(い)に義彌此上行狀相慎、渡世出(精)世可致、

子二月(○)南組惣年寄の副書日付は晦日なり、

(御觸書承知印形帳)

圖五九三 閏二月八日 五ヶ所朱座仲間再興被(い)付(い)の事、

朱并墨共、朱座(い)の外、江戸京大阪奈良堺に仲買(い)のものを付、掛札爲致、朱座并右仲買共を勝手次第買請(い)の様、寛政辰年相觸(い)の處、右仲買(い)の者差止(い)の間、以來座方直(い)に買受(い)の様可致、尤朱を朱座包(い)に儘、正路(い)に直段(い)ヲ以小賣致(い)の義不苦旨等、卯年相觸置(○)圖五五六、(い)の處、此度右五ヶ所仲買(い)の者、先前(い)に通(い)付(い)の間、都(い)に寛政度相觸(い)の通可相心得(い)、若此上出所紛敷品、内(い)に致賣買(い)の段於相聞(い)、吟味(い)に上急度答可(い)付(い)の、

朱及朱墨仲買の再興

右(い)に趣御料私領寺社領共、在町(い)に不洩様可被相觸(い)の、

子二月

右(い)に通從江戸被仰下(い)の條、此旨三郷町中可觸知(い)の也、

子閏二月(○)町中家持の承知判形日付は八日なり、

左衛門

(同上)

參考 二七 閏二月十日 火除(い)の事、

一當月十三日、御銘(い)に御宅(い)を北ノあき井戸水、朝辰の刻清さう(い)に汲入置、同申(い)に刻家根南ノ方々打(い)とめ、戌亥の方(い)にて打(い)まふ(い)を、

右(い)に通御成被遊(い)の、當年中火難相(い)のがれ、様承り(い)に付、此段御披露奉(い)上(い)、當日前書(い)に通無御失念可被遊(い)、以上、

閏二月十日

右(い)に通及承り(い)の由(い)に、町内(い)に書付を以(い)來り(い)に付、此處(い)に寫置(い)の事、

子閏二月十日

(御觸帳)

圖三三七 三月七日 火(い)に元入念可(い)、并火付(い)の者見掛次第可訴出事、

口達

火(い)に元(い)に儀(い)に付(い)の毎(い)に中渡、觸書をも差出置(い)に付、於町(い)に無油斷心(い)ヲ付(い)の義(い)に可有(い)之(い)に得共、至當春折(い)及出火、火廣相成(い)のも有之、致難儀(い)の者共不少趣(い)に相聞(い)の條、向後共別(い)に火(い)に

御觸及口達 嘉永五壬子年

一九八五

火災除の呪

春來出火多し

放火の者あらば届出づ可し

元入念可らず勿論、假令明借屋納屋等不致住居所こゝも、盜賊惡黨の共所爲こ寄、出火こ相成ゆも有之、右等こ者こ精こ遂穿鑿、追々召捕可被處嚴科義こ可有之ゆ得共、於町こも一町限り、年寄町人共す合、夜中繁々相廻り、明屋等の別あ心附可すゆ、尤火ヲ付ゆ躰こ者見掛ゆ、早速捕押訴出ゆゆ、急度御褒美可爲取義こゆ間、此段能々相弁、借屋末々迄彌嚴重可す合ゆ、

右こ通三郷町々末々迄不洩様可す聞ゆ事

○圖七九

子三月○次の令と共に、町中家持の承知判形日付は七日なり、

(御觸書承知印形帳)

圖三三八 同日 道空町平野屋宗兵衛借屋平野屋巳之助代判平五郎同居母つる、孝心奇特成者こ付、御褒美被下ゆ事、

道空町平野屋宗兵衛借屋

平野屋巳之助代判
平五郎同居母

孝女つるに錢を賜ふ

右こ者義、元南竹屋町平野屋由兵衛娘こゝ、幼少こ砌、父由兵衛相果ゆ後、母ゆゆ諸共他家に同家、亦こむつ外方に再縁ゆせゆゆ節、連子こて付添參、右方こゝもゆゆ義後夫と死別こ相成、猶亦他家こ同居致ゆ内、右巳之助を此ゆの養子こ貰請、當時こ借屋借請、家宅を構ゆ得共、巳之助も未幼少こ付、實家こ致養育、代判人平五郎他町住居こ付、家内ゆゆゆと貳人相暮罷在、元來此者義幼少こ砌より、万事母こ意を不背、誠實こ仕向、成長ゆ隨ゆ、布織或洗濯物木綿絞

僧侶の不如法

不如法の僧侶あらば役寺觸頭又は檀頭請中より戒告す可し

等こ手職ゆせ、少々宛々賃錢貰請、母を養居ゆ内、同人義四ヶ年以來、兩度も大病こ取合、起臥自由不相成ゆを、與度こ藥用介抱等爲行届、快氣ゆせゆゆ得共、生得病身こゝ其後も引籠勝こ付ゆも、同様藥用介抱等こ力を竭、其透問こゆ手職こ精ヲ入相稼、素方女手業こ義こ付、廉立ゆ儲錢も無之、貧窮こ相暮ゆ得共、其中方母相好ゆ品を貰調、程能相勸、其上年比こも相成居ゆ義こ付、婢養子相勸ゆゆの有之ゆ得共、母ゆ隨順ゆせ、同人存意こ協ゆ婢養子無之ゆ迎及斷、其身ゆ髪ゆ髻身形も不差構、質素こ致、近隣惡意こ者等方誘引請ゆゆも、物見遊參も勿論他出不致、諸責愼、家賃銀滞ゆ義も無之、右躰病身ゆ母を大切こ看病万端爲行届、孝心を竭ゆ段、寄特こ付譽置、鳥目五貫文爲差遣ゆ、年若々義彌此上行狀相愼、渡世可致出情ゆ、

(同上)

圖五九三 三月十四日 諸寺院こ住持所化僧、破戒無慙こ所業無之様、檀家講中こ者方精々心付可す事、

○前文圖五六七七に同じ、右こ過去巳年中觸渡置ゆ處、程立忘脚こ輩も有之哉、近比又こ所化僧こ類ゆ不及す、

一寺住僧ゆ内こも、遊所等に相越及遊興、亦ゆ洗濯女按腹療治杯号シ、婦女子を寺院ゆ呼入ゆ而已ならず、數日寺内こ留置及女犯、其外惰弱こ振舞も有之哉こ粗相聞、以ゆ外ゆ責こ付、早々行狀相改、銘こ身分を愼、學徳ヲ相磨、寺務專一こ可心懸ゆ、猶役寺觸頭も厚教戒ゆゆ、格別取締、戒律堅固こ爲相守、旧弊相去ゆ様可取斗ゆゆ勿論、法類組合等こゝも相互こ心付、如法質朴こ僧法研究ゆ様可致ゆ、役寺觸頭等遠國、亦こ同國こゝも場所相隔ゆ分ゆ、檀家講中

御觸及口達 嘉永五壬子年

一九八七

し者共中合、住持所化等及不身持ひ歎、亦い婦人狽猥ニ寺内ニ留置ひ義杯無之様、是亦精々心付、一統兼お觸渡し趣無違失相守可中ひ、此上こも等閑ニ相心得、不如法し取沙汰相聞於り、聊無用捨令吟味、役寺觸頭も可爲越度ひ條、其期ニ至後悔致問敷ひ、右し趣三郷丁中可觸知をの地、

子三月 ○御觸帳に、年寄の副書日付を十四日とす、

左衛門

加賀

(同上)

三三九 三月十八日 安治川北三丁目上荷船乘卯吉外十三名、難船助遣ひニ付、并木挽町南し丁夜番人和泉屋平助外六名、盜賊又い怪敷者差押ひニ付、夫々御褒美被下ひ事、

安治川北三丁目上荷船乘

卯

吉市次郎

嘉兵衛

市兵衛

新右衛門

同町

徳右衛門

正三郎

卯之助

正兵衛

藤三郎

上荷船乘

平兵衛

宗兵衛

安次郎

右し者共儀、當月三日安治川口こおひく、兵庫津渡海舟壹艘、強風こめ淺瀬に被吹付、及難儀ひ節、銘々右舟に漕付、精々相働、危難を助ケ遣ひ段、兼あ中渡難船助ケ方し義、厚相心得ひ故し義付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣ひ、

閏二月廿九日

難船を救助せる卯吉外十三名に錢を賜ふ

舉動不審なる者を逮捕せし和泉屋平助外壹名に錢を賜ふ

舉動不審なる者を逮捕せる山本屋吉兵衛外二名に錢を賜ふ

盜賊を逮捕せる下人彌助外壹名に錢を賜ふ

金銀貸借訴訟に伴へる諸弊

木挽町南し丁夜番人 播磨屋源兵衛支配借屋

周防町夜番人 天王寺屋吉兵衛借屋

助

駿河屋藤右衛門

其方共義、丁内見廻り、節、怪敷相見へい無宿せよを差押、所し者中合、召連訴出ひ段、兼あ觸渡し趣相守、寄特し義ニ付、鳥目貳貫文ツ、差遣ひ、

天満天神筋町 橋屋重兵衛支配借屋

同所瀬川町 播磨屋重兵衛借屋

右天神筋町垣外番天満長吏下若年者八郎兵衛弟子

山本屋吉兵衛

兵衛

長

兵衛

其方共義、丁内相廻りひ節、盜人を相見ひ怪敷者を中合差押、訴出ひ段、兼あ觸渡し趣相守、寄特し義ニ付、爲褒美鳥目三貫文差遣ひ、

西横堀新築地名田屋嘉兵衛 支配借屋伊丹屋吉兵衛下人

彌

助

卯之助

其方共義、彌助吉兵衛方へ脇差帶シ盜ニ入ひ者を打倒、差押ひ得共、手ニ餘ひ様子ニ付聲掛ケ、卯之助も加勢し上、不取逃ひ様致手當、所者中合、召連訴出ひ段、兼あ觸渡し趣相守、寄特し義ニ付、爲褒美彌助を鳥目貳貫文、卯之助を同壹文差遣ひ、

○南組惣年寄の副書日付は三月十八日なり、

(同上)

三五四 三月十九日 金銀貸付し節、證文印形等精々入念相改、都め正路し致取計、并右出入し節紛敷代人介添等差出中問敷事、

右し通六年以前未年觸渡置一を見よ、ひ處、近比亦こ心得方等閑ニ相成、兎角不束し及公事合ひ者不少ひ、元來金銀貸附し節、借請人共し印形入念爲引合ひ上、證文可取置筈し處、無其義、

御觸及口達 嘉永五壬子年

一九八九

證文の印形を檢せず

大盡金の貸付

金銀貸借を預證文の書式と爲す

証文類の讓與
代人訴訟

口入取次人等へ改方任置、取引のせり、追ふ濟方相滯及出訴、双方對決の期に臨み、印形相違に趣申立、糺相成の類間、有之、こまらに貸主共別あ不念に取斗を更發シの義に有之の處、却る最初に印形不分明に義乍弁、證文取置、甚敷に至り、大盡金に唱、身元宜敷者抔放逸にて、歩合に不抱、猥に金銀借入の附ケ込、高歩の貸附の而已ならず、口入料世話料等名目ヲ以、右借入高に内多分を引落シ、品を貪利奸計をよひ、夫是に義後日に相顯の時、外聞を厭、是非共親類所役人等を取暖、不更立様相濟シ可申を見込、取斗の族も有之哉に粗相聞、亦の普通に貸金銀證文あり、相手と者共先訴有之節、後訴に方引上ケ可相成と、奉行所取斗を差量、米穀并品物等預りの姿に仕成書付取之、内實の金銀貸出、右を借受の者も、眼前繰合相成の義を勝手ニ存、事實相違に書付へ調印致シ、常用相弁の義打忘、是亦追及出訴、對決に節故障に返答申立、或の金銀貸附諸品賣掛代滯有之の者共は、一應に沙汰も不致して、證文帳面類余人に讓渡并讓受、如何に及公事合の口と有之、殊に播磨の者共は多分病氣に由申立、代人訴訟而已致し、右に者義奉行所を輕に敷心得、猶亦紛敷代人取扱、不束に出入におよひの仕義に至り、本人を勿論所に者共迄も、重に不埒に更この、右躰に及所業の者共、先達を以來追、吟味の上、嚴重御仕置申付の義に有之、條、一統其旨を存、兼る觸渡に趣熟慮致、無違失相守、向後金銀貸出の節、證文印形等精々入念相改、都る不路に致取斗、紛敷代人介添等決る差出申間敷の、夫と所役人共も無益に出入不及様、厚心懸取扱可申、自然此後も如何に筋於有之の、無用捨吟味の上、當人を不及申、所役人迄も急度可申付の間、其段も相心得、

不埒に取斗無之様可致し、

右に通三郷町中可觸知の地、

子三月 町中家持の承知判形日付は十九日なり、

左衛門 加賀

(同上)

三月 來辰年朝鮮人來聘に付あり、郷中入用銀多分相掛り可申の間、前以達置

覺

一來辰年朝鮮人來聘に付あり、郷中入用銀多分相掛り可申の間、前以達置の様被仰渡の付、此段御通達可申、御承知置可被成、以上

子三月

北組 勘定場

(御觸帳)

四月朔日 妙法院宮御貸付金支配人増員并右貸付所之事、

妙法院宮御家頼

青木 内記

増人 横山 伊織

堂嶋中壹丁目

貸付旅宿 大津屋 保兵衛

妙法院宮貸付金支配人の増員

貸付所

御觸及口達 嘉永五壬子年

一九九一

○次の二令と共に、町中家持の承知判形日付は、四月朔日なり、尙圖二二八六及二三八七を見よ、

(御觸書承知印形帳)

○圖五九五 同日 大坂三郷小便と儀、攝河兩國と内、貳百三拾三ヶ村并加入村とへ引請と儀、復古ヤ付の事、

大坂三郷町、小便と義、先前方攝河兩國と内、貳百三拾三ヶ村并加入村と引請、取附來と付あり、仲間組合の姿と相當りゆに付、去寅年株札并問屋仲間組合等停止と節、右村とに限引請の義の勿論、世話人或融通人杯と唱、小便賣買と携の義も差止、町在相對次第可致取遣段中渡○圖五五〇ひ以來、双方自儘と取斗及増長、止ル處在と肥手不融通相成ゆ由相聞ひ、然ル處此度諸問屋組合共再興と渡の義と准し、町と小便と義、攝河兩國と内、貳百三拾三ヶ村并加入村とに引請と義、都め先前と通復古ヤ付の間、一統其旨可存ひ、尤小便と儀も、下屎同様商物とに無之、其上在と肥手不融通とあり、田畑養ひ方不行届、諸作出來劣、自然万價と抱拘ひ筋と付、町在と者共其義を厚相弁、不正路と取斗無之様嚴重可ヤ合ひ、

攝河貳百三拾三ヶ村并加入村々の小便請負再興
世話人融通人の設廢は引請村々の勝手次第たる可し

但、小便世話人并融通人と唱ひ者と儀、中買と譯も違、畢竟村と并理とヤ合ヲ以、取扱有之趣にて、表立ひ名目も無之上り、右と廉興廢と儀不及沙汰、此後村とヤ合次第可致ひ、右と趣三郷町中可觸知もの也○圖二二三を見よ

子三月

左衛門

(同上)

圖三三三 同日 百姓町人賣荷と分、武家或の宮門跡堂上方荷物と躰と仕成し、又と右向

口達

と家來と由ヤ成し、致旅行、其外賣荷を飛脚荷へ交ひ儀致間敷事、

賣荷を武家或宮門跡堂上方等荷物と躰と仕成、又と百姓(姓)町人と身分とあり、右と向と家來杯とヤ成、旅行致し、其外賣荷を飛脚荷へまへひ類有之趣相聞、不届と事と付、右躰と取斗致間敷旨等と義、十六ヶ年以前酉年從江戸表御觸九を見よ、有之ひ處、近年相弛、當表町人賣荷を飛脚宿と者ヤ合、武家方荷物へまへ、江戸其外に差下シひ類、間と有之哉と相聞、以と外と賣二ひ條、以來右躰と取斗決め致間敷ひ、自然此後も賣荷を武家方飛脚荷へまへひ類の勿論、其余と義共都め前段御觸と趣、不相用者有之様子相聞ひり、早速召捕嚴重可ヤ付の間、一統其旨可存ひ、

右と通三郷町中端と迄不洩様可ヤ通ひ事○圖二四六を見よ

(同上)

子三月

圖五二六 四月八日 中山道千曲川越貨錢割増と事○圖五七三を見よ

圖三三三 四月九日 本多加賀守殿參府と事、

本多加賀守事被爲召、四五日と支度と參府と事、

四月九日

(御觸帳)

圖五九一七 ○圖四に同じ、

圖三三三 四月晦日 安治川南四丁目上荷船乗八右衛門外十二名、難船助遣ひと付、并梶木

御觸及口達 嘉永五壬子年

一九九三

賣荷を武家方荷物に混じて發送するを禁ず

町吉田屋庄七支配借屋播磨屋熊太郎代判清右衛門下人庄七外男女四名、忠勤又ハ
孝心奇特成者ニ付、夫々御褒美被下事、

安治川南四丁目
上荷舟乘

八 右 衛 門

難船を救助
せる八右衛
門に儲を賜
ふ

右ノ者義、先月廿九日於安治川口、藝州三月郡橋村渡海舟政平船、強風ニ由淺瀬に被吹寄、損
所出来、水入相成及難義ハ節、迎ニ居合、早速右船ハ漕付、危難ヲ助ケ遣段、^(奇)寄特ニ義ニ付譽
置、爲手當鳥目五百文遣ハ、

同所
上荷舟乘

淺 右 衛 門 吉 兵 衛 作 三 郎 安 右 衛 門 儀 三 郎

清 治 郎 嘉 兵 衛 庄 三 郎 卯 兵 衛 留 藏

難船を救助
せる九右衛
門外九名に
儲を賜ふ

右ノ者義、三月十六日於右同所、紀高塩津浦源兵衛船、俄ニ強風ニ由淺瀬に被吹付、及難儀ハ
節、相詰罷在、早速右船ハ漕付、精々相働、危難ヲ助ケ遣ハ段、兼テ渡難船助ケ方ニ義、厚
相心得ハ故ニ義ニ付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣ハ、猶此上無油斷相心掛ハ様可致ハ、

安治川六軒屋濱
上荷舟乘

太 助

難船を救助
せる太助外

右ノ者義、^(共感カ)當月五日於安治川口、兵庫津ニ荷物積送りハ橋通壹丁目佐賀屋卯兵衛外壹人、乘

壹名に錢を
賜ふ

組罷歸リハ折節、高波打込船返リハニ付、右太助庄治良辺ニ居合、早速漕付相働、危難ヲ助ケ
遣ス段、^(奇)寄特ニ義ニ付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣ハ、

梶木町吉田屋庄七支配借屋
播磨屋熊太郎
代判清右衛門下人

庄 七

忠僕庄七に
錢を賜ふ

右庄七義、廿貳ケ年已前熊太郎父幸兵衛時代、奉公ニ有付實躰ニ相働ハ罷在內、拾六ケ年已前
主人幸兵衛致病死、其節熊太郎貳才ニ付、家業万端難取續、同人母ヲ親里に家内同家ニ罷在
ハ^(處カ)、渡世向抄々敷無之ニ付、後家ヲた俱々致心配、代判清右衛門相談ニ上、拾四ケ年已前
當丁内丸道屋三郎兵衛支配借屋に別宅ニ上、家事ハ代判清右衛門致世話、渡世向掛引等此者引
受、彌出情相働罷在、諸事^(實直カ)直實ニ取斗ニ付、ラム清右衛門相談ニ上、九ケ年已前當時ニ通致變
宅、同様此者万端引請、家業誠實ニ相働、年比ニも相成ハニ付、往々爲別家料半季毎ニ給銀等
貫請ハ得共、自用ニ不遺捨、度毎ニ外方へ相預ケ、亦々親元へ差遣ハ、熊太良義ハ生得病身ニ
ノニ付、後家ヲた俱々心配養育ハム、追々成人ニ付、亡主幸兵衛已前相働ハ主家へ奉公ニ差
遣シハ後も、彌此ハの渡世向相働ニ付、得意先等亡主幸兵衛存生中カも相増、日々早朝カ得意
相廻リ、夕方罷歸リ、夜分ハ自儘ニ他出不致、五節旬神更速平常ニ着用ニ相廻リ、遊藝見物
等ニ不罷越、後家ヲた意ニ不背、睦敷相仕、諸事相慎、主家身上向立直シ度一途ニ心掛、熊
太郎ヲ致^(大)太切ハ段、^(奇)寄特ニ付譽置、鳥目五貫文差遣ハ、

御觸及口達 嘉永五壬子年

孝子千之助
に錢を賜ふ

右千之助義、父文右衛門(藤)職渡世罷在ハ處、母せん拾壹ヶ年已前致病死、父文右衛門拾ヶ年已前々眼病相煩、職業難相成、無據按摩仕覺、渡世罷在、九ヶ年已前十月、妹むら致病死、父文右衛門愁傷、余不相勝ハ處、此者氣實躰成ハのニ、父ヲ致(大)太切、万事意ニ不背、日々未明ハ食物致煮焚相与ハ、父文右衛門夜分草臥ハ節モ、手足撫ヒむハ、太切(大)ニ取扱、同人義モ按摩渡世出情相稼ハ得共、何分病身ニあ不撈取、日用凌兼、困窮彌増ハ義モ、此者幼年ニい得共致心配、兼ハ見覺ハ藤細工職致出情ハ付、父ハ手助ケ相成、文右衛門相悦罷在、同人同年十二月頃ハ、追々眼病及全快ニ付ハ、按摩渡世相止、手馴ハ已前ニ藤細工職ハい得共、一旦必至困窮ニ迫、家賃等モ爲滯ハ處、此者十五六才頃ハ壹人前ニ仕事ハい、五六ヶ年已前ハ親子致出情、相應ニ取續出來、安堵ニ相暮、諸懸合モ勿論、家賃銀ハ滞無之、此者平生身分相慎、五節句其外休日ニあ相稼、物見遊參ニも罷越、出情ハい、孝心(奇)寄特ニ付擧置、鳥目五貫文差遣ハ、

安堂寺町五丁目
河内屋利兵衛支配借屋
中屋文右衛門悻

千之助

玉造平野口町
辰巳屋伊兵衛別家手代

右伊兵衛支配借屋

辰巳屋利助
子四拾三才

辰巳屋利助
の忠勤を賞
し錢を賜ふ

右利助、幼年ニ砌、主家先代伊兵衛方ハ奉公ニ有付ハ節、實躰相勤ハ付、同人時代別家爲致貴ハ得共、仕分銀等不貰請、其後主家ハ致通勤居、内、同人悻藤三良義、拾四ヶ年已前ハ濕病相煩、身躰自由難成ニ付、背ニ負入湯、其外叮嚀ニ介抱爲行届ハ付、追々及快復、且右伊兵衛差圖ヲ以、七ヶ年已前和嘉高市村古川坊條村新三良妹(二歳方)ヲ女房ニ呼迎、右忍ハ義モ日々主家ニ罷越、臺所所方取締罷在、然ル處右伊兵衛義、六ヶ年已前病氣取合ハ節、藥用介抱爲行届ハい共、終ニ養生不叶相果ハ付、右藤(三才)太良儀伊兵衛ト改名致相續、同人病身者ニ付、亡主伊兵衛心勞罷在ハ義モ相察、不相變情勤ハい、店方引受、身分相慎、二代引續三拾年余も主家(大)太切ニ心掛ケ、段、寄特ニ付擧置、鳥目五貫文差遣ハ、

農人橋貳丁目
錢屋清兵衛支配借屋
木屋虎之助代判佐兵衛下女

子三拾六才

忠婢なかに
錢を賜ふ

右千の義、河嘉吉田村百性(姓)又治良娘ニあ、主人虎之助父奎兵衛ト者ト、濃嘉出生ニあ、先年虎之助母ハい智養子罷越、養母トい家内三人相暮、他丁ニあ木綿商ハ致渡世ハ内、拾壹ヶ年以前寅年六月虎之助出生後、同九月ハ相果、其節ハなか乳母奉公ニ罷越、虎之助ヲ養育致罷在、七ヶ年已前虎之助五才ニ相成ハ節、父奎兵衛義、國元實家及斷絶、期ニ至、無據相對ニ上、養母トい離縁請、名前退、虎之助ヲ殘ニ置、實家ニ引取ハ跡、同人名前ニ相成、代判人ト他所住居ニあ、虎之助方無商賣ニ相成、取續方ニも抱ハ付、あハも一旦暇請ハ答ニ談

御觸及口達 嘉永五壬子年

ひ得共、幼少く虎之助ヲ老年に祖母すみ致養育、家名取續け義無心元、すみ義も心便無之の連、種々致心配の次第氣毒に存、且虎之助義、右躰出生無間も母さんと死別相成、かの養育請ひ義に付、別め同人ヲ相慕ひの愛情難忘、何分主人に爲筋を存、給料の不貫請、俱様ニ相働、虎之助を養育致し積り談、そまを爲致安心、暇ヲ貫ひ義の相止、其已來幼年虎之助并老年にそみと三人相慕ひに付あま、同人寸合、縫仕事を外方請ひ、又の仕覺と木綿を織糸績にいゝ、日用取賄、去、戌九月書面と借屋へ引越來、不相替績と出情致し、其透間こそ他見を不厭、雜菓子類ヲ背負賣歩行、無給こそ晝夜出情相働、虎之助を大切に相養ひ、日用小遣等差支の節、却る所持の衣類等違差出、家事取賄、其身の諸事相働、行狀も宜、右躰誠實ニ幼主ヲ守立、老年にそまを相育、出情相稼の段、心妙寄特に由相聞ひに付譽置、鳥目拾貫文差遣ひ、

北谷町松屋元藏支配借屋

坂本屋藤吉養娘

孝女ちうに
錢を賜ふ

右ちう義、農人橋壹丁目大和屋清兵衛實子にて、六才に節書面藤吉方へ養女に相成、成長に隨ひ、琴三味線爲習貫、藤吉の髮結働、同人女房みの人形下地張ひ義を手職にのゝる罷在の處、藤吉義拾七ヶ年以前病身に相成、渡世難出來難澁ひせしに付、ちう義養母の俱々致心配、習覺ひ琴三味線等と指南相始、弟子先を聊と謝禮貫請、日用相賄居の内、四ヶ年以前酉四月、

隣家を出火の類焼に逢、家財不殘燒失の多し、極難澁に落入、所々知ル邊に方厄介に相成、同六月漸書面と借屋借受致住居に得共、母みの義も近來多病こそ、別め取續方に抱に付、ちう義懇意に者相頼、其手筋ヲ近在迄にも琴三味線と指南に罷出、其日ヲ送居の折節、去、戌年五月以來、藤吉中風と症こそ不相勝、起居自由不相叶而已ならに、食物と色と相好、又夜中こそ氣隨ひ義と申聞ひ義も有之に得共、聊意こそ不背、相好の品買調、或弟子先こそ貫受の品持歸相与に、兩便と世話迄も心こ叶ひ様誠實と取斗、介抱爲行届、其上母みのも去亥七月比病氣差重に得共、藥用不致ひも、全藥料と失費ヲ存量の儀と心配ひも、兼右等と手當ひも一置の趣こそ成相働、醫師掛爲致藥用、殊藤吉右躰病症に付、穢物出來を手早く取片付、日々出情相働、夜分ひ及深更ひ迄も縫仕事致し、兩親を相養ひ、或知音と者聲養子相働に得共、父に介抱不行届の様相成ひも、不宜ひ逆程能申斷、勿論物見遊參等こそ罷越ひ義も無之、万事相慎、右躰病氣と養父母を大切に致ひ段、寄特に由相聞ひに付譽置、鳥目五貫文差遣ひ事、

○南組惣年寄の副書
日付は四月晦日なり、

〔圖五二八〕五月六日 本多加賀守殿御勘定奉行被仰付の事、

〔圖五二九〕同日 日光道中房川渡船役困窮に付、渡船賃錢割増の事

〔圖五三〇〕同日 南渡邊町小橋屋善兵衛支配借屋古田屋文吉同家ちか外壹名、孝心又忠

〔圖五三一〕同日 御觸及口達 嘉永五壬子年

〔圖五三二〕同日 御觸及口達 嘉永五壬子年

本多安英轉任

〔圖五三三〕同日 日光道中房川渡船役困窮に付、渡船賃錢割増の事

〔圖五三四〕同日 南渡邊町小橋屋善兵衛支配借屋古田屋文吉同家ちか外壹名、孝心又忠

御觸及口達 嘉永五壬子年

勤奇特成者ニ付、夫ニ御褒美被下事、

南渡邊町
小橋屋善兵衛支配クレーヤ
古田屋文吉同家

孝女ちか
に
錢を賜ふ

右ちか義、亡父武助と素々右渡邊町家持丁人ニあり、同人并母妙照前名かた兄豊吉諸共相暮、藥種渡世罷在の處、五拾壹ヶ年已前父武助致病死、其後母妙照後夫貫請の處、不身持ニ付致離縁、兄豊吉武助と改名のせし、相續罷在の處、妙照義多病ニあり、右武助并此者も、其比年若故、商賣向院ニ出來兼のニ付、追々身上向不如意相成、家屋敷賣拂、書面小橋屋善兵衛借屋借受、細々致商賣居の内、武助義女房貫受、倅文吉出生のふ、妙照義貳拾一ヶ年程以前病氣差重、家事賄の世話も出來兼、追々致老衰のニ付、武助倅文吉名前にて、右借宅に裏借屋、當時に通隱居所に借受、此者付添介抱罷在の處、武助義勝手ニ付、拾ヶ年已前權右衛門町泉屋源兵衛借屋へ致變宅、仕來に渡世致のニ付あり、同人商賣向手足兼のニ付、倅文吉義も其比手旁引越、右隱居所に此者壹人妙照付添、藥用介抱致し、右透間この織縫賃仕事等出精相稼、妙照相望の食物を勿論、諸事入用等相賄、同人義四ヶ年已前足なへ相成、身體自由難出來のニ付、猶更傍を不離、兩便に致世話、且入湯相望の節の、湯屋へ連行のあり多人數入込にあり、自然怪我等有之のあり如何に付、近隣懇意の者に湯焚の節相頼、脊負連行、入湯爲致、殊に若年比方も縁付に義ヲ來の得共、只母に病氣を厭、其儀相斷、懇に介抱行届、勿論母妙照長に病氣ニ付、物

入等も相嵩の故、無油斷出精相稼、尤書面に年比相成の得共、以前も身分相慎、鹿服を着、物見遊參等不罷越、孝養を専に心掛の段、女に身分ニあり別寄特に由相聞のニ付譽置、鳥目七貫文差遣の、

車町

嶋屋利藏代判庄兵衛家守

大和屋伊兵衛

大和屋伊兵衛の忠勤を賞し錢を賜ふ

右伊兵衛義、生國伊勢名張本町徳田屋甚七倅ニあり、幼名徳松と云の節、四拾貳ヶ年以前、當表唐物町四丁目八幡屋忠兵衛下人善七義と同國の者ニ付、同人手續ヲ以、順慶町五丁目檜波屋市兵衛方へ奉公ニ有付、實跡に相勤のニ付、拾九ヶ年已前此者伊兵衛と改名、主人市兵衛借屋に致別宅、商賣向仕分等別段不請、諸道具少々并に得意先貫受罷在の處、前書市兵衛義、貳拾ヶ年已前病氣ニ付、種々藥用介抱爲致の得共、養生不叶相果のニ付、市兵衛倅伊三良儀、市兵衛と致改名相續の處、不如意相成のニ付あり、市兵衛母志やう倅伊三良娘の等難澁に成行、此者致心配、爲賄料節季毎に銀五百目ツ、差送り居の得共、市兵衛義身上不如意にあり、家屋敷の質取主淡路町壹丁目米屋常七方へ流込、猶亦同人方へ身軀限り等相渡、家内不殘生玉社地河内屋利助方へ引取、市兵衛同所にて生花致指南相暮罷在の得共、難取續、追々此者方へ無心々越、是迄凡金五拾兩余も相贈の上、母并小兒共難立行、退轉可及義を相歎、志やう安心した也、前書伊三良名前ヲ以、順慶町五丁目炭屋治良兵衛貸屋借請、志やうよ下女差添別宅、此者致入

御觸及口達 嘉永五壬子年

魂の長堀心齋町袴屋政七相頼代判爲致、節季毎に金四兩ツ、當時に至迄差送、此者義拾ヶ年已前書面と丁内に致變宅、主家大切こい多し、前書伊三良い義の此者方へ引取致世話、追々成人相成、商賣向爲仕覺罷在ひ内、いせ義拾六才相成こ付、去、戌年此者手元にて相應に荷物等取捨、本町三丁目山城屋佐兵衛方へ爲嫁付、伊三郎の今以此者方にて守立罷在、其上志少う意こ不背、珍敷品等有之節の相送、諸度心ヲ用ひ、主家年同等の此者方にて相營、行狀相慎、僉服を着、物見遊參等こも罷越、大切こ心掛ケひ段、寄特こ付譽置、鳥目拾貫文差遣、

子三月○前の二令と共に、町中家持の承知判形日付は五月六日なり、

(御觸書承知印形帳)

○

圖五〇

五月九日 青物市場問屋組合再興ヲ渡ひ上り、素人共諸青物類直賣買致問敷事、

天満青物市場へ在方々差出ひ諸青物類、素人直賣買不相成義と處、去、寅年問屋仲買組合停止被仰渡ひ後、商法相乱、品々差支ひ筋も有之ひこ付、去、亥年右問屋仲買組合再興被仰出、諸商賣共都如前品何品こ不寄、其筋問屋に可相拂段も渡ひ義と有之ひ處、右中絶中流弊こ泥、又と不心得いものも有之哉、市中船宿亦と商人共致直買、八百屋小店等直賣ひ多し、或在、出口に商人共出迎、途中おむく買取、門先演先等こ賣捌ひもの有之、市中問屋仲買共商賣と差支こ相成、難義と旨願出ひ、右青物市場と義、今般問屋組合再興ヲ渡ひ上り、外こあ右躰と義致問敷事こひ間、以來市場に可差出諸青物類直賣買致問敷ひ、自然紛敷仕方有之ひい、吟味と上急度可及沙汰ひ條、心得違無之様可致ひ、右と趣三郷町中不洩様可觸知者也○圖五〇二七及六二二二を見よ、

天満青物市場問屋仲買の再興

青物類の素人直賣買を禁ず

子五月○町中家持の承知判形日付は九日なり、

左衛門

(同上)

○

圖三三五

五月十七日 質素儉約と儀こ付、去、寅年以來觸書と趣不弛様、堅可相守ひ事、

口達觸

(一覽)

一世上一統花美と風儀成行ひこ付、質素儉約と儀こ付、十貳ヶ年以前丑年七月、其後流弊と筋風儀と抱ひ廉と取締と義、追々相觸ひこ付、御取締御改革と御趣意、永と貫通可致の勿論と處、去、亥年諸問屋仲間組合再興被仰出ひこ付あり、最前右問屋仲間組合停止被仰出ひも、御取締御改革と同時こ付、心得方致混雜、御取締と筋も無何と弛ひ哉こも相聞、以、外と更こひ、御取締御改革と義の、享保寛政と度被仰出ひ次第こ基、猶世上風儀と抱ひ義等相改ひた然、追々相觸ひ義こあ、問屋仲間(御觸書)再興と筋と、一樣と更こ無之ひ條、篤と致弁別、去、寅年已來追々と觸書と趣不弛様、銘と堅可相守、自然以後違失と族於有之ひ、急度可令沙汰ひ、右と趣三郷町と末と迄不洩様可令聞壹○圖二一五六を見よ、

子五月○町中家持の承知判形日付は十七日なり、

左衛門

(同上)

○

圖五三 五月十九日 石谷因幡守殿大坂町奉行被仰付ひ事、

石谷因幡守○移義、今十九日大坂町奉行被仰付ひ段、土屋采女守殿被渡ひ、此旨三郷町中可觸知者也○御觸帳に下札あり、圖四五二六の下札と大差なし、尙圖六〇一二を見よ、

子五月十九日

左衛門

(同上)

○

圖七九 五月廿六日 石谷因幡守様御到着ひ事、

御觸及口達 嘉永五壬子年

11011

儉約令は諸問屋與廢令と關係無し

町奉行石谷穆清

因幡守様、今日當表御到着被成の間、此段承知可有之、以上、

子五月廿六日

南組惣年寄

(同上)

圖三三六

五月廿九日 天滿攝津國町大和屋幸助支配借屋根來屋喜八伴藤三郎外女壹名、孝

心又の貞節奇特成者ニ付、夫と御褒美被下事、

天滿攝津國町
大和屋幸助支配借屋
根來屋喜八伴

藤三郎

孝子藤三郎
に錢を賜ふ

右藤三良義、父喜八と加嘉日吉村百性(姓)にて七右衛門伴、廿壹ヶ年已前辰年妻子諸とも當地に引越、日雇働致渡世、此者儀の拾貳歳に比、攝碭難波村中丁疊職河内屋喜兵衛方へ、拾ヶ年年奉公に罷越の後、喜八追及老衰、日雇働も難相成、素方困窮相暮シ罷在の義を深く心配ひ、主人に申断、日主家職業仕舞の上、纔に儲可致及深夜迄相働、休日連夜同様相働、聊宛別段に賃錢貰請、右貰溜に錢貯置、年々七月十二月兩度に金壹兩余ツ、其外折々小遣錢等相貢、主家手透に砌を暇を乞兩親を相訪、好品等を買調、不行届無之様ひ、毎年主人が貰請に仕着せ等も兩親に相贈、自分の僉服ヲ着、主家大切に相働罷在の處、五ヶ年已前申年年季相滿の付、仕分料と一錢百貫文并諸道具類等貰請ひ得共、其儘主人に預ケ置、其後の主家に被相雇、奉公中同様大切に相働、右仕分貰の後、節季毎に金貳兩ツ、相貢、兩親日用

と賄万端不行届無之様致し、去亥三月姉とへ外方へ嫁付の節、錢三拾貫文余差贈、身と廻相調遣、平日身分相慎、物見遊參等にも不罷越、孝養を專に心掛ケの段、寄特に由相聞のニ付譽置、鳥目五貫文差遣ひ、

天滿八丁目
針屋忠右衛門借屋
堺屋貞助女房

セ

先

貞婦とめに
錢を賜ふ

右と決義、夫貞助と豆腐屋渡世にて、同人方へ嫁付の後、男子出生ひ、得共、無程相果のニ付、天滿綿屋町長柄屋佐右衛門娘をのを養女に貰受、家内睦敷相暮居の處、貞助義六ヶ年已前未年、疝中風差發の付、藥用爲行届ひ得共、手足等も不叶様成行、兩便を勿論寢起に至まで、厚介抱ひ、相好の食物等も夫と相与に、聊夫と意に不背、日々未明か家業出情相稼ひ得共、女と義且の夫病中物入多、追々困窮差迫、付、渡世と透の按腹療治相稼、儲錢ヲ以ケ成に相暮、右兩職に付得意先に罷越の節、夫と服藥并給物等相調置、娘をのへ付、傍に爲付添、隣家にも懇に頼置、家更向万端心ヲ付、諸掛合無之、右姉女と手業をの渡世向取續、長病と夫ヲ致大切、貞節ヲ專に心掛ケの段、寄特に由相聞、ニ付譽置、鳥目三貫文差遣ひ、

○南組惣年寄の副書日
付は五月廿九日なり、

(同上)

圖三五九三

○圖五
に同じ

圖三三七

六月朔日 地車太鼓、糸りもの等飾又と藝者と衣裝、自今木綿晒を可相用、右届

御觸及口達 嘉永五壬子年

二〇〇五

出上及見分事、并地車行逢節、曳違を唱、事六ヶ敷掛間敷事〇圖二一七、
八に同じ、

補遺 七三 同日 女髮結ニ髮結セハ儀、并湯屋男女入交ニ儀不相成事、
當月朔日惣御年寄中左通被仰渡ハ、

一此節女髮結流行いふハ趣相聞ハ、女髮結ニ髮結セハ義不相成段、兼被仰渡有之義ニ付、
其旨無違失可相心得ハ、

一湯屋男女入交リニ義も不相成段、兼被仰渡も有之處、此節多入交り入湯可致趣相聞、以來
右様ニ義無之様、急度可相心得ハ〇圖七三、
五を見よ、

(御觸帳)

補遺 七三 六月五日 失物取調方相改事、

質屋古道具屋古手屋仲間再興ニ付、名前帳取調出來、向後失物觸達右三商ニ者直ニ相廻シ
ハ、右ニハ模様品物帳等ニ義も、町ニ不及取扱、此段可被相心得事〇圖六三〇及
七八二を見よ、

子六月五日

掛惣年寄

(御觸帳承知印形帳)

補遺 七四 六月廿八日 火元入念可事、

早打續、間火元念ヲ入、用水汲溜等行届ハ様、精ニ可被合ハ、以上〇圖二三一七及
二三二九を見よ、

六月廿八日未上刻

南組惣年寄

(同上)

女髮結の禁
男女混浴の禁

盜難紛失品
の調査手續
改正

火の用心

圖三三六

六月廿九日 安治川南四丁目上荷船乗平三郎外十五名、難船助遣ハニ付、并内平

野町壹丁目帶屋宗七借屋柳屋新兵衛、盜賊差押ハニ付、夫ニ御褒美被下事、

安治川南四丁目
上荷船乗

平三郎	伊三郎	徳藏	嘉兵衛	儀助
十三郎	忠助	淺吉	勝藏	佐吉
房吉	源九郎	長松	平治郎	龜吉
友吉				

右ニ者共義、先月十一日同廿六日、安治川口於て、廻狀(船)武艘俄ニ強風ニお淺瀬へ被吹付、難儀
ニおよビハ節、迎ニ居合、又出役ニ者差圖ニ隨ハ、早速右船ハ漕付、精ニ相働、危難を助遣
ハ義、兼あチ渡難舟助ケ方ニ義、厚相心得ハ故ニ義ニ付譽置、爲手當平三郎外五人ハ鳥目五百
文ツ、忠助外九人へ同壹貫文ツ、差遣ハ、

子六月十九日

内平野町壹丁目

帶屋宗七借屋

柳屋新兵衛

其方義、隣家源助方頼を受、同人留主中心付ハせし居、内、右方表ニベリを明、盜ニ立入ハ
ハの差押ハ段、兼あ觸渡ニ趣相守、寄特ニ義ニ付、爲褒美鳥目貳貫文遣ハ、

御觸及口達 嘉永五壬子年

二〇〇七

難船を救助
せる平三郎
外十五名に
錢を賜ふ

盜賊を逮捕
せる柳屋新
兵衛に錢を
賜ふ

○南組惣年寄の副書日
付は六月廿九日なり、

(同上)

三三九 同日 炎暑に砌こみ共、火に元無油斷入念可事、

口達

暑中と雖も
火の用心を
怠る勿れ

火に元無油斷入念可事、火に元無油斷入念可事、得共、土用入已來照續か付あり、諸品乾キ火移少く可有之、暑氣に節の火災無之と、心弛ゆ等閑相成故、既此頃及出火時宜に付、炎暑に砌こみ共、無油斷火に元念入、丁に用水汲溜置、夜番人とも見廻り無忘様可事付、右に趣三郷町々末迄不洩様可事聞事○圖二九九八及
○圖七九四を見よ、

子六月○南組惣年寄の副書
日付は廿九日なり、

(同上)

三三〇 七月朔日 七夕短冊竹精靈祭の品々、川へ捨間敷ひ、尤右品々を 公儀御入用

こめ船を出し、取捨させし事○圖二八
六に同じ、

五三三 七月六日 川筋掟事○圖一
二に同じ、

補達 七五五 同日 千日參七墓廻り者、鉦太鼓を携ひ儀可爲無用事○圖七二二に同じ、但し、
「先達相觸置」とあるを「是
迄相違置」
に改む、

五九四 〇圖一
一に同じ、

補達 七六六 七月八日 穢多雪踏直り者共、下駄に齒入爲致間敷事、

一下駄齒入渡世り者町内相廻りひ處、近來穢多雪踏直しもの、右下駄に齒入致シゆ由、右を先年通り夫々相分りひ様可致旨被仰出ひ付、爲直ひ者も相心得ひ様、口上こめ御中渡有之ひ、

穢多に下駄
の齒入を爲
さしむ可か
らず

以上、

子七月八日

(御書承印形帳)

五三五 七月九日 素人こめ砂糖荒物仲買同様渡世致間敷事、

右に通十二ヶ年已前丑年相觸○圖五四二
四を見よ、ひ處、其後諸株問屋仲間組合等停止、素人直賣買被仰渡ひ付、前書觸書に趣弃捐に相心得、仲買以外、素人共勝手次第諸國在に賣捌ひ付、仲買とも荷物不捌こ難澁ゆ由、然ル處今般諸問屋組合再興被仰出ひ付あり、前書觸渡に趣相心得、素人こめ仲買同様渡世致間敷ひ、自然相背こめひ、吟味に上急度可令沙汰ひ、右に趣三郷丁中可觸知もの○圖六五五
五を見よ、

子七月○町中家持の承知判
形日付は九日なり、

因幡
左衛門

(同上)

五三六 七月十三日 絞草絞油共直段下直に相成ひ様可心掛事、在に仲買を稱、油稼をも

不致素人共兩種物賣買に携中問敷事、村々兩種物に賣口、町在油稼人と絞油賣口、大坂油問屋同仲買に絞油賣口并買口事、

油相場に義、絞草直段に絞入用等元附に見合、并菜種綿實等豊凶に差別も有之、何きに絞草直段より、油相場を生しひ筈可有之に處、近來油相場に引當、絞草賣買ひ多し、本末及混雜ひに付あり、油高直に隨ひ、絞草直段引上ケ、右引上ひ直段猶又油相場へ相響、先繰次第送りこ直段引上ケひ由相聞ひ條、先達米高直に節諸色にも相移、夫々高直に相成ひ得共、去秋已來

御觸及口達 嘉永五壬子年

二〇〇九

油相場は絞
草の直段に
因る可し

無株にて砂
糖荒物仲買
類似の業を
營むを禁ず

絞草の直段は其作柄の豊凶に因る可し

株仲間解放中に在る種物仲買の弊

在方仲買を禁ず絞草の買口

絞草の買口

兩種物問屋の再興と右問屋の業務

米相場引下ケ、殊當子年と義、在、菜種出來(柄)、隨分宜か趣(柄)の上と、絞草絞油とも追々下直(二)可相成處、無其儀段、如何と亘(二)ひ、日用と油高直(二)にての諸民政難儀(二)に付、前々方厚御世話も有之義(二)、間、在、おゐての絞草出來方(二)に應じ、相當と直段を以、成丈ケ下直(二)可賣出(二)ひ、大坂絞油屋始在、油稼人共其程を考、直段引上ケ糶買等決る致問敷(二)ひ、當節新菜種賣買專と義(二)に付、心得違無之様可致(二)ひ、

一 去々寅年株札并問屋仲間組合等停止、諸品素人直賣買勝手次第相成(二)ひに乘り、在、おゐる仲買と唱、油稼をも不致素人共、兩種物賣買(二)に携、徳用取(二)ひ義及増長(二)ひ由(二)ひ、右株賣買手越相成(二)ひ故、絞草絞油とも高直相成(二)ひ哉(二)に相聞、其上右仲買と唱(二)ひをの、兩種物賣買(二)に携問敷旨、前々中渡有之處、猥再發(二)ひぬ段、以、外と亘(二)ひ、既此度諸問屋組合とも調(二)上、再興相成(二)ひ分(二)ひ、都お素人直賣買不相成、間、前々(二)に如ク可相心得旨、御觸も有之義(二)に付、旁其段嚴重相守、在、仲買と唱、油稼をも不致素人共、兩種物賣買(二)に携(二)ひ義決る不相成(二)ひ、且大坂絞油屋始在、油稼人共、絞草と義(二)は是迄と振合(二)を以、寂寄村(二)、百性共と相對次第直買致(二)、又此度調(二)上、再興相成(二)ひ兩種物問屋を賣出(二)ひ分をも買受、出精相稼可(二)す(二)ひ、

但、村と兩種物と義(二)ひ、大坂絞油屋始寂寄在、油稼人共に賣渡、又々運送等と便利(二)に寄、兩種物問屋へ差送り(二)外、他所積等不相成旨、兼お中渡有之趣相守、不取締(二)義無之様可致(二)ひ、且此度調(二)上、再興相成(二)ひ兩種物問屋義も、國々より廻着と菜種綿實等買受(二)外、寂寄在、より差送(二)ひ分、是又前々(二)に如買受、町在油稼人共に平等(二)に行渡(二)ひ様心懸可取捌(二)ひ、勿論右賣

株仲間解放中に在る種物仲買の弊

町在油稼人の絞油賣口

油仲買の絞油賣口及買口

大坂油問屋の絞油賣口

方買方とも無謂直段引上ケ問敷(二)ひ、

一 右躰近年諸品素人直賣買勝手次第相成(二)ひ亘(二)寄、町在油稼人共絞油(二)分、銘と手元(二)外他國賣、并寂寄小賣屋におろし賣、或大坂油仲買共は直賣致(二)、同所油問屋に、出油相減(二)ひに付、自然相場高直(二)に相成(二)ひ一基(二)お、其上右油問屋を江戸積廻り油高(二)も抱(二)ひ由相聞(二)ひ、然ル處此度前條(二)通り諸問屋組合等再興相成、諸品賣買方(二)と義(二)に付(二)おも、御觸面と趣弁別致シ、在、油稼人共絞油(二)分、大坂油問屋に差出、猶も出精増(二)ひ分を以、住國一國限直小賣致(二)ひ義(二)の格別、他國賣致問敷(二)ひ、尤大坂絞油屋共義も、銘と手元(二)と絞油と不殘同所油問屋に賣渡可(二)す(二)ひ、尤大坂地廻と唱、三郷并町續在領(二)と義を、兼お油仲買共賣場(二)に差定有之義(二)に付、大坂絞油屋共直小賣不相成(二)ひ、右油仲買共入用油(二)ひ、油問屋共を買受(二)外、決る他と手(二)を扱買致問敷(二)ひ、勿論右地廻賣場(二)外、兼お取引仕來(二)ひ故を以、他所を油注文受(二)ひ節(二)ひ、油問屋へ中談、差支無之様可致(二)ひ、

但、攝務と内灘目并水車新田水車油稼人共絞油(二)分、江戸大坂へ差廻方(二)と義(二)ひ、兼お仕來も有之、是又前々(二)に通り可相心得(二)ひ、

一 大坂油問屋共油賣買方(二)と義も、是又前々(二)に通相心得、江戸大坂と融通(二)ヲ專一(二)に心掛、精と取斗、決る新規と自法等相立(二)問敷(二)ひ、
右と趣觸渡(二)ひ、尤大坂油賣買元方取締主法(二)と義、追お中渡(二)ひ義も可有之(二)に得共、差向一統此旨相守、賣買方口錢等も成丈ケ引下ケ、正路實直(二)に渡世可相營(二)ひ、總お直段(二)と高下(二)と、其筋と者

共賣買方、掛引も寄事付、銘一己と利欲不抱、綾草油直段も下直に相成様、能く勘弁取斗可申、若又此後も不良仕方を以テ、夫と直段引上ケル者有之様子相聞、急度可令沙汰、

右と通三郷丁中可觸知者之、○圖五四九六及六四八四を見よ、

子七月 ○町中家持の承知判、形日付は十三日なり、

因幡

左衛門

(同上)

圖五九七 七月十八日 東海道天龍川渡船賃割増事 ○圖五七三九及六一一七を見よ、

圖五九八 ○圖五六六に同じ、

圖三三二 七月十九日 新規仲間加入者共、多分と禮銀振舞杯爲致間敷事、

口達

此度問屋調と上再興相成分、都素人直賣買不相成間、前々如ク可相心得旨等と義、從江戸表御觸有之付、大坂表と義も問屋組合共再興相成分、同様相心得可申段、當正月相觸置○圖五九〇、處、右問屋組合等と内、心取違者も有之、其後仲間加入者有之節、前々仕來の連、其品柄不相當と禮金又と振舞料杯乞ひ分も有之哉と粗相聞、右躰前々如可相心得旨申渡の義、賣買筋と義、外子細無之處、元仲間と者共身勝手に引付、不直と及談の段、不埒と至こい條、早々相改、此後新規仲間加入者有之、兼申渡置の通り、其者共より多分と禮金振舞等爲致間敷と勿論、諸申右申渡と趣無違失相守、不取締と義

仲間新加入者より多額の禮金を振舞料等を徴するを禁ず

無之様精と心懸ケ、銘と渡世正路實直に可相營、自然此上も欲心迷ひ、右申渡を不相用者有之、吟味と上嚴重可申付、一統此旨ヲ存厚可申合、右と通三郷丁中端と迄にも不洩様可申通事 ○圖二二八、九を見よ、

子七月 ○町中家持の承知判、形日付は十九日なり、

(御觸書承知印形帳)

圖五九二 七月廿一日 京都東山光雲寺祠堂金、相對を以借請ひもの、元利無滞可相濟事 ○三七〇八に同じ、但し、昭和二年迄とあるを、「寛政六年迄」に改む、

圖三三三 七月廿四日 白米小賣直段儀、米相場に應じ正路と賣方可致事、

口達

町と搗米屋共白米小賣直段と義、堂嶋米相場高下と釣合、不相當と義無之様可致と勿論と申こい處、右搗米屋共と内こ、比日と風雨と申寄、俄と白米小賣直段引上ル者も不少哉と粗相聞、右風雨と義、當節稻作出來方と差障ひとも不相聞、既堂嶋米相場、盆後と例年し如、俵別内味升目と見込も格別相減由と付、旁以盆前と於賣直段引下ル方と有之上と、全搗米屋共一己と利欲と抱、右躰仕成の義を以て外と申こ、都素小賣直段引上ルもの、身薄と者共別致難儀の筋と付、其段能く相弁、早々正路と直段と相改可賣出、尤夫と所と者共も精と心を付、可致世話、自然此上も心得違、搗米屋共其外米商ひと携ひもの、一同不直と取斗致シの様子相聞、無用捨召捕、嚴重可及沙汰の間、其期と至後悔致間敷、右と趣三郷町中搗米屋共と別と義、其外一統不洩様早と可申通事 ○圖二二〇、二二三、二二四、二二五を見よ、

私利に耽り白米小賣直段を引上ぐ可からず

子七月○町中家持の承知判、
形日付は廿四日なり、

(御觸書承知印形帳)

三三三 七月廿八日 安治川南四丁目上荷船乗治三郎外九名、難船助遣ひニ付、夫々御褒美被下事、

安治川南四丁目上荷船乗

治 三郎 彌兵衛 嘉兵衛 宇兵衛 市藏
利 八常治郎 源三郎 清治郎 岩右衛門

日印山ニ罷在
岩右衛門

其方共義、當月二日於安治川口、淡路國津志浦綿屋武兵衛所持魚船壹艘、俄々強風ニあ高浪被打込、乗沈、及難義節、辺ニ居合、早速右船ニ漕付、精々相働、危難を助ケ遣段、兼あ中渡難舟助ケ方ニ義、厚相心得ハ故ニ義ニ付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣、

○南組惣年寄の御書日付は七月廿八日なり、

(同上)

三三七 八月十三日 石谷因幡守様御産穢事、

因幡守様、奥方様昨夜御出産、御女子御出生ニ付、來ル十八日迄御産穢相成ハ間、此段承知可有之ハ、以上○三三九七九八を見よ、

子八月十三日

北組惣年寄

(御觸帳)

三五〇 ○三三九七九八に見よ、

三三四 八月十六日 銅延板致所持ハ者々、銅座へ賣上可事○三三八二一三八に同じ、尙三三九七九九を見よ、

三五五 八月十九日 川路左衛門尉殿參府事、

川路左衛門尉事被爲召、四五日ニ支度ニ參府ニ申、

八月十九日

(御觸書承知印形帳)

三七九 同日 石谷因幡守様御月番被成御勤事、

因幡守様、今十九日ハ御月番被成御勤ハ間、此段承知可有之ハ、以上○三三九七九八を見よ、

子八月十九日未下刻

北組惣年寄

(御觸帳)

三三六 同日 町中ニ隱賣女差置間敷事、

口達

隱賣女差置、遊女屋同然ニ身過々勿論、右世話を渡世ニハムルハ所々有之由、殊ニ御城近邊町家ニモ、同様ニ者有之哉ニ相聞ハ付、取締方ニ義(御觸帳)「前」ニヤ渡置ハ趣も有之ハ處、忘却ニ者も有之哉、近比町ニ辻合道端等ハ若年ニ女連立出、往來人ヲ客ニ相勸、前條ニ小宿ニ連行、内ニ身賣致一ハ族も有之哉ニ相聞ハ付、猶亦取締ニ義、去亥三月相觸置三三八ハを見よ、ハ義ニ處、兎角右風儀不相止、内ニ女ヲ抱置、爲致身賣、亦々密通ニ小宿杯渡世ニ致ハ者有之趣相聞、御城近邊ニ別あり義、不埒ニ至コハ、既此節召捕及吟味ハものも有之ハ間、猶追々可遂穿鑿ハ條、若心得違ニ者も有之ハハ、早々正路ニ渡世ニ可相改ハ、彌此上ニモ不相止者有之ハハ、無用捨召捕、所々者迄ハ嚴重ニ可及沙汰ハ間、精々取締、若不相用者有之ハハ、早々可訴出

御觸及口達 嘉永五壬子年

二〇一五

隱賣女の禁

惣嫁

隱賣女及抱
主は正業に
復す可し

難船を救助
せる治三郎
外九名に
賜ふ

右に趣三郷町に不洩様可申聞置の事、

子八月○町中家持の承知判
形日付は十九日なり

(御觸書承知印形帳)

圖五九二 八月廿七日 當三月十日夜、下總國結城郡結城村庄七并召仕惣助外壹人を及殺害

逃去の、右庄七元召仕幼名與會吉事九兵衛人相書之事

圖三三七 八月廿九日 江に子嶋東町淡路屋六三郎代判彌七下人政助外三名、盜賊差押又の

孝心を竭のこ付、南竹屋町橋屋喜兵衛外四十八名、白米下直に賣出のこ付、并目
印山に罷在の忠助外六名、難船助遣のこ付、夫、御褒美被下の事、

江に子嶋東町

淡路屋六三良代判彌七下人

政助

其方義、怪敷相見の當時無宿金藏を差押、所の者合、召連訴出の段、兼の觸渡に趣相守、寄
特に義のこ付、爲褒美鳥目貳貫文差遣の、

八月八日

讃岐屋町石川屋五郎兵衛借屋
播磨屋吉右衛門伴

同

兵衛

右吉兵衛女房

同

又

吉

兵衛

宗

兵衛

同

同

又

孝子吉兵衛
外二名に錢
を賜ふ

舉動不審な
る者を逮捕
せらるる下人政
助に錢を賜ふ

石吉兵衛宗兵衛、父吉右衛門義兼の病身者に付、兩人共幼若に節を吉右衛門に代り、塩醬油等

荷ひ所の賣歩行、商ひに精を出シ、日、儲錢を聊も自用に遣拂ひ儀無之、不殘吉右衛門に相渡、
家賃銀滞を勿論、其外心障に儀を無之様爲取續、尤兩人共儉素を守、物見遊藝等に罷越の義も
無之、身分相慎、兄弟睦敷相慕、殊吉兵衛儀女房をふに、教示行届の付、同人も兄弟に者商ひ
に罷出の留守中を別め、儀、平常も兩親を大切の致、貞實に相仕、右躰中合孝養を竭のこ内、母
をん義眼病相煩のこ付、兄弟代り合、母の手を取、醫師方へ連行、療治介抱等致の得共、終に
盲目に相成、剰余病のこ不相勝のこ付、兩便穢物等迄も心能取片付遣、給物万事無手拔看病致
の得共、養生不叶、追お相果の義を相敷、法事等厚相營、父の力を添、其後も同様中合、彌
以同人に孝養を竭、妹をも相憐の段、神妙寄特に付一同擧置、吉兵衛宗兵衛に鳥目五貫文宛、
くふに同三々文爲取遣、猶此上行狀相慎、渡世出精可相勵の、

- | | | | | |
|-----------|----------|--------------|------------|-----------|
| 南竹屋町 | 橋屋喜兵衛 | 順慶町五丁目經師屋佐七 | 雜喉場町 | 江に子嶋町 |
| 宮川町 | 伊兵衛 | 支配借屋和泉屋菊次良代列 | 大庭屋五兵衛借屋 | 荒物屋治右衛門家守 |
| 池田屋半右衛門借屋 | 改屋町 | 吉野屋藤五郎支配借屋 | 松本町 | 玉手町 |
| 阿波屋紋平 | 毛馬屋喜介 | 池田屋竹松 | 古金屋喜兵衛借屋 | 明石屋藤八支配借屋 |
| 西濱町 | 三右衛門町 | 新大黒町 | 鶴屋安兵衛借屋 | 泉屋町 |
| 多田屋儀兵衛借屋 | 若狭屋八百次良 | 加茂屋喜三良 | 加賀屋又兵衛支配借屋 | 大黒屋其兵衛借屋 |
| 淡路屋辰藏 | 北堀江三丁目 | 同所四丁目 | 同所四丁目 | 播磨屋茂兵衛 |
| 瀬戸物町 | 河内屋平兵衛借屋 | 田中屋徳兵衛 | 同所五丁目 | 豊屋安兵衛支配借屋 |
| 天満屋平右衛門借屋 | 幡磨屋幸助 | 同所三丁目 | 紙屋茶兵衛支配借屋 | 嶋屋新藏 |
| 伊勢屋武助 | 同町 | 大和屋喜兵衛 | 同所三丁目 | 河内屋利兵衛 |
| 南堀江貳丁目 | 同町 | 同所三丁目 | 同所三丁目 | |
| 徳嶋屋重助支配借屋 | 同町 | 同所三丁目 | 同所三丁目 | |
| 伊勢屋定之助 | 同町 | 同所三丁目 | 同所三丁目 | |
| 御觸及口達 | 嘉永五壬子年 | | | |

白米を廉賣せしむる外、兵衛外四喜八名に錢を賜ふ

御池通壹丁目 木内屋（代判） 利兵衛 播磨屋太七 同所六丁目 淡路屋武右衛門借屋 奈良屋專助支配借屋 同所八丁目 山田屋次郎兵衛 同所 紀伊國屋菊造 播磨屋卯七 西川屋五郎兵衛借屋 日向町 美濃屋庄兵衛 同所 袋屋勘兵衛支配借屋 奈良屋町 三山屋松右衛門借屋 大和屋安兵衛 美濃屋善兵衛 常珍町 今福屋安兵衛支配借屋 松屋紋次良 大嶋屋源兵衛 南紺屋町 播磨屋善兵衛 鉛屋卯之助 西高津新地九丁目 油屋庄左衛門 幸町五丁目 播磨屋重藏借屋 播磨屋卯兵衛 京橋三丁目 美濃屋市兵衛 同所五丁目 八幡屋善藏 山本屋善次良 加賀屋幸次良 北谷町 美濃屋源七 同所北町 塩屋太四郎 吉川屋忠兵衛 河内屋久治兵衛借屋 中嶋屋源次良 同所船大工町 扇屋利兵衛支配借屋 同所北町 住吉屋清兵衛 神崎屋庄七支配借屋 伊賀屋太兵衛 同所北壹丁目 鶴屋六治良 地借阿波屋與一郎代判 源次郎 美濃屋吉兵衛借屋 野里屋吉兵衛借屋 南濃人町貳丁目 會根崎新地六丁目 堂嶋新地裏町 豊嶋屋仁兵衛支配借屋 同所北壹丁目 鶴屋六治良 地借阿波屋與一郎代判 源次郎 美濃屋吉兵衛借屋 野里屋吉兵衛借屋 南濃人町貳丁目 會根崎新地六丁目 堂嶋新地裏町 豊嶋屋仁兵衛支配借屋

右に者共儀、搗米屋渡世致し、外同渡世に者に内にも、先月下旬に風雨より喜寄、白米小賣直段引上り者も不少哉ニ處、右に不抱、兼お觸渡に趣相守、銘に店方小賣に白米、外并下直に賣出罷在、段、全身薄に者共難澁を顧み仕方、別寄特に儀に付譽置、一同に鳥目廿五文爲取遣ひ、猶も此上成丈ケ下直に可賣出、二を見よ、

難船を救助せしむる外、六名に錢を賜ふ

銅延職人を募る

目印山に罷在 忠 助 岩右衛門 爲右衛門 定 吉 久 七 德 藏 直次良

其方共儀、當月十六日安治川口おゐて、廻船壹艘俄に強風に淺瀬へ乗揚、既及破船に仕儀に至ひを、漁船を以早速右船に漕付、精に相働、危難を助ケ遣ひ段、寄特に儀に付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣、

右に通中渡ひ條、所に者共可令承知、

子八月 日付は廿九日なり、

子九月 日付は三日なり、

九月三日 江戸西丸御普請に付、銅延職人又右類職に者の勿論、素人にも延方望に者と、奉行所へ可出申事、

口達

此度江戸西丸御普請御用と銅瓦延立方に義、當地におゐて被仰付に付あり、先日以来延職人の不及中、類職にものとも追々呼出、延立方付、得共、右に相洩ひものも可有之哉に付、右類職にもの勿論、素人にも延立方望にもの同様可出付間、聊無遠慮來ル六日迄に内奉行所へ可出申、

子九月 日付は三日なり、

（同上）

九月七日

大和町質屋山本屋平四郎儀致出奔に付、質入に品請戻度者、同人

御觸及口達 嘉永五壬子年

親質屋兩軒之内へ可罷越事、

口達

大和町山本屋平四良義、質致商賣、諸向方取置ひ品之内、南綿町山城屋得兵衛大寶寺町松屋由兵衛方へ又々質物こ入置、平四良義出奔致し間、質入ひ品有之請出度者、十一月十日迄、内質札こ元利相添、得兵衛由兵衛方へ持參可請戻、尤日限過ひ、請戻し義不及沙汰、

子九月七日

(同上)

圖五三三 九月十一日 御男子様御誕生、松平長吉郎殿と奉稱ひ事○體裁圖四〇六〇に同じ、尙圖五九八〇を見よ、

圖五三三 九月十六日 堺煙草庖丁猥こ致商賣問敷事、

堺煙草庖丁の賈作を禁ず

右こ趣京保十五戌年以來、度々觸知らせ置○圖一四一・五、三三二等を見よ、ひ處、去ル寅年間屋仲間組合等停止相成ひ後、別め商法相乱、兎角猥こゑ、當表の勿論攝河播在こゑも、堺た之粉庖丁恰好相似、同様紛敷極印打立、專諸方へ賣出ひ者有之、堺庖丁鍛冶屋共渡世差支令難儀旨、右職人共訴出、既今般問屋仲間組合再興も相成ひ上、旁先年追々觸渡し趣無違失相守、心得違し取斗致問敷、

右こ通可觸知をの地、

子九月○町中家持の承知判形日付は十六日なり、

因幡

左衛門

(御觸書承知印形帳)

圖五三四 九月廿日 川路左衛門尉殿御勘定奉行被仰付ひ事、

川路聖謨轉任

川路左衛門尉御勘定奉行被仰付ひ、此旨三郷町中可觸知者也○圖五八八、八を見よ、

子九月廿日

因幡

(同上)

圖五三四 九月晦日 梶木町尼崎屋市右衛門別家手代尼崎屋藤右衛門忠勤奇特成者こ付、山

田町年寄大庭屋與兵衛外二名、役儀出精相勤ひこ付、夫々御褒美被下ひ事、

梶木町
尼崎屋市右衛門別家手代

天滿北木幡町酢屋庄兵衛借屋

尼崎屋藤右衛門

子六拾貳才

尼崎屋藤右衛門の忠勤を賞し錢を賜ふ

右藤右衛門義、先主市右衛門時代、此者弟佐介不奉公と義有之ひを承、氣と毒と存相詫、佐助暇請ひ後、同人こ代り、無給こゑ召仕吳、様相頼、主人得心と上、右方致奉公住ひこ付あせ、無給こゑ召仕ひ義如何こ付、小遣料又々爲仕着料杯と唱、主家少々宛金銀与エ吳ひ義を厚相請、出精相勤罷在ひ内、右市右衛門義持病痲症差發、店方取締向万端難出來こ付、諸事此者引請、實意こ取斗、其上市右衛門女房た、俱々藥用介抱爲行届、一旦快氣と姿と相成ひへ共、右病中諸雜費其外臨時物入多、追々身上不如意と相成、前以仕來ひ商賣難取續、所持家屋敷共賣拂、同町こゑ手狭と借宅に相答ひ仕義と相成ひ節、召仕と下女下男等不殘暇差遣ひこ付、此者も同様暇可差遣旨申聞ひへ共、主人右躰と持病有之、難見捨こ付、旁無給こゑ召仕、介抱爲致吳様志願と次第申述、其後も是迄と通致奉公、右こ付爲仕着料等相減ひをも不相厭、前同様實躰こ相勤、品々丹誠ひせし、漸當時と建家爲買求、弘住居折節、市右衛門義痲症再發ひせし、

御觸及口達 嘉永五壬子年

11011

乱心同様相成に付、猶又重々中合、晝夜傍を不離看病にせし、主人の意に叶は様介抱爲行届の得共、養生不叶、終に病死にせしに付、たゞに及心添、葬式(ハカ)勿論佛事等厚爲相營、其後親類相談の上、死亡市右衛門甥龜治良と申者他方養子に貫請、市右衛門を名を改、跡相續爲致、蠟燭鬢附油類小商爲相始、此者重荷を呑負、若年、當主附添、日々早朝方得意廻仕歩行、主家取續方(碎)心ヲ挫、其上近來庄兵衛借屋へ別宅爲致貫得共、獨身(ハカ)不相變晝夜共主家へ罷越、家事手傳、追々及老年(ハカ)を不相厭、商ヒ向余暇有之にハカ、主家日用香水迄も、近邊川筋へ自分汲取參り程に出精相働、勿論平日鹿服を着シ、身分慎も宜、殊に近年聊に金錢も不貫請、無給(大)なる年來主家太切(大)にいさし、忠勤を盡し段、寄特(奇)に付譽置、鳥目拾貫文爲取遣、此後も彌主家を大事に可致し、

山田町年寄

中船場町年寄

車町年寄

大庭屋 与兵衛 錢屋 源兵衛 藤屋 平兵衛

役儀出精の年寄大庭屋の與兵衛外二名に銀を賜ふ

其方共義、年寄役勤方宜、町入用減方精々心を用、公事出入可及義有之節、可成丈ケ不事立様取斗、諸賣取締方行届、其外神妙寄特成致取斗(奇)段相聞(ハカ)に付譽置、銀壹枚ツ、差遣、彌此上相働メ、

子九月(○南組年寄の調書日付は晦日なり)

(同上)

圖五五五 十月三日 酒造米に儀、一時に手當不致、當然入用程宛買入の様可致事、

町在酒造に儀、兼み觸渡置(ハカ)次第嚴重相守、隱造過造(ハカ)勿論、都ふ不取締に取斗致間敷と申迄も無之更(ハカ)、然ル處追々酒造時節に差向、酒造様と者共、右に相用(ハカ)ヒ米一時に買立(ハカ)あり、

酒造米を一時間に買入る可からず

自ラ糶買に相成、米直段に差響(ハカ)筋有之に條、此節諸向米直段不平に趣相聞(ハカ)に付、厚世話あり、大坂米直段追々下落あり(ハカ)と申す乍、酒造人共時節前後ヲ弁、酒造米に分銘(ハカ)一時に手當不致、先操(線)當然入用程宛買入の様致シ、何き(ハカ)も米直段に差響(ハカ)義無之様、精々心ヲ用取斗可(ハカ)、此後右ヲ渡(ハカ)引違、酒造人其外一統一己に利欲(拘)に抱、米賣買に儀に付、不正路に仕方致し族有之様子相聞(ハカ)、急度可(ハカ)付(ハカ)問、兼み其旨可存(ハカ)、

右に通三郷町中可觸知(ハカ)の地(○圖五八九五を見よ)

因幡

(同上)

圖五九三 十月八日 中山道長窪宿日光道中今市宿、人馬賃錢割増(ハカ)事(○圖五七四・五七四・九及六一三を見よ)

補遺 七九 十月十日 銅延板所持(ハカ)者取調可(ハカ)出(ハカ)事、

町に(ハカ)おゐる銅延板所持(ハカ)者(ハカ)の差出(ハカ)様、八月口達書を以被仰出(○圖二三三を見よ)、以後、於町に相調差出(ハカ)向も有之、右を御普請御用にて、格別延立方被仰付、得共、御差急(ハカ)義に付、猶亦被仰出、聊(ハカ)も延板所持(ハカ)者(ハカ)の差出、代銀渡り、又兼み用意に所持致シ居(ハカ)向も有之にハカ、追々御用濟次第、延板にて渡方相成(ハカ)様(ハカ)も相成(ハカ)義にハカ間、於町に不洩様相調、其旨來ル十四日五ツ時、惣會所へ可被(ハカ)出、尤八月御觸に節、差出洩(ハカ)義を醜酌(ハカ)にせし、相控(ハカ)ものも可有之に得共、是の不苦、當然に御用弁第一に義に付、差急精々取調可被(ハカ)出(ハカ)、以上、

子十月十日未中刻

(御觸書承知印形幅)

參考 三六 十月十一日 米賣買方窮屈無之様、融通合專一に可致旨、并正米帳合米共平準

御觸及口達 嘉永五壬子年

11011111

銅延板所有者の調査

相場相立、正路に賣買可致旨被仰渡、御請證文事、
被仰渡御請證文事

米方年行司共

米賣買の融
通を計る可
し

帳合米の本
意を失す

享保度天明
度の米仲買
の取締

近頃諸向米直段不平に趣相聞、こ付、追々申論に趣、年行司共始重立、米仲買とも厚聞請世話致し、此節一際米直段下落致、仕儀に至りぬ段、格別事にも、然る所追々新穀入津致し、物澤山に相成、とま乍申、時節前後を弁、多分米高買注文引請か義、勘弁可致さ勿論に事に、へ共、賣買方格別窮屈無之様、融通合專一に可相心得、尤右に事寄せ、不正路に取斗決あ致間敷、○圖二一五及二二〇を見よ、
一帳合米に義、正米掛繫融通第一品に付、追々取縮方に義申渡置、趣も有之ぬへ共、不相用、免角に不行儀及増長に、諸國客先の氣請にも拘、自然市場に衰微を招、様仕成、族不少哉に相聞へ、以て外に事にぬ、元來米直段に基本にぬ、其上米穀を以仕出(いせか)品と勿論諸(色カ)金とも、米直段を元として、賣出(いせか)の道理にぬ上、堂島米相場に模様を寄、萬價にも差響にこ付、享保年中格別御世話も有之、天明度(こもカ)に米賣買心得方に儀に付、別段被仰論に趣も有之、夫是厚相弁、已來銘々一己に利欲に耽りぬ儀無之様、急度相慎、米仲買共相互に心を付、享保度已來に規定を堅相守、實直に渡世相營、諸向に氣請宜、市場繁昌爲致、儀を第一に心掛、正米帳合米とも平準に相場相立、正路に賣買致、様精に申合、掛引可致、若又此上にも右中渡を不相用、不埒に取斗致、族有之と、無用捨召捕、嚴重可付、其節後悔致間敷、○圖二一六・二一九及二二〇を見よ、

○米方年行司の副書日
付は十月十一日なり、

圖五九七

十月十四日

神善四郎秤改事 ○本文は體裁圖四一七九に同じく、秤改仕様書は圖四六三九の仕様書に同じ、尙圖五六七八及六二二五を見よ、

圖五九六

十月十六日

佐々木信濃守殿大坂町奉行被仰付事、

佐々木信濃守

大坂町奉行被仰付、此旨三郷町中可觸知の趣 ○圖六一〇五を見よ、

子十月

○南組惣年寄の副書
日付は十六日なり、

因幡

(御觸書承知印形幅)

圖五九五

十月廿七日

古金銀引替所に儀、猶又來丑十月迄、是迄に通被差置事 ○圖五八八七を見よ、

圖三四一

同日 長堀茂左衛門町和泉屋武兵衛支配借屋淀屋辰治郎同家倅太吉外男女五名、忠孝を竭又の盜賊差押にこ付、并安治川北壹丁目上荷船乗庄五郎外廿七名、難船助遣にこ付、夫々御褒美被下事、

長堀茂左衛門町

和泉屋武兵衛支配借屋
淀屋辰治郎同家倅

太

子貳拾才吉

右太吉義、幼年に節方、父辰治郎働と手助にせし、出精相稼、殊に近年兩親病中抱等手厚に爲行届、其後も品々心を用相仕向、幼年に弟を憐、其身を儉素を守、龜服を着、身分相慎、年來孝心を竭ぬ段、若年と者こそ別め寄特に付譽置、烏目五貫文差遣ス、此上行狀相慎、兩親へ孝養を竭、家業出精可致段中渡、

孝子太吉に
錢を賜ふ

町奉行佐々
木顯發

孝子豊嶋屋
喜兵衛に錢
を賜ふ

右喜兵衛義、^(性)生質實躰成者こゝ、幼年^(方)に節^(方)を兩親^(性)に意^(性)に不肯、渡世致出精、^(子)三拾六才^(才)、殊近年打續父進兵衛病氣こゝ、追^(方)に病症相變、不一^(方)形躰^(方)こゝを、藥用介抱^(方)の勿論其外^(方)に義も、品^(方)と心を^(方)用^(方)爲^(方)行^(方)届^(方)、弟妹等^(方)に身分をも相應^(方)に相片付、兩親致安心^(方)の様仕向遣シ、其身^(方)を儉素^(方)を守、^(奇)鹿服^(方)を着、身分相愼、年來孝心^(方)を竭^(方)の段、^(奇)寄特^(方)に義^(方)に付^(方)譽置、鳥目五貫文差遣、此上行狀相愼、兩親へ孝養を竭、家業出精可致段ヲ渡、

子十月

堂嶋新地裏町

住吉屋治七郎下人

^(彌)助

盜賊を逮捕
せらる下人彌
助に錢を賜
ふ

其方義、盜賊を差押、所^(合)に者^(合)ヲ出、訴出^(合)の段、兼^(合)に觸渡^(合)に趣相守、^(奇)寄特^(合)に義^(合)に付、褒美^(合)を^(合)一^(合)く鳥目貳貫文差遣ス、

子十月廿三日

日本橋五丁目

塗師屋米藏姉

孝女しかに
錢を賜ふ

右志の亡父吉兵衛義、町内こゝ家屋敷買求住居罷在^(志)の處、廿壹ヶ年已前辰年^(子)四拾一才^(才)致病死^(志)の^(志)二付、兄岩松跡相續^(志)改居^(志)の處、拾三ヶ年已前子年是亦病死致^(志)、其後天王寺村久保町山田屋むさ悴書面米藏^(志)を養子^(志)貰受、此者弟^(志)こゝを^(志)一^(志)相續罷在^(志)の^(志)得共、病身^(志)こゝを渡世向難出來^(志)の間、右むさ方に養生^(志)に差遣^(志)の、此者義筆職出精相稼罷在^(志)の處、米價并諸式高直^(志)に及時節^(志)の^(志)二付あま、日用相賄兼^(志)の間、縫物指南相始^(志)の處、追^(志)に稽古人相次^(志)の故、ケ成^(志)に取續罷在、然^(志)ル處母^(志)の^(志)一^(志)義老衰^(志)こゝ折^(志)、病氣差發、善^(志)と藥用介抱爲^(志)行^(志)届^(志)の上、兩便^(志)に世話且^(志)に食事等^(志)に^(志)至迄、心を^(志)用^(志)看^(志)病^(志)致^(志)の^(志)二付、追^(志)に全快致シ、右^(志)の^(志)一^(志)義^(志)の^(志)生^(志)質^(志)氣^(志)隨^(志)者^(志)こゝ、他人^(志)へ對^(志)、法外^(志)に義^(志)毎^(志)に^(志)中^(志)聞、其^(志)砌^(志)を^(志)内^(志)に^(志)此者^(志)先方に罷越、程能^(志)詫言^(志)致^(志)爲^(志)相濟、勿論^(志)此者^(志)へも右様^(志)に義^(志)ヲ聞^(志)の^(志)得共、万事意^(志)に^(志)不肯^(志)宜^(志)ヲ成^(志)、睦敷相仕、是迄^(志)養子^(志)に義^(志)他^(志)が^(志)ヲ勸^(志)の^(志)へ共、母^(志)の^(志)意^(志)に^(志)不相^(志)叶^(志)の^(志)あ^(志)の^(志)二却^(志)あ^(志)不宜^(志)趣^(志)ヲ斷、家屋敷の家質^(志)に差入有^(志)の^(志)へ共、利足銀并買掛等爲^(志)滯^(志)の儀も無^(志)之、^(奇)鹿服^(志)を着、髮^(志)と鎊^(志)等不相^(志)厭、若年^(志)に比^(志)方^(志)身^(志)持^(志)宜、物見遊參等^(志)に^(志)罷越、身分相愼、孝養^(志)を^(志)心^(志)掛、家内睦敷相暮^(志)の段、^(奇)寄特^(志)に由相聞^(志)の^(志)二付譽置、鳥目七貫文差遣ス、此上行狀相愼、彌孝心^(志)を^(志)竭^(志)の様^(志)可^(志)ヲ渡^(志)の、

岩田町綿屋三良兵衛借屋
岡屋佐兵衛下人

又 兵衛

右又兵衛義、生國勢劬桑名郡桑名職人町俵屋又藏悴^(志)こゝ、三拾四ヶ年已前卯年、先代佐兵衛南

忠僕又兵衛
に錢を賜ふ

御觸及口達 嘉永五壬子年

二〇二七

久寶寺町三丁目住居、節、奉公に有付、年季無滞相勤の付、別家爲致、様中聞ひ得共、及辞退、實跡に相勤罷在の内、右佐兵衛(健忘症)健忘病差發、職業難出來、且身上不如意に相成の付、右佐兵衛弟岩田町綿屋三良兵衛借屋平野屋由兵衛方は、九ヶ年已前辰年、家内不殘同家に相成の付めと、此者深く致心配、按服(腹)療治に罷越、又と日雇働等致シ、夜分町内夜番に被雇、晝夜に無厭出精致し、右儲錢を以相貢の處、同家主借宅間狭にも有之、多人數居合の義、病氣に障にも相成可やと存量、七ヶ年已前午年、家内不殘當時に借屋へ爲致住居の節、當主佐兵衛儀と拾貳才こゑ、他に肩入致奉公居、然ル處先佐兵衛病氣追々差重、藥用介抱爲行届ひ得共、養生不叶、同年病死のせいの付、葬式佛堂等懇に相營、後家々みい意に不肯、陸敷相仕、先佐兵衛存生中給料を不叶受、其上家賃銀其外買掛等爲滞の義も無之、平日僉服を着、物見遊參等にも罷越、身分相愼、三拾年余も主家致太切の段、寄特に由相聞ひに付譽置、鳥目七貫文差遣、此後も主家を大事に可致旨中渡ひ、

天満又治郎町

津國屋利兵衛娘

志

子貳拾才九

孝女しんに錢を賜ふ

右志ん義、父利兵衛拾壹ヶ年以前寅年比方當時に至眼病相煩罷在、母少す義の右寅年病死のせいで、利兵衛義其後無妻こゑ、此の幼年の節より神妙こゑ、成人に隨ひ、家業に菓子商ひ引請、出精相稼、父の意に不肯、此者衣食の僉抹(木)を不厭、父利兵衛へと相應に相与、日用取賄、手透

こゝ父弟妹に着用をの穢洗濯縫仕業いさし、物見遊等にも罷出、外方縁付に義中來ひ得共、出精心懸、家内陸敷相暮の段、寄特に由相聞ひに付譽置、鳥目七貫文差遣、年若し義彌此上行狀相愼、孝心を竭、様可中渡ひ、

子十月

安治川北壺丁目上荷船乗

庄五郎 熊藏 又七源 吉長五郎

南傳法濱

兵衛 藤四郎 清七 清兵衛 專兵衛

吉三郎

音治郎 伊三郎 庄七 伊助

六軒屋濱

彌兵衛 佐兵衛 長治郎 卯兵衛 源三郎

市三郎

佐兵衛

右に者共義、當月八日同十四日、於安治川口、廻船四艘強風こゑ淺瀬へ被吹付、及難儀の節、相詰罷在、又と辺に居合、早速右舟に漕付、精に相働、危難を助ケ遣ひ段、兼あ中渡難船助ケ方と義、厚相心得ひ故と義に付譽置、爲手當庄五郎吉三郎外拾八人の鳥目壹文ツ、市三郎外壹人へ同五百文ツ、差遣、

日印山に罷在、

助庄兵衛 源九郎 吉藏 淀七

爲吉

右に者共義、去ル廿日於安治川口、廻船壹艘強風こゑ淺瀬へ被吹付、及難儀の節、助ケ方上荷

御觸及口達 嘉永五壬子年

二〇二九

難船を救助せる庄五郎外廿一名に錢を賜ふ

難船を救助せる吉助外

五名に錢を賜ふ

朝鮮人來聘延期

本年市中騒動なりしを實す

船乗共働兼ひニ付、出役者差圖ニ隨ひ、迎ニ有之ハ漁船に乗組、早速右舟に漕付、身命を不服精ニ相働、危難を助ケ遣段、^(奇)寄特ニ義ニ付譽置、鳥目壹貫文ツ、差遣ス、

子十月廿七日

(御觸書承知印形帳)

五九四〇

同

五九四一 十一月五日 唐物扱荷ニ事〇五五五〇を見よ

八〇〇 同日 朝鮮人來聘御差延相成ノ事、

今日南組惣會所に通達當番町ニ年寄被呼出、惣年寄中々左ニ通被仰渡ハ、

朝鮮人來聘來ル辰年ニ被仰出ハ處、御差延ニ相成、追々年期可被仰出ニ旨御達有之ハ、右ニ趣

爲心得テ達ハ事〇七九〇を見よ

子十月 〇通達當番常珍町の通達日付は十一月五日なり

(御觸書承知印形帳)

三三三三 十一月十二日 此節市中火災ニ勿論盜難も少く、一段ニ事ニハ、彌以火ニ元萬事

可入念事、

(御觸書承知印形帳)

町ニ火ニ元等ニ義ニ付、追々中渡ハ趣有之ハニ付め、此節市中火災ニ沙汰ニ勿論、盜難も少くハ段、全町人共中合行届ハ故ニ義ニ、一段ニ事ニハ、右ニ付兼ハ自身番并夜廻リ等別ハ嚴重取斗、取締も宜相聞ハ町ニ、北組ハ内高麗橋壹丁目外貳拾五丁、南組ハ内本町壹丁目外貳拾五丁、天滿組ハ内天滿拾壹丁目外拾五丁、右年寄共於御役所別段譽置ハ條、一統其旨を存、追々風烈

ニ時節ニ差向ハ間、猶此上町ニ無油斷心懸、彌以火ニ元萬事入念可ヤハ、

右ニ通三郷町中端ニ迄も不洩様可ヤ通ハ事〇三三四〇を見よ

子十一月 〇次の令と共に、町中家持の承知判形日付は十二日なり

(同上)

三三三三 同日 北組ハ内高麗橋壹丁目外廿五町、南組ハ内本町壹丁目外廿町、天滿組ハ内天滿拾壹丁目外拾五町、自身番并夜廻等行届ハニ付、右町ニ年寄并町代御賞美ニ

事、

- | | | | |
|--------------|---------------|---------|----------|
| 北組ハ内 | 豐後町年寄 | 本天滿町年寄 | 長町六丁目年寄 |
| 高麗橋壹丁目年寄 | 田邊屋平兵衛 | 松岡屋平兵衛 | 龜屋孫兵衛 |
| 越後屋新十郎 | 四軒町年寄伊丹屋三良兵衛 | 南濱町年寄 | 吳服町年寄 |
| 尼ヶ崎町壹丁目年寄 | 芋屋伊兵衛 | 灰屋平右衛門 | 天滿屋善兵衛 |
| 高池屋榮治郎 | 北鍋屋町年寄 | 上中ノ嶋町年寄 | 過書町年寄 |
| 内淡路町壹丁目年寄小西屋 | 山田屋八兵衛 | 鉄屋忠八 | 河内屋武兵衛 |
| 勘左衛門病氣ニ付月行司 | 堀木町年寄天川屋長右衛門 | 山下八良右衛門 | 淡路町貳丁目年寄 |
| 扇屋長兵衛 | 病氣ニ付月行司 | 玉水町年寄 | 未極ニ付月行司 |
| 大川町年寄 | 吉野屋達三郎 | 山下八良右衛門 | 天滿屋新助 |
| 多田屋新右衛門 | 江戶堀五丁目年寄木屋芳之助 | 北濱壹丁目年寄 | 奈良屋町年寄 |
| 岡崎町年寄 | 近江屋榮助 | 平野屋平九郎 | 松屋四良兵衛 |
| 池田屋伊兵衛 | 箱屋町年寄 | 西濱町年寄 | 新組町年寄 |
| 南渡邊町年寄 | 倉橋屋喜兵衛 | 綿屋宇右衛門 | 八尾屋久兵衛 |
| 播磨屋弁右衛門 | 北堀江三丁目年寄 | | |
| 新天滿町年寄 | 藤屋与助 | | |
| 仁和寺屋喜兵衛 | | | |

南組ハ内

御觸及口達 嘉永五壬子年

本町壹丁目年寄 和泉屋三良右衛門
 南町四丁目年寄 錢屋太兵衛
 長堀治良兵衛町年寄 淡路屋源右衛門
 同所四丁目年寄 網屋茂兵衛
 同所三丁目年寄 奈良屋半兵衛
 九助町貳丁目年寄 河内屋小右衛門

天満組の内
 天満拾壹丁目年寄 吉野屋九右衛門
 同所小島町年寄 紙屋七良右衛門
 堂嶋新地三丁目年寄 炭屋閑五郎
 同所老松町年寄 中嶋屋太七

同所九丁目年寄 米屋市兵衛
 安治川上貳丁目年寄 名田屋喜兵衛
 同所貳丁目年寄 山田屋市右衛門
 同所堀上町年寄 京屋七兵衛

同所宮上町年寄 中嶋屋勘兵衛
 御池通壹丁目年寄 住吉屋喜兵衛
 天満又治良町年寄 長柄屋佐兵衛
 同所拾二丁目年寄 升屋吉五郎

同所播磨津國町年寄丹波屋清
 右衛門病氣二付月行司 綿屋新兵衛
 同所四丁目年寄 兵庫屋重兵衛
 同所北木幡町年寄 尼屋清八郎
 同所天神筋町年寄 伊賀屋半兵衛

西高津町年寄 木綿屋源左衛門
 同所西三丁目年寄 塩飽屋善兵衛
 唐物町壹丁目年寄 相生村屋治良右衛門
 同所三丁目年寄 木本屋源右衛門
 薩摩堀東三丁目年寄 金屋八三郎

木挽町中三丁目年寄 鏡屋小八郎
 上柳波町年寄 升屋市右衛門
 同所貳丁日上午年寄 酢屋源藏
 南本町貳丁目年寄 播磨屋彦三良
 助右衛門町年寄檜皮屋忠兵衛
 衛病氣二付月行司 播磨屋吉右衛門

自身番及夜
 番の取締殿
 重なる高麗
 町壹丁目外
 六十二町年
 寄を賞す

町火元等と義と付、追々被仰渡、趣有之の付あり、此節市中火災と沙汰と勿論、盜難も少
 少く、全町人共中合行届の故と一段と義、殊に其方共町内を、兼あ自身番夜廻り等別あ嚴重取
 斗、取締も宜由相聞、格別と更と付御擧置の、猶も此上無油斷心懸、彌以火元万事入念可
 念可中旨被仰渡の二を見よ、

右町と丁代共

同町代を賞す

町火元等と義と付、追々被仰渡、趣有之の付あり、此節市中火災と沙汰と勿論、盜難も少
 少く、全町人共中合行届の故と一段と義、殊に其方共町内を、兼あ自身番夜廻り等別あ嚴重取
 斗、取締も宜由相聞、格別と更と付御擧置有之の間、猶も此上無油斷心懸、彌以火元万事入
 念可中旨被仰渡の二を見よ、

子十一月

(同上)

圖五九三 十一月十六日 妙法院宮御抱三十三間堂及大破の付、御府内并廿二ヶ國武家方

勸化御免の事○圖六一六

圖三四 十一月廿一日 琴三味線浚其外舞浚淨瑠璃會等、師家と者宅と可相催事、

口達

琴三味線舞
 浚淨瑠璃會
 師家と者宅と
 可相催事

夜會に長じ
 又は座料を
 取るを禁す

一琴三味線をらへ其外舞をらへ淨瑠璃會等と義と付、去ル寅年以來、追々相觸の趣も有之處、近
 比夫と師家と者宅とあつてり更と不相催、弟子内と相連、渡世柄不相當と者宅借請、殊に夜會
 と長し、町家一般と猥と風儀と相流の哉と相聞、市中取締方も抱、如何と更と付、早と相改、
 此後右類と催更と如何様共致、可成丈師家と者宅と可相催の、若右師家と者宅無餘義差支有
 之時と、其渡世柄相當と料理屋借請、稽古同様弟子共集、質素と相催の義と格別、右と更寄、
 大造と取斗杯決め致間敷、夫と所と者方も急度心を付可中の、尤右夜會と長しと義と勿論、座
 料を取の義と彌以不相成の間、一統其旨を存、心得違と義無之様可致の、
 右と通三郷町中端と迄にも不洩様可中通の事○圖二二一〇及
 二四八五を見よ、

御觸及口達 嘉永五壬子年

110311

子十一月○町中家持の承知判
形日付は廿一日なり

(御簡書承知印形帳)

十一月廿八日 大工手傳其外普請方ニ携ハ職人共、定賃錢ニ外増銀取中問敷事、
并材木竹類其外諸色共直上致問敷事、

口達

北久寶寺町
四丁目出火
大工手傳職
等増賃銀を
食り或は同
業者に妨害
を加ふるを
禁ず
竹木其外諸
色直段を引
上ぐるみ禁
ず
家賃を引上
ぐるを禁ず

一近來家作普請方ニ携ハ諸職人とも、極ニ賃銀ニ外増銀受取ハ義を、定式ニ様心得違、亦兼
用更中付ハ者ニ不限、普請主勝手ニ寄、外同職人共相履爲働ハ義を差障中掛、普請ニ妨致ハ族
不少ハコ付、町人共難義致ハ更ニ由粗相聞、不埒ニ至コハ、既此度北久寶町四丁目及出火、
寂寄町ニ類焼ニ逢ハ者も多ハコ付、追々普請可取掛義ニハ上モ、大工手傳職を始、總ハ普請方
ニ携ハ職人とも、一統心得違無之様致、已來夫々極ニ賃銀ニ出精相働、増銀等乞取ハ義を勿
論、たとへ外同職ニ者相履ハモ、普請主勝手次第ニ更ニ付、決ハ差障中問敷ハ、尤材木竹類
其外諸式共、是又右ニ准、不致直上、出火已前ニ直段通ニハ可致賣買ハ、若又右中渡を背、此
後貪ケ間敷取斗致ハ義相聞ハハ、早速召捕嚴重中付ハ間、其旨可存ハ、
但、町ニ家持ニ者共も本文同様相心得、店賃引上中問敷ハ、
右ニ通三郷町中端ニ迄も不洩様早ニ可中通ハ事、

子十一月○町中家持の承知判
形日付は廿八日なり

(同上)

十二月六日 今曉ニ出火ニ類焼ニ逢、可手寄方無之者へ、當座御救錢被差遣ハ事、
覺

村木町の出
火
類焼難澁人
に錢を賜ふ

町人有志者
の施錢
類焼難澁人
の調査

類焼難澁人
へ施行せる
賞美の沙汰
ある可し

今曉方ニ出火ニ類焼ニ逢、可手寄方無之、殊ニ時節柄差向別ハ難澁致、者も有之哉ニ相聞、
不便ニ至コ付、右体ニ者共ハ當座御救錢被差遣、間、寂寄惣會所へ可中出事○圖八〇
一を見よ

○北組惣年寄の副書日
付は十二月六日なり

(幕令)

十二月十日 町人ニ内々施錢立有之ハ間、類焼難澁人取調、有無共可届出事、
當六日出火ニ節、類焼ニ難澁人御救錢可被下旨、即刻被仰出○圖二三四
六を見よハ處、追々町人ニ内々施
錢ニ立有之ハ間、町ニ内親類縁者又ハ懇意ニ者方ハ罷越居、右施錢中請度ハ早ニ相調、
壹町限名前書明後十二日四ツ時迄ニ、郷ニ惣會所へ可被差出ハ、尤右体ニ者無之町ニハ、是
又其段斷書可被差出事○圖二三四
七を見よ

子十二月十日

南組惣年寄印

(御簡書承知印形帳)

十二月十三日 類焼難澁人へ致施行ハ者共モ、追々御賞美可有之ハ事、
當六日曉材木町出火、類焼町ニ内ニ者、小前ニモ多住居いハ庭所も有之、別ハ難澁
いハ者も不少趣相聞、付、右体ニ者ハ當座御救錢被遣、付ハ者、丁人共銘ニ一己ニ慈善
ニ、粥其外給ハノ類右場所へ持參致施行ハノも有之、又ハ別段金銀錢差出、御救錢ハ差加
儀、追々願出○圖八〇
八を見よハハ、ハハノも有之、いづれも格別寄特○奇
一を見よニ事ニハ、猶取調ニ上追々稱譽ニ可及
沙汰ハ得共、右ニ次第夫々ハ中聞被置、

子十二月○北組惣年寄の副書
日付は十三日なり

(御簡帳)

御簡帳及口達 嘉永五壬子年

二〇三四

○圖五九四三—五九四四 一〇に同じ、

十二月十六日 門松注連繩等を忍々こつと取、或は押あ貫掛の儀仕間敷事〇圖二九九

に同じ、

補達 八〇二 同日 ろくと穴打道中双六辻賣引と類禁可事〇圖三〇一に同じ、

補達 八〇三 同日 佐々木信濃守様御到着事、

信濃守様、今日當表御到着被成の間、此段承知可有之、以上、

子十二月十六日

南組惣年寄印

(御觸書承知印形帳)

圖三三九 同日 小賣油正路と直段と相改、賣出可事、

口達

當秋以來油不融通あり、格別相場引上ケルに付、早(品)世話致シ〇圖五九二に付あり、此節一際目立ひ程相場下落致し得共、町々油屋共と内こい、小賣直段不引下賣出のものも不少哉と相聞ひ、元來小賣直段と義と、元方相場高下と釣合、不相當と義無之様可致の勿論、日用と油高直こあり、身薄と者別致難義に付、其儀をも願、旁一己と利欲不(拘)抱、早と正路と直段と相改、賣出可事、自然此上にも不直と取斗致し者於相聞と、嚴敷可事付ひ、右と通三郷町中不洩様可事通ひ、

○南組惣年寄の副書日付は十二月十六日なり、

(同上)

油小賣直段を引下ぐ可し

高直なる菓子類料理等を賣買するを禁ず

高價の鉢植物を賣買するを禁ず

圖五九五 十二月廿五日 當十一月三日晩、養母類を及殺害、女房侍給へ疵負逃去ひ、武州足立郡川口宿百姓太四郎人相書事

圖五九四六 十二月廿六日 水戸中納言殿へ、線姫君様御入輿被爲濟事〇圖四三二七に同じ、尙圖五八九八及六〇九三を

見

圖五九四七 十二月廿八日 無益と手間掛の菓子并料理等賣買致間敷事、

○前文本年十一月十七日の江戸令に同じ、右と通此度於江戸表町觸有之、當地と義も前同様相心得、菓子并料理向等不益と手間掛りひ品の勿論、都高直と食物類令停止の段、兼あ嚴重觸渡有之趣無違失相守、右渡世と者其外一統、猶も此上心得違と義無之様可致ひ、右と趣三郷町中可觸知者也〇圖五四四八を見よ、

子十二月 〇次の四令と共に、町中家持の承知判形日付は廿八日なり、

信濃 因幡

(御觸書承知印形帳)

圖五九四八 同日 高直と鉢植物賣買致間敷事、

○前文本年十一月十七日の江戸令に同じ、右と通此度於江戸表町觸有之、當地と義當時小万年青不致流行由こい得共、外と鉢植物取扱ひ者も有之趣相聞ひに付あり、前同様相心得、都高價と鉢植物賣買不相成段、兼あ嚴重觸渡有之趣無違失相守、植木屋共の勿論其外一統、猶此上心得違と義無之様可致ひ、右と趣三郷町中不洩様可觸知也〇圖五五〇五を見よ、

子十二月

信濃

御觸及口達 嘉永五壬子年

二〇三七

因幡

(同上)

女履物に高直の品を用ふ可からず

同日 女子履物鼻緒等高直と品相用中問敷事、

女子履物鼻緒等高直と品賣買致間敷、其外衣類の勿論、都る手を込め奢侈と品相用中問敷旨も、度々觸示有之の處、江戸表町々、義近來追々相寛、下駄并鼻緒等、手を込め高價と品相用由に付あり、此度町奉行所おゐて、其筋と者に嚴重に渡有之の付、當地と義も同様相心得、兼お觸渡と趣無違失相守、猶も此上心得違と義無之様、町々に入念に付置、精と心ヲ付の様可致し。○圖二〇二、四を見よ、

子十二月

(同上)

同日 大坂町人共々當表に有之諸家藏屋敷或は大坂町奉行支配國內に罷在の武家家來へ掛ひ貸金銀出入分、向後取上、濟方と沙汰に及ひ事、

口達

大坂町人より武家方に對する貸金銀出入取上の範圍

武家方に掛ひ金銀出入其外諸出入等、前々當表に取上せずへ共、向後と義、大坂町人共々同所に有之諸家藏屋敷或は大坂町奉行支配國內領分知行所用場等に罷在の武家家來に掛ひ貸金銀出入分、訴出次第取上、濟方と沙汰これよひの間、其旨可存し、右と通三郷町中不洩様可申通ひ度、

子十二月

(同上)

同日 目印山に罷在の寅吉外十八名、難船助遣ひに付、夫々御褒美被下し事、

難船を救助せる寅吉外十八名に錢を賜ふ

目印山に罷在の

南傳法演
上荷舟乘

寅 吉利 八喜兵衛 彦兵衛 善七

長 治 良兵助 庄七 又三郎 源三郎

市次郎 龜三郎 宇八 小治郎 喜三郎

勝三郎 萬藏 庄三郎 徳三郎

右の當月入日同九日安治川口これわく、廻船三艘強風にあ淺瀬へ被吹付、亦の楫打折沈舟相成、及難義の節、相詰且の邊に居合、早速右船の漕付、精と相働、危難を助ケ遣ひ段、兼お申渡難船助ケ方厚心得の故と義に付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣る、此上無油斷心懸の様可致し、

子十二月廿二日 ○南組惣年寄の副書
日付は廿八日なり、

(同上)

嘉永六癸丑年

正月三日 右大將様西丸へ被遊御移徙し事 ○遊園三七九二に同じ、尙圖

正月八日 東海道酒匂川・中山道柏原宿・美濃路起宿、人馬賃錢并川越賃錢共割増

事 ○圖五七六〇及
六一三六を見よ、

同日 中山道美江寺宿困窮に付、人馬賃錢割増し事 ○圖五七六二及
六一四七を見よ、

御脚及口達 嘉永六癸丑年

補遺 八〇四 正月十一日 手嶋流心學道話儀、隨分ひろまりの様、町内か世話可致の事

○圖七五
二に同じ、

補遺 八〇五 同日 ほとんど火大形ニ無之様可致事、

とんどの取
締

せんと火大形ニ無之様可相心得、一時たきひあま自ラ大造ニも相成の間、相分ケ度ニたき
の様、濱々若き者へよく相諭可被申、旧冬以來火の用心の義、嚴重ニ相心得の義ニ付、右
たきひ節、町役人心を付可被申、場狭き所辻合等にてたきひ義を可爲無用の事、
○圖二〇一九及
○圖八四八を見よ、

丑正月 ○前の三令と共に、町中家持
の承知判形日付は十一日なり、

(御觸書承知印形帳)

補遺 八〇六 正月十六日 明後十八日曉丑刻公事訴訟被成御聞の事、

御用日の公
事訴訟受付
刻限

明後十八日公事訴訟多可有之ニ付、曉丑刻被成御聞の間、其心得を以、無遅參罷出の様可
相達旨被仰出の間、此段承知可有之、已上、

十六日

北組惣年寄

(御觸書)

補遺 八〇六 正月十七日 町々用水桶増の様可致事、

用水桶の増
設を促す

今日當郷惣會所火消年番町年寄御呼出の上、薩摩屋小傳次様方左に通被仰渡、

町々内用水汲溜今以行届兼の處も相見、成丈ケ桶を増の様心掛、軒下ニ差置、商勝手ニ差
支ひ、明場所ニ圍置候共、於町々見斗ひ、いゝも消防ニ爲宜様、無油斷可被申合、

○火消年番大川町の通達
日付は正月十七日なり、

(同上)

參考 二一九 正月廿四日 正米帳合米共平準と相場相立、正路ニ賣買可致旨被仰渡、御請證

文の事、

被仰渡御請證文の事

米方年行司共

帳合米賣買
の流弊

堂嶋米相場
の影響

享保度天明
度の米仲買
取締

堂嶋帳合米の儀、正米賣買掛繫融通第一の品に付、先年々度、取締方ニ義申渡有之、共、
兎角及流弊、賣買方不行儀増長致、自然正米直段に拘り儀を勿論、市場ニ衰微を招、様仕成、
族不少哉ニ付、今般其方共格別差斗取扱、向後右体ニ義無之様、濱方取締相立の事ニ由、
一段の事に、元來堂嶋米相場と義と、諸國米直段と基に、其上米穀を以仕出、品を不及申、
諸品共米直段を元として賣出の道理に上、米相場と模様により高價に差響、筋に付、享保
年中格別御世話在之、天明と末にも米賣買心得方と義に付、別段被仰諭と趣も有之、夫是厚相
弁、銘々一己の利欲に迷、儀無之、諸事享保度已來規定を堅相守、實直に渡世相營、諸向客
先氣請宜、市場繁昌爲致の儀を第一に心掛、正米帳合米共平準と相庭相立、正路に賣買致
の様、猶も此上精々可申合、若又已後右申渡を不相用、不埒と取斗致、者相聞かに於て、
無用捨召捕、嚴重可申付、間、其旨を存、米仲買一統へ能く可申聞、
○米商書記

○米方年行司の副書日
付は正月廿四日なり、

(米商書記)

補遺 五九四 正月廿六日 文恭院様拾三回御忌御法事、
○體裁圖五五
四二に同じ、

補遺 三五四 同日 文恭院様拾三回御忌御法事、於四天王寺執行の事、
○體裁圖二二
五五に同じ、

御觸及口達 嘉永六癸丑年

二〇四一

圖五五 同日 丹製法人の儀、寅年以前に通七人ニ限りぬ事、丹製法人の義、初發於江戸表御吟味の上、大坂境兩所一躰ニ相成、七人ニ限製法被仰付、改印も御下渡相成、其以來大切ニ相用ひ來ぬ義あり、通例商賣人共仲間組合と類とを譯も違、其上元文中差定ぬ直段にて、高下無之賣出來ぬ趣ニ付、去ル寅年株札并問屋組合停止と節、丹製法商賣の義是迄に通据置、尤人數七人ニ限ぬ事、仲間組合の姿ニ相當の間、大坂堺兩所と肉、丹製法望の者、其所に奉行所に斷出、聞届請ひぬ製法の事、大坂改會所に差出シ、夫と立會相改ひ上、可賣出旨等と義相觸有之（圖五五一）の處、此度問屋組合再興ニ付及取調ぬ處、去ル寅年以後も右七人以外、新規に丹製法商賣相始ぬ者有之由ニ付ぬ事、右寅年觸面と趣自然奔捐相成、諸事前と通相心得、前書七人以外丹製法不相成の間、一統其旨を存、此後も改印無之紛敷丹賣買致ぬ者有之と、吟味と上急度可申付ぬ、右に通此度從江戸表御下知を以て渡の間、三郷町中不洩様可觸知者也、

丹製造人の人員の制限を舊に復す

丑正月（前の二令及次の令と共に、町中家持の承知判形日付は廿六日なり、）

信濃

因幡

（御觸書承知印形帳）

圖五九六

同日

琴、三味線、鍼治、導引等と藝業に携ひ者の、百姓町人、皆を不及中、武家陪臣の子弟にても、惣お檢校し可爲支配事（圖五四〇四に同じ、但し、「文化十四年三月」の下へ、「天保三辰年二月」の下に「同十二年正月」の七字を加ふ、尙圖五五八九及六三八一を見よ、）

圖三五五

正月廿七日

順慶町五丁目大和屋源兵衛外七名、忠勤を竭又の盜賊差押ひニ付、

并目印山に罷在ぬ忠助外十五名、難船助遣ひニ付、夫に御褒美被下ぬ事、

順慶町五丁目

大和屋源兵衛

大和屋源兵衛の忠勤を賞し錢を賜ふ

右源兵衛義、三拾ヶ年已前未年、同町大和屋彦吉祖父彦右衛門時代、奉公に罷越、實務相勤ひニ付、拾四ヶ年已前亥年、別家爲致費、自分と渡世と女房ニ爲任置、主家へ日勤罷在、處、主人彦右衛門義及老年、悴彦七に家名讓渡ぬ後、同人病死ぬ事、彦右衛門再相續致ぬ得共、極老にて家業難出來、同人女房いと義も極老と上、孫たみ義と手足不自由言舌難分、右轉老衰難病ぬ者ニ付、自分家業相止、晝夜主人方ニ罷在、萬壹引請取斗いせしむ得共、追と身上向相衰、主家可及退轉義を此者深致心配、所持と品賣拂、銀子致調達、借財方に實意と及掛合、濟方出來、彦右衛門致安心、其後同人病氣差發、藥用介抱爲行届ぬ得共、終に養生不叶相果ひニ付、彦右衛門娘他家へ縁付、致出生ぬ彦吉と申者貰受、相續爲致、幼少ニ付此者致代判、家内不殘主家へ晝夜相詰、家事向并いとたみと介抱爲行届、悴寅吉を下人同様召仕、夫と給銀等不貰受、たみ義追と病氣相重り、藥用介抱種と手を盡ぬ得共、養生不叶致病死、此者實直と主家業致出精ひニ付、得意先氣請宜、商賣向致繁昌、身上追と立直り、いと義相悅罷在、同人老衰ニ付穢物洗濯等取片付致、喰物好と品等相与、諸度心を付、主家葬式佛堂と勿論、先祖年忌等懇と相營、其方と僊服を着、物見遊參等と不能越、身分相慎、幼少と主人を大切と忠勤ぬ段、寄特（奇）ニ付譽置、鳥目七貫文差遣、此後も彌主家を大事と可致ぬ、

盜賊を逮捕せる越前屋に善吉外六名に錢を賜ふ

難船を救助せる忠助外十五名に錢を賜ふ

御橋請負及旅籠屋支配三郎に許す

旅籠屋軒数の制限を解

泊茶屋を旅籠屋に準せしむ

南新町貳丁目夜番人谷町 同町垣外番天王寺長吏下
 三丁目吉村屋喜兵衛借屋 若キ者宇助弟子 助 富 藏 八 兵 衛
 越前屋 善吉 半
 西高津新地九丁目夜番人 三郎右衛門町夜番人 同町垣外番天王寺長吏下
 大和屋彦藏借屋 若キ者利助弟子 助
 越中(後)屋嘉兵衛 八幡屋定七 市 助
 其方共義、盜賊を差押、夫之所之者中合、召連訴出の段、兼お觸渡に趣相守、寄特に義に付、爲褒美鳥目貳貫文ツ、差遣ス、

- | | | | | | | | | | |
|--------------|---|----|-----|---|---|-----|---|-----|------|
| 目印山に罷在、 | 助 | 吉 | 助 | 市 | 松 | 万 | 吉 | 常 | 吉 |
| 忠 | 助 | 吉 | 助 | 市 | 松 | 万 | 吉 | 常 | 吉 |
| 寅 | 吉 | 爲 | 藏 | 市 | 治 | 良 | 儀 | 右衛門 | 岩右衛門 |
| 六軒家濱
上荷舟乘 | 吉 | 三郎 | 重治郎 | 太 | 助 | 文次郎 | 治 | 助 | |
| 仁兵衛 | | | | | | | | | |

右之者共、當月七日同十八日、安治川口におゐて、廻船貳艘強風にて淺瀬へ被吹付、又と沈船等ニ相成、及難義の節、相詰且の迎に居合、右船へ漕付、精々相働、危難を助ケ遣の段、兼お中渡に趣厚相心得の故に義に付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣ス、

丑正月廿七日 ○南組惣年寄の副
 書日付は晦日なり、

(御觸書承知印形帳)

○ 圖五五 正月廿八日 塚口屋重三郎御橋請負并旅籠屋株再興之事、床髮結仲間右同斷之事、常盤町三丁目塚口屋重三良義、大川筋天満橋外拾橋掛直大修復、并平常小破急破御修復共、明和年中先祖七兵衛無代に引請、右爲手當旅籠屋差配に義願請ひ以來、右旅籠屋九百軒に限、

仲間組合相立、右之者共利潤の内、壹軒に付壹ヶ月銀五匁宛役銀取立、右助成を以、年來橋々大小御修復無差支定請負仕來、去ル寅年株札并問屋組合仲間等停止の節、橋々定請負并旅籠屋差配仲間組合も差止に相成○圖五五六の處、此度諸問屋組合再興に付及取調の處、旅籠屋に義と、諸色直段にも差響の筋無之、其上旅籠屋とも稼方猥に相成のあり、盜賊惡黨共取締にも抱ひに付、旁文化以前に通、橋々御修復定請負并旅籠屋差配古復に義、前書重三良へ中付、旅籠屋共仲間組合も再興中渡の間、一統其旨可存ひ、

一右旅籠屋に義、去ル寅年以來、銘々勝手ニ渡世致ひに付あま、差向人數増減も有之、其上當表に義諸國海陸入込の場所にて、旅客多く立廻りの義に付、旅籠屋軒數九百に限りひあま、諸商賣手廣に御趣意にも相振ひに付、前々に軒數に不抱、現在に委を以、重三良に差配中付の條、此後新規に「旅籠屋商賣」相始ひ者も、重三郎差配可請、同人差配外に同商賣致ひ義不相成ひ、且三ヶ所泊り茶屋に義も、去ル寅年御改革以來、旅客寐泊をも引受、旅籠屋同前に稼方ニ付、右に分別廉相成ひあま、是又不締に抱ひに付、泊茶屋に義も旅籠屋並に通役銀差出、夫々無差支様可致ひ○圖二二八

一大坂床髮結に義、元和年中「已來」、無賃にて牢屋番同所下男に召仕の故を以、町々近在等其者共ニ限り髮結床爲差出、追お取締いた免、仲間組合も相立ひに付あま、内仕賣を唱、内分にあ床髮結同前に稼致ひ者、床髮結に差下に相成相働旨等に義、寛保度以前に度、觸渡七四、四九七等、在之、去ル寅年株札并問屋組合仲間等停止の節、床髮結共牢屋御用ニ召仕の義を勿論を見よ、

○床髮結仲間を再興し牢屋番の勤務を命ず

内仕事を爲す者は床髮結の配下たらしむ

右に者共仲間組合も差止○圖五五九に相成ひ處、此度諸問屋組合再興に付及取調ひ處、髮結と義と諸色直段に差響ひ筋無之、右鉢町在に髮結床爲差出ひ助成を以、往古に無貨なる牢屋御用相勤來ひ義こゝろ、通例無賃人足と類々の譯も違、其上髮結共稼方猥と相成ひると取締(拘)に付、旁文化以前と通、床髮結共牢屋御用を召仕、右に者共仲間組合も如元相立遣、右に付御威光を借、權柄ケ間敷取斗を勿論、不取締と義無之様可致段、元床髮結仲間重立ひ者共へ申渡ひ間、一統其旨を存、諸吏前と通相心得、内仕事と唱、床髮結同前と稼致ひ者共、床髮結と手こ附可相働ひ○圖八〇八を見よ、

右に通此度從江戸表御下知を以申渡ひ間、三郷町中井所と請負地等迄にも、不洩様可觸知者受、
丑正月○次の令と共に、町中家持の承知判形日付は廿八日なり、 信濃 因幡 (同上)

○圖八〇七 同日 佐々木信濃守様、來月御月番被成御勤ひ事、
信濃守様、來月御月番御勤被成ひ間、此段承知可有之ひ事、 (同上)

○圖五九六 二月五日 紀伊一位○治政殿御逝去に付、鳴物停止に事○圖四八 同 日 川筋掟○圖一、事○圖一、二に同じ、 (同上)

○圖五九六 二月七日 中山道熊谷宿外五ヶ宿美濃路墨俣宿外壹ヶ宿奥州道中鍋掛宿困窮に
付、人馬賃錢割増○圖五七六六及六一五一を見よ、 同日 中山道落合宿外八ヶ宿困窮に付、人馬賃錢割増○圖五七六一及六一四六を見よ、

床髮結改人

○圖五九六 二月十日 床髮結渡世に者改人○圖一、事、
元頭取 京屋 辰五良 和泉屋 常二良 同所平野口町
前久太良町壹丁目 吉原町
岸部屋 七兵衛 松葉屋 豊七
錦町壹丁目
重立ひ者 天王寺屋嘉十良 外 五人

今般床髮結再興被仰出ひに付、右に者共床髮結渡世に者調に罷越ひ等と處、紛敷者調に罷越、
致混難(雜カ)ひ由相聞、以に外に亘に付、前書名前外に者に決り引合不申様、右渡世に者に可申聞
置ひ事○圖五九五七を見よ、
二月十日酉下刻 南組惣年寄 (御觸書承知印形帳)

○圖八〇九 二月十六日 石谷因幡守様御忌服に事、
石谷因幡守様御父に實方御伯母、小普請組酒井内藏助様御支配永田金平様御養母御病氣と處、御
養生不被成御叶、去ル八日被成御死去ひ、依之因幡守様定式半減に御忌服、殘日數被成御請ひ
旨御達有之、間、此段承知可有之ひ、以上、
丑二月十六日 南組惣年寄 (同上)

補遺 八二〇 三月七日 西國・四國・中國筋・并因幡・伯耆出雲・石見・隱岐、右國と百姓町人、訴
訟對決日限迄に罷登の様可致事、

今日通達年番町々年寄當郷惣會所に被召呼、惣年寄中々左に通被仰渡、

西國・四國・中國筋・并因幡・伯耆出雲・石見・隱岐

右國と等々百姓町人の、當表に者方掛りの金銀出入に儀、最初其向に訴狀相違の後、定に
日數相満、金主方度々追訴請ひあも、出入内濟を勿論、數月相立ひあも對決にも罷登の族不
少、不埒に至り付、向後嚴重可及沙汰の間、在り領主地頭におもく厚世話在之、成丈可爲相
濟、若又分在之を、最初相違の日限迄に無相違罷登り、對決致し様可取斗旨、今般從江戸
表御下知を以、右國と諸家當表藏屋敷詰役人の中達、尤御料所に分并私領にあも、當表出張役
人無之分を、同所に罷在御用聞町人々、其向に可相通段も中渡の間、此旨可存の事、

丑三月

右觸達等譯を無之間、無急度組合年寄迄寄通達可被中事、

○通達年番北濱貳丁目の
通達日付は三月七日なり、

(御觸書)

圖五五三 三月九日 綿諸島料理烏普請用石類并あふ細工に儀、右仲間組合外に直賣
買致間敷事、

去寅年中株札并問屋組合等停止被仰付の處、其以來〔商法〕取締相崩、諸品下直に成不相成、却
あ不融通に由相聞ひに付、此度諸問屋組合共、前々通再興被仰付の間、是迄に商法に不流、

三郷綿仲間
以外の綿直
買直積を禁
ず

諸島問屋及
仲買以外の
鳥類直賣買
及出買を禁
ず

石問屋以外
の普請石直
賣買を禁ず

諸商人共物價引下ケ方と義精々厚心掛、實直に渡世相營可中旨等と義、去々亥三月中町々の中
渡、猶又右問屋組合等再興相成の分を、都あ素人直賣買不相成の間、前々如く可相心得旨等
も、去子正月中從江戸表御觸達有之の得共不相用、兎角去々寅年以來に仕癖に相泥、取斗の者
共も有之哉、既大坂綿商賣と義、三郷綿仲間外に在り人を廻し、綿直買直積等致間敷、縱
令余商賣相兼ひ共、右仲間に加り可中旨等と義、明和九戌年以來、追々相觸二一〇等を見よ、有之
處、近來猥々相成、諸問屋舟宿亦々町續在り商人共の内、表向に余商賣杯ひせし、在り人を
廻し、百姓と綿直買、或は糶買致し、綿職人共を抱、諸國に買客に致案内の者數多有之、綿屋
共の勿論綿職人に至迄、渡世差支難義ひせし由にて、取締と義綿仲間年行司共願出の條、右
仲間と義の、此度調の上、再興相成の廉に上り、其義相弁、向後綿取扱の者々、縱令余商賣
相兼ひとも、綿仲間に加り可中、右仲間外にて綿取扱、地賣他所賣等決り致間敷の、

一市在り當表に賣出の諸鳥料理鳥共、前々諸島問屋買取、同仲買に賣渡、右仲買が素人に賣渡
ひ仕來にて、右仲間外にて直賣買致間敷旨、天保十二丑年相觸二〇五五、有之處、是又近來猥々
相成、市中住居に者、亦は他所近在等々三郷町内に入込、諸鳥料理鳥共直賣買、并近在等こあ
致出買の者數多有之、問屋仲買共渡世差支、難義と趣を以、兩仲間年行司共前同様願出の條、
右問屋仲買と義も、此度調の上、再興相成の廉に上り、其義相弁、向後諸鳥料理鳥共問屋共
へ賣渡、望に者々仲買買取、仲間外にて直賣買出買等決り致間敷の四〇六〇九
一諸國山方當表に積登りひ普請に相用ひ石類と義の、一旦當表石問屋へ引受、石商人共へ相送

御觸及口達 嘉永六癸丑年

二〇四九

石問屋高寺
屋善右衛門

り仕來にて、石問屋に手ヲ離賣買致間敷旨、天保九戌年相觸○補遺有之處、是又近來猥ニ相成、石商人共荷主又ニ致買積○頭の船人を馴合、石問屋に手を離賣買、右賣人ニ外素人共義も、船頭を直買致○頭の者不少、石問屋業躰ニ差障、難義ニ趣を以、石問屋高寺屋善右衛門義、前同様願出の條、右問屋に義も、此度調の上、再興相成の廉○頭の上を、其義相弁、向後普請石取扱の商人共も、石問屋に及相對、買取の義の勿論、素人ニ右賣人を買取、荷主船人共直買等決め致間敷の、

枋屋仲間以
外の枋屋工
を禁ず

一三郷あふこ細工職の者の、御仕置の有之節、役勤をも仕來の付、右仲間にも不加、外職人共あふこ細工致間敷旨、寶曆五亥年相觸○圖二二二有之處、是又近來猥相成、右職人ニ外、あふこ細工渡世致の者數多有之、渡世差支難義ニ趣ヲ以、あふこ屋仲間年行司共義、前同様願出の條、右仲間と義も、此度調の上、再興の意の廉○頭の上を、其上御仕置者有之節、役勤も前々と同復古中渡の付、其義相弁、向後あふこ細工のものを右仲間に加り可ず、櫓屋を勿論外職人共も、仲間外にてあふこ細工○御書承知印形帳「渡世」致間敷の、右ヶ條と趣の勿論、此度諸問屋組合再興の付、前段中渡并御觸面と趣無違失相守、夫々仲間外にて直賣買等決致間敷の、若亦此後も心得違、右ヶ渡不相用者有之の、其仕義次第嚴重に可ず付の、

右に通三郷町中端迄へも不洩様可觸知の也、

丑三月○町中家持の承知判
形日付は九日なり、

信濃

因幡

(御觸書承知印形帳)

三郷棟問屋
棟仲買以外
の棟賣買を
禁ず

○
【圖五九六】三月十日 當表市中并近在方に出棟を、棟仲買共へ賣渡、猥ニ他所賣致間敷事、當表市中并近在方に出棟の、前々三郷棟仲買の買取、同問屋に賣渡、右問屋仲買共方所にて賣方致仕來の付、出棟不殘右仲買共へ賣渡、猥ニ所にて直賣致間敷義の處、去ル寅年問屋仲買組合等停止被仰渡の後、商法相乱、品と差支、筋も有之の付、去々亥年右問屋仲買○御書承知印形帳「組合」等再興被仰出、諸商賣とも都如前々、何品によらば、其筋問屋仲買等にて可相拂段も、中渡の義に有之の處、右中絶中の流弊に泥、又々不心得の者も有之哉、近年三郷其外近在方に出棟を仲買共へ不賣渡、他所他國に直賣致の者不少の付、江戸表に積下方を勿論、其外賣方にも差障、問屋仲買共難義に趣に相聞の、向後右出棟不殘右仲買共の賣渡、直賣と義決り致間敷の、若直賣致の趣於相聞を、吟味の上急度可令沙汰の、

右に趣三郷町中可觸知の也○圖五三八
一を見よ、

信濃

因幡

(同上)

【圖三五六】三月十一日 問屋組合再興相成の口々を、其品限、素人直賣買不相成の事、去ル寅年株札并問屋仲間組合等停止の節、何國を出の何品にあも、素人直賣買勝手次第たるを旨、從江戸表御觸有之の處、今般調の上、問屋組合等再興相成の分、都々素人直賣買不相成の間、前々如く可相心得段、猶又去子正月中御觸○圖五九〇と趣も有之の得共、兎角に右

御觸及口達 嘉永六癸丑年

二〇五一

問屋組合再興の分は素人の直賣買を禁ず

紀州家簾中遺骸通行道筋書

寅年以來仕癖相流、商法混雜いさし、渡世差支ひ由を以、此度再興相成ひ三郷綿仲間并諸鳥問屋同仲買石屋(問取)あふて屋仲間練問屋同仲買、右夫々年行司共等々追々依頼、其品限素人直賣買差止し義、再觸差出○圖五九六三及五九六四を見よ、右外前同様問屋組合等再興相成ひ口々内こも、追々同様再觸願出仕宜こ至ひあり、際限も無之而已ならず、前書御觸面こも相背、以て外不埒事こひ間、其品限、仲間外素人し身分不顧、地廻り并他所し者と直賣買直取引等致、或ひ當表に可積登荷物を、入津以前途中に出張、又い在に荷元に入込、糶賣買杯いさし義無之様相改、右問屋組合等再興こ付、御觸面し趣無違失相守、都あ素人直賣買不相成次第、町人共い能こ論、向後右躰し儀無之様精と取締可やひ、

丑三月○町中家持の承知判形日付は十一日なり

(同上)

圖三五七 三月十六日 紀州御簾中様御遺體御通棺御道筋書事、

紀州御簾中様○豐子齊齋室御遺骸御通棺御道筋、來ル廿六日、牧方街道を野田町通野田橋、相生町を京橋南詰濱側西へ、今橋御渡西に、境筋南へ、備後町西へ、御堂筋南に、西本願寺北に門を御入、御晝休、夫々御堂筋南へ、北久寶寺町東へ、心齋橋筋南へ、博勞町東へ、境筋南へ、長堀橋日本橋御渡、長町住吉街道、

○本令端書に三月十六日御觸とあり

(御觸書判形帳)

圖五九五 三月十九日 東海道平塚宿外拾ヶ宿困窮こ付、人馬賃錢并渡船賃共割増し事○圖五及六一五

四を見よ

銀箔方差配人の交替

圖五九六 同日 銀箔差配人糸屋清兵衛病氣こ付、跡役伊勢屋源助へ被仰付ひ事、

京都に外こ銀箔打ひ義不相成旨、先年か觸置、猶又爲取締、京都銀箔中買定職に内兩人、銀箔方差配人し名目差免ひこ付あり、右し者共國に在町に相廻、銀箔隠打し者相糺可や間、此旨可相心得旨、(文政カ)天保元寅年正月觸置○圖四四四二を見よ、ひ處、其後退役し者有之、當時差配人播磨屋源兵衛糸屋清兵衛兩人に内、清兵衛義病氣こ付退役す渡、跡役し義の中買共し内、伊勢屋源助に銀箔差配人す渡ひ間、此旨可相心得ひ、右し通可觸知もの也○圖五七五五を見よ

丑三月○南組惣年寄の副書日付は十九日なり

信濃 因幡

(御觸書承知印形帳)

圖三五八 三月晦日 阿波堀町年寄讚岐屋八兵衛外壹名、役儀出精相勤又の忠孝を竭ひこ付、

夫々御褒美被下ひ事、

阿波堀町年寄

讚岐屋八兵衛

役儀出精の年寄讚岐屋八兵衛に銀を賜ふ

右八兵衛義、丁入用減方心を用ひ、公事出入可及儀に、可成丈不事立様取斗、其外丁内貧窮し者への米品等相恵、役儀出精に相勤ひ段、(奇)寄特こ付譽置、銀壹枚爲取遣ひ、彌此上可相勵ひ、

周防町 大和屋定七別家手代

同町

御觸及口達 嘉永六癸丑年

二〇五三

大和屋伊助

大和屋伊助の忠孝を賞し、錢を賜ふ

右伊助義、幼年より、主人定七三代以前定七方へ奉公に罷越、實跡に相勤、殊に主家身上不如意相成ひ儀を致心配、商賣向并家事等迄引受取締ひに付、追々身上向立直りひ儀の、全伊助忠勤故に義と相聞、當時別家罷在、不相替主家へ日勤致し、幼主を守立、殊に伊助兩親存生中の孝養を竭ひ由相聞段、寄特に付擧置、鳥目拾貫文爲取遣ひ、猶此上身分相慎、精々可相勵ひ、

丑三月○南組惣年寄の副書日付は晦日なり、

(同上)

觸五九七

○觸四に同じ、

觸三五九 四月廿八日 靈源寺祠堂銀貸付支配人代り事、

設樂八三郎御代官所
攝務西成郡難波村北丁

大和屋善右衛門借屋

三河屋卯吉

靈源寺祠堂銀貸付支配人の交替

右に者、京靈源寺祠堂銀貸付支配人九に助町壹丁目大和屋利右衛門借屋川崎屋熊治郎、幼少に付代判伊助、跡支配人に相成ひ事○觸二四〇を六を見よ、

○南組惣年寄の副書日付は四月廿八日なり、

(御觸書承知印形帳)

補觸一八九

四月 甲州道中上野原宿外九ヶ宿困窮に付、人馬賃錢割増に事○書附留により補入を六二五九を見よ、

尙觸五七七四及

補觸八二

五月十五日 往來又り明地面等こゝ、子供翫に花火焚や間敷事、

道路明地等に花火を焚ふ可からず

往來又り明地面等こゝ、子供翫に花火焚ひ義無之様、丁内方心を付可被やひ、以上○觸二四三を二を見よ、

丑五月十五日

(御觸書承知印形帳)

觸五九六

五月十八日 三笏山中法藏寺御宮其外大破に付、修復爲助成、三ヶ國拜御府内勸

化御免に事○觸五九七を五に同じ、

觸五九六

○觸五九七を五に同じ、

觸三六〇

六月朔日 地車・太鼓・祓りもの等、飾又と藝者と衣裝、自今木綿晒を可相用、右届

出に上及見分ひ事、并地車行逢ひ節、曳違と唱、事六ヶ敷中掛間敷事○觸二一七を八に同じ、

觸五九七〇

六月四日 中山道和田宿外七ヶ宿困窮に付、人馬賃錢割増に事○觸五七七三を見よ、

觸三六一

六月晦日 南久寶寺町五丁目年寄鋳屋嘉兵衛外壹名、役儀出精相勤又と忠勤を竭

ひに付、夫と御褒美被下ひ事、

南久寶寺町五丁目年寄

鋳屋嘉兵衛

役儀出精の年寄鋳屋嘉兵衛に銀を賜ふ

右に者年寄役勤方宜、町入用減方心を用、公事出入可及義の、成丈ヶ不事立様取斗、其外寄特に取斗ひぬ、一段相聞ひ付擧置、銀壹枚差遣ひ間、彌此上可相勵ひ、

立賣堀四丁目

和泉屋與助

和泉屋與助の忠勤を賞

右に者貳拾四ヶ年以前寅年、右同町和泉屋源兵衛方に奉公に罷越、實跡に相勤ひ處、主家身上

御觸及口達 嘉永六癸丑年

二〇五五

追々不如意ニ相成、借財多、請目安出入濟方難出來、身軀限可相渡及仕義、主人源兵衛も多病ニ付、此者引受掛合爲行届内、源兵衛病氣追々相重り、種々致薬用介抱へ共、養生不叶致病死、同人悴龜之助源兵衛を改名致相續、幼年ニ付渡世向家事等此者引受、實直ニ取引致しニ付、借財方約定通皆濟致後、源兵衛壹人立渡世出來様相成、四ヶ年以前戌年、主家方金子并諸道具貫受別宅致し、其後女房呼迎、夫婦諸共肩入致日勤、身分を慎、主家大切ニ忠勤を竭(奇)、寄特ニ付譽置、鳥目五貫文差遣、此後も彌主家を大切ニ可致し、

六月○南租惣年寄の副書日付は晦日なり、

(御觸書承知印形帳)

三三三 七月朔日 七夕短冊竹精靈祭品々、川々へ捨間敷、尤右品々々 公儀御入用

こゝ船を出し、取捨させし事○圖二八六に同じ、

五七七 七月四日 峯壽院○峯姫法號様御逝去ニ付、鳴物停止し事○禮裁圖五五四〇に同じ、尙圖四三二七を見よ、

五七三 七月五日 中山道下諏訪赤坂兩宿困窮ニ付、人馬賃錢割増し事○圖五七七九を見よ、

八三 七月六日 千日參七墓廻り者、鉦太鼓を携ひ儀可爲無用し事○圖七九五に同じ、

八三 同日 石谷因幡守様御忌服し事、

因幡守様御父に實方御叔父、御書院番土岐豐前守様御組仁賀保内記様御養父御隱居、仁賀保誠遊様、御病氣に處、御養生無御叶、去月廿九日被成御死去に付、因幡守様定式半減し御忌服殘日數被成御請ひ、依之今六日方信濃守様御月番被成御勤ひ旨、御達有之の間、此段承知可有之、以上、

丑七月六日

(御觸書承知印形帳)

五七三 ○圖一 一に同じ、

三三三 七月十七日 紅毛錫御買上し事、

口 達

紅毛錫の買上所有者の調査と届出期限

此度紅毛錫急御入用し義有之の間、市中其筋商人共々勿論素人(お殿)も、右錫所持し者有之(可也)に哉(深層審判形帳)、「二付」、夫々持合し分、時々相場を以御買上相成、間、其旨を存、壹町限町役人共嚴重取調の上、有無共來ル廿二日迄に、方角と惣年寄方へ可出、若隱置、後日に相顯、い、當人并町役人共迄も、急度可出付、

右と通三郷町中端迄も不洩様早々可通事、

丑七月十七日

右と通被仰出の間、於町々格別入念取調、有無共書付、年寄印形にて、來ル廿二日五ツ時迄、惣會所へ可被差出、尤所持有之分を斤數認可被差出、御急し義ニ付、等閑と義無之様、早々取調可出、以上○圖二四一七を見よ、

丑七月十七日(西中刻)

(御觸書承知印形帳)

五七四 ○圖六 に同じ、

三三三 七月廿五日 酒中次々者共、銘々量樽所持致度旨願出に付、聞届し事、

當表三郷酒造人共々酒賣渡り節、壹斗壹升入し溜樽を以量渡り處、右の夫々手元ニおろく拵

御觸及口達 嘉永六癸丑年

二〇五七

南租惣年寄の副書

三郷酒造人
に量樽の使
用を許す

酒中次人に
も量樽を所
持せしむ

將軍家慶
齋

義ニ付、少シツ、違目も有之、其上先般株仲間組合等差止相成ひ得々、彌以賣方升目不同有之、
自ラ酒直段ニ響合、不締ニ相聞ひコ付、取調ニ上、右溜樽相止、新規ニ酒造屋共手元ニて同様
升目ニ樽爲拵、量樽を名目改、三郷於惣會所組ニ者ニ爲及見分ひ上、焼印打、兼酒造ニ義取
締居ひ惣年寄共へ取扱付、酒造稼鑑札ニ應、酒造屋共へ渡遣ひ付、右品を以量渡ひ様可致、
其外取締等ニ義、去ル午年四月口達五〇〇二一七を以爲相觸ひ付、其已來酒中次ニ者共酒造屋方買
受ひ酒、當地小賣酒屋を勿論、下筋國々石數賣捌ひ節々、酒造人共手元ニ量樽借受相用ひ得
共、多人數ニて行届兼、商賣差支ひコ付、中次ニ者共も銘々ニ量樽所持致度願出、取調ニ上承
届、新規ニ量樽爲拵、酒造屋共同様、三郷於惣會所組ニ者爲及見分ひ上、焼印打、酒造取締
居ひ惣年寄共へ取扱付、仲次ニ者共へ渡遣ひコ付、右ニ趣小賣屋共を勿論、酒賣買ニ携ひ者
とも令承知、彌不正無之様、嚴重ニ可致賣買ひ、
右ニ通三郷町中不洩様可付付、

丑七月〇南組惣年寄の副書
日付は廿五日なり

(御觸書承知印形帳)

〇五九七五 七月廿六日 公方様聽御ニ事〇體裁圖五四一〇に同じ、尙圖五九七九、
五九八二・五九八六及五九九四を見よ、

〇五九七六 同日 餌指漁師殺生差止ニ事〇體裁圖三〇二九に同じ、
尙圖二三六九を見よ、

〇三三六五 同日 御穩便中自身番并町中慎方ケ條ニ事〇體裁圖一九七九に同じ、但し、第三項の但書
遊ヒ義も、尤相慎可事に改め、第十項を「商賣から寄、目印ニ差出有之小職、其外右類ニ品取置可事
事」に改め、又末項嵩高なる職商賣を列舉せる内、道具市の次に「大道ニて米搗」の一項を加ふ、尙圖二三
六六・二三六九・二三七〇・二三七
四・二三七五及二三七八を見よ、

〇三三六六 七月廿七日 右箇條書ニ無之共、嵩高ニ職商賣急度相慎可事、

覺

總て嵩高な
る職商賣を
讀む可し

外船渡來に
つき浮説を
唱ふる勿れ

右浮説に乗
じ米穀其外
金銀諸品を
買持するを
禁ず

一此節御穩便中ニ付、諸事相慎可旨、最前ケ條書を以テ渡置〇圖二三六六、
五を見よ、ハ處、嵩高ニ商賣ニあも、
右ケ條ニ啗ト書載無之分々、不苦義ト心得違ハ族有之間敷共難ナハ條、右ケ條書ニ無之共、嵩
高成商賣体ハ急度相慎可旨事ニ付、何品ニ不依、店先嵩高ニ商賣店細工水揚ケ大道ニあ荷
造等迄も、銘々隨分相慎可旨事ニ付、此度ハ格別重キ御穩便中ニ心得々、都メ義、尙亦町々
末々迄も心得違無之様、重々付、急度相慎可旨事、

丑七月廿七日酉下刻

(幕令)

〇三三六七 七月廿七日 異國船渡來ニ付浮説ヲ觸、又ハ右ニ乗、米穀其外金銀諸品等買置

口達

都メ浮説ヲ觸、又ハ右様ニ張昏杯致ハ族有之ハ、見付次第捕置可訴出旨、兼メ中渡〇圖二〇三
三を見よ、
有之處、此節長崎表ハ異國船渡來致、尤別條筋更ニ無之處ニハ、其儀を勿論、最前相州浦
賀ハ渡來ハ異國船速ニ退帆致ハ義(等義)ニ品を付、浮説ヲ觸ハ之有之由、就メ右ニ被惑、時合
をも不顧、夫々名目を附、米穀其外金銀諸品杯、専ラ買置ニ義心掛ハ之も不少、自然融通ニ
も拘リハ哉ニ相聞、以テ外ニ事ニハ條、右ハ此節柄ニ義別メ相慎、銘々産業を正路實直ニ可相
營ハ、若又右ヲ渡を不相用、此後も前同様浮説ヲ觸、或ハ右ニ乗、一己ニ利欲ニ迷ヒ、肝

曲に取斗致し族有之、い、嚴敷可付の間、一統其旨可存、
右に通三郷町中末迄も不洩様早可聞の事、

丑七月○御觸書判形帳に、南組惣年寄の副書日付を廿七日亥上刻とす、

(御觸書承知印形帳)

八月廿八日 御穩便中町中慎方儀に付、惣年寄中から渡り事、

一往來人謠、小哥、淨留理、其外雜言并高聲を給をの賣歩行の等、自身番のより爲慎可事、

高燈籠
軒先燈籠

一高燈籠并軒先挑灯差止可事、

一接待相止可事、

煮賣其他大
道の出店

一大道に煮賣其外給をの、西瓜、菓物、甘酒等出店類、差止可事、

軒前又は濱
側の納涼

一軒先又は濱側等に涼、儀、差止可事、

懸行燈
釣提燈

一もの干に涼、灯を燈し、儀、差止可事、

懸行燈
釣提燈

一商賣体により、軒先へ懸行燈又は提灯釣り、儀、差止可事、

納涼船

一川中へ涼舟無用事、

一納家下には非人火を焚、儀、差止可事○圖二三六五及二三六六を見よ、

○年寄の副書日付は七月廿八日なり、

(御觸帳)

圖三六

七月廿九日

江子嶋西町京屋忠兵衛支配借屋綿屋福松同居叔母たる外六名、忠

孝を竭又の役儀出精相勤に付、夫、御褒美被下の事、

江子嶋西町
京屋忠兵衛支配借屋

綿屋福松同居叔母

と

る

孝女はるに
錢を賜ふ

右たる義、兼、實躰成(者)の、兩親に意に不背様相心得、母たつ義四ヶ年已前中風と症相煩ひ、歩行難相成、其後も打臥居を、藥用介抱爲行届罷在、父吉藏義の去、亥年病死致、兄太助熊藏儀の濕病相煩、働難相成、太助の四國順拜に罷出、立歸り不、熊藏義の今以不相勝、妹すへ義の他へ縁付、男子兩人出生後、夫致家出に付、幼少に子供兩人召連歸、大勢に家内難育に付、中合他へ奉公稼罷出、聊給金を家事入用に立足、別宅致居、兄藤七俱、致心配の由に、得共、同人も身薄に夫、際立世話も行届兼を、此の日夜手仕事等、精を出し、大勢に家内を養ひ、其上右躰極老に母病氣介抱万事爲行届、孝養竭、病身に兄熊藏を大切に致し、幼少に甥兩人を憐、其身の鹿服を着し、物見遊藝等へも罷越、慎方宜、家内陸敷相暮の段、神妙寄特に付譽置、鳥目五貫文差遣ひ、

道頓堀久左衛門町

小嶋屋市兵衛支配りや

女房 界 屋 德 藏

さ

孝子堺屋徳
藏夫妻に錢
を賜ふ

右徳藏と儀、兼、兩人共働稼出精致し、徳藏父徳兵衛に意に不背様大切に致し罷在、同人義

御觸及口達 嘉永六癸丑年

五ヶ年已前酉年方中風、症相煩、半身不隨、歩行難相成付、藥用療治等、心を付、折々好
品の買調相与へ、退屈不爲致様仕向遣、入湯杯望、節の、徳藏脊負さと付添、寂寄湯屋へ連參
り爲致入湯、其外日、兩便、世話の勿論、介抱向も厚爲行届、右躰徳兵衛發病後の、徳藏義働
用有之あも、他國へ罷出、義無之而已から、平常も夫婦の内、何事壹人の在宿介抱致、程
心を、尤兩人共衾服を着、物見遊參等も不罷越、身分相慎、中合孝養を竭、段、神妙寄
特、付譽置、徳藏へ鳥目五貫文、さとへ同三貫文差遣ス、

南久太良町三丁目年寄

平野屋六兵衛

南農人町貳丁目年寄

堺屋他四郎

右、者共儀、年寄役勤方宜、町入用減方精、心を用、公事出入可及儀有之節、可成丈ケ不事

立様取斗、諸事取締方行届、其外寄特成心懸ケ有之趣相聞、付譽置、銀壹枚ツ、差遣ス、

天満拾壹丁目年寄

栢屋吉五郎

○前文
に同じ、

大川町

鴻池屋與三吉病身、付
代判別家手代

役儀出精の
年寄平野屋
六兵衛外壹
名に銀を賜
ふ

役儀出精の
年寄栢屋吉
五郎に銀を
賜ふ

米屋定七

米屋定七の
忠勤を賞し
錢を賜ふ

右定七儀、幼年、砌、書面与三吉七代已前与三兵衛時代、奉公住致、節々、實躰ニ相勤、度
々、主家名前人相替り、得意先氣受不、身上向不如意、相成、義を精、心配致、主家家事向
万端實意ニ取締、付、追々立直り、渡世も已前、通手廣ニ相成、當時別宅罷在、得共、無怠主
家へ相通ひ、數年忠勤を竭、段、寄特、付譽置、鳥目拾貫文差遣ス、

(御觸書承知印形帳)

丑七月、南組惣年寄の副書
日付は廿九日なり、

御穩便中、付、町々自身番嚴重相勤可事、

格別重キ御穩便中、儀ニ付、此間方追々相達、趣、尙又昨夕も委敷及演舌、四、一通、篇
々、申合可相慎、且又自身番、儀、雇人差出置、あも相濟、様相心得、あ、以、外、事、拾
子且又盜難等、儀も無之様相心得、詰居、處、方、丁内相廻、節、人數差繰い、相廻、者、
外、詰所に相残り、嚴重相勤、様可被、合、御組衆晝夜繁々廻り、方被、仰付、旨、此間、旁、能
々相心得、少、も等閑不、儀無之様可被、合、此間中相達、趣、條、外、も精、心、付、ケ、行
届、様可被、合、事、三三六五及
二三七六を見よ、

七月廿九日未下刻

北組惣年寄

(御觸帳)

三三六 八月朔日、明二日、差止、慎等、差免、職商賣、事、

御穩便中、諸商賣向差止、又、慎等、義、去、ル、廿六日、渡置、四五七六及
二三六五を見よ、處、身薄、もの、日數、お

御觸及口達 嘉永六癸丑年

二〇六三

解禁の職商
賣(其一)

自身番には
雇人を差出
す可からず

湯屋

一湯屋 經、あま、可致難義哉ニ付、左ニ通、

米市場

但、火ニ元別あ可念入候、尤夕七ツ時限相仕舞、入湯可致物静候、

銀相場

漁獵

一米市庭
一銀相庭
一漁獵致し候もの

但、商賣を追あ及沙汰、迄き可相慎、尤漁船ニ遊參し者爲乗ヤ間敷候、

油相場

一油相庭

錢相場

一錢相庭

右職商賣ニ分、明二日方差止慎等差免候、尤此節柄ニ儀ニき、得共、夫ニ渡世ニ儀ニ付、右ニ通ヤ渡、儀ニハ間、銘ニ「相慎」、嵩高ニ儀無之様、諸事相静可致候、右躰職商賣差免、迎、若年又も身輕し者、最早平日ニ通と心得違、不慎無之様可致候、

右ニ通町ニ末ニ迄不洩様可ヤ聞事○圖二三七

○北組惣年寄の副書日付
は八月朔日申中刻なり、

(同上)

關五七七 八月二日 右大將様 上様ニ奉稱候事○體裁圖三三二九に同じ、

圖三三〇 同日 明三日方差免候職商賣事、

解禁の職商賣
(其二)
青物市場

一青物市

音高き職商賣及嵩高なる職商賣

一音高き職商賣并嵩高成職商賣

但、隨分可致物静候、尤普請鳴もの船作事等と別段ニ候、

火を用ふる職商賣

一都あ火取扱候職商賣

但、火ニ元別あ可入念候、

傾城町

一傾城町商賣

但、火ニ元別あ入念、隨分可致物静候、

泊茶屋

一泊り茶屋

但、火ニ元別あ入念、可致物静候、

煮賣屋

一煮賣屋

但、同斷、

右職商賣等明三日方差免候、尤格別重き御時節柄ニ、得共、夫ニ渡世ニ儀ニ付、右ニ通ヤ渡候儀ニあ、御穩便中彌以相慎、嵩高無之様、諸事致物静、火を取扱候類ハ尙更入念可ヤ義、勿論儀ニ候、右職商賣すじ差免、迎、昨日及相達九を見よ、通、銘ニ平日ニ通と心得違、不慎儀無之様可致候、

右ニ通町ニ末ニ迄不洩様可ヤ聞候○圖二三六
五を見よ、

丑八月二日付は同日午上刻なり、
○北組惣年寄の副書日

圖三三七 八月五日 搦米屋駄賣屋共、餘分ニ石數買入、内ニこあ他所賣致間敷事、

御觸及口達 嘉永六癸丑年

米價騰貴

搗米屋及駄賣屋の白米買占及他所賣を禁ず

解禁の職商賣(其三)

五月以來の旱魃

口達

當年作物と義、豊凶もいよさ不相定、當地有米と義平年通にて、新穀取入迄有亦も有之の處、追々米相場引上ひ趣ニ相聞如何の、右に付あま自ら人氣買持の方ニ相傾、且搗米屋駄賣屋共の内に、一己と利欲ニ耽^(四)、日々小賣駄賣等目當^(五)外、餘分と石數買入、内々他國に賣捌、徳用取ひ裁^(六)趣も相聞、以^(七)外に賣^(八)、右躰に取斗増長の^(九)あま、土地と有米追々相減、彌直段引立ひ而已あらば、小前末と者共可及難義の條、其筋渡世に携ひ者共、土地と米融通ヲ專一ニ心懸ケ、日用賣捌方目當^(十)外、餘分と米買^(十一)不及^(十二)、内々他所他國に賣捌ひ義を、決あ致問敷、自然右躰と者有之にあつて、吟味と上急度可令沙汰^(十三)、尤搗米屋共小賣米と義も、元付と割合を以、一己と利潤を離、成丈ケ下直に賣渡ひ様可致^(十四)、右と通三郷町と末と迄不洩様可^(十五)聞ひ賣^(十六)を^(十七)見^(十八)、

丑八月○町中家持の承知判形口付は五日なり

(御觸書承知印形帳)

三三七三

八月六日 川魚市雜喉場魚市魚鳥商賣御免^(十九)事

○體裁圖一九八一に同じ、但し、第一項第二項を前後し、且つ「生魚市場」とあるを雜

喉場魚市に改む、尙三三六九を見よ、

三三七三

八月七日 御穩便中ニ付、火と元別あ入念可^(二十)、并遊山ケ間敷猥ニ他行政間敷事、

口達

此節重き御時節柄と義ニ付、火と元別あ入念、様、寂前^(二十一)渡置^(二十二)、義ニ付、町と自身番無怠町内見廻り、義と可有之、得とも、當年^(二十三)儀を五月已來數^(二十四)日照續^(二十五)に付あま、諸品乾さ

火の元取締を嚴ならしむ
行樂に耽る可からず

解禁の職商賣(其四)

素人の慰に漁獵するを禁ず

強^(二十六)く、自然手過チ等及出火、様と義有之、あま、以^(二十七)外と義、此節柄別あ恐入、義と、既此日^(二十八)ニ至、繁と手過チ斷等も有之、間、猶此上町役人共々無怠見廻り等いと、末と迄無油斷火と元念入、様可致^(二十九)、

○北組惣年寄の副書日付は八月七日なり

(御觸帳)

三三七三

八月九日 御城前芝場において養賣商致^(三十)ひ者、并兩御役所近邊明地にお夫と店を

出、小商致來^(三十一)ひ者共、慎差免^(三十二)事^(三十三)、尙圖二三六五を見よ、

三三七三

八月十四日 御時節柄ニ付、素人共魚釣又と網舟等ニ罷越間敷事、

今十四日八ツ時、通達町と年寄當惣會所へ被召呼、惣御年寄江川庄作様を左に通被仰渡^(三十四)ひ、格別と御時節柄ニ付、川と魚釣亦と網船等ニ罷越^(三十五)ひ義、決あ不相成^(三十六)ひ處、此頃心得違、猥^(三十七)罷越^(三十八)ひ者多分有之由、甚以不愼^(三十九)に至、夫と渡世と者と格別と義、素人慰同様^(四十)ニ、當所川とと勿論近在向遠方と共罷越^(四十一)ひをの、御組廻り中御見當相成、の、其町と別あ不都合^(四十二)と義、御咎可有之の間、縦令子供と共右様と義無^(四十三)之様、急度相愼^(四十四)、様、町と年寄より可^(四十五)聞^(四十六)ひ間、組合町と通達可致様被仰渡^(四十七)ひに付、御達^(四十八)上、此段御承知^(四十九)と上、御調印^(五十)にお早と御順達可被成

御觸及口達 嘉永六癸丑年

二〇六七

ひ、已上○圖二二六

○通達年番北濱貳丁目の通達日付は八月十四日なり、

(御觸帳)

○圖五九七

なるべし、

補遺 八二七 八月十五日、御目付松下大學頭様御到着、事、

御目附松下大學頭様、唯今北組惣會所被成御着の間、此段承知可在之、以上、

八月十五日

北組惣年寄

(御觸書)

圖五九七 八月十七日 普請儀差免、事、鳴物儀を追ふ可申渡、事○體裁圖二七六五に同じ、尙圖五九七五を見よ、

圖三三五 同日 夜市、夜店商賣、并船作事等差免、事、

覺

一 神明六齋夜市

一 順慶町其外町、夜市

一 都府夜店商賣

一 諸船造作

一 湯屋渡世者共、夕七ツ時限不及焚仕舞、平日仕來、通焚可申、

但、火元別、可入念、

右、通明十八日、差免の間、勝手次第可致職商賣、勿論此節柄儀、可申得共、夫、渡世、

解禁の職商

賣

(其五)

夜市

湯屋

船作事

義、付、右、通申渡、儀、條、若年亦、身輕、者共心得違、嵩高、儀無之様、一同相慎、諸

事物靜、い、別、火、元入念可申、

右、通町、末、迄、不洩様可申、○圖二二六

丑八月十七日○北組惣年寄の御書日、

(御觸帳)

圖五九〇 八月廿七日

松平長吉郎殿御逝去、事○體裁圖四〇一八に同じ、但し、本文「御機嫌伺等無之」

あり、尙圖五九三二を見よ、

下ケ紙

此御觸面鳴物御構無之義、長吉郎様御逝去、付、鳴物御構無之義、先達、被仰

渡有之、鳴物停止御構無之義、此段心得違様可仕旨、惣年寄中、御口上、

被仰聞、事、

(幕令)

丑八月廿七日

圖三三六 同日 町、自身番、勿論町内見廻方、忘無之様可致事、

口達

御穩便中町方一丁限、丁人共自身番無忘様、可申、其外等、儀、最前相觸置○圖八一、處、

此節所、捨子并盜賊等、訴追、有之、全く町、番人見廻り、忘、故、義を相聞、以、外、事、

町、自身番を勿論「晝夜」町内見廻り、忘無之様、火、元等別、入念可申、自然等、

義於有之、急度可令沙汰、

捨子盜賊の
出訴多し
自身番の意
慢を戒む

右に通三郷町中不洩様可申事○圖八

丑八月○北組惣年寄の副書日
付は同日未中刻なり

(御觸帳)

圖五九八 九月二日 家慶公御院號、御贈位、御贈官被爲濟○體裁圖三三
事三五に同じ

圖五九八 九月四日 町々自身番見廻方行届の様可被申合事

今四日五ツ時、通達町々年寄惣會所に被召呼、惣御年寄中左に通、

御穩便中何事も晝夜番被致ひ處、町々内此節に至り、捨子又も被盜し訴をの度と在之由、

右に付先月も御口達書○圖二三七を以被仰出ひ趣、彌不行届無之様、猶又精々町限被申合ひ

様ニ被致度ひ、惣躰嚴重ニ行届ひも、町々内行届兼ひ儀在之ひも、都あし不行届様相

成、如何事○間、別あ其儀を存、銘々念を入ひ様ニ可被申合ひ、此旨組合町々早々篤々

相通置可被申事、

九月四日

(御觸書)

圖五九八 九月五日 未曾有に旱魃あり、川々通船を勿論呑水迄も差支ひニ付、爲御救臨

時増浚御取計被成ひ事、

百餘日不雨ニ付、未曾有に及旱魃、既ニ大川を始、堂嶋川其外堀々内、干沙ニ一切水無之

様相成、通船の勿論呑水迄も差支、以て外に義ニ付、俄ニ厚御勘考の上、爲御救大造に攝分浚

又の浚取沖捨等、應場所御取斗有之、既ニ明六日御取掛り有之、多分御入用高にも相及、

御仁恵に程難有可奉存ひ義の勿論事○條、於町々船方并諸商の勿論、都あ不洩様可被相達

故家慶に慎
徳院と諡す

自身番を嚴
重に勤む可

市内諸川の
潤濁と飲料
水の閑乏

臨時川浚と
差手期

土砂入用の
者は届出づ
可し

強ひて町々
より上金又
は人足差出
等を申出づ
るに及ばず

浚土砂入用
の向は申出
づ可し

一己並同志
又は仲間よ
り上金を申
出づるは差
支無し

事、

但、本文御用ニ付、此方共ニ内掛り被仰付ひ間、土砂入用に分り、右等ニ爲取扱、西寄會所

に出席いも一可罷在ひ間、四ツ時八ツ時迄に間、同所へ書付可有持參ひ、尤此節柄に義ニ

付、御浚所へ年寄其外不及罷出ひ○圖八二

丑九月五日

(御觸書承知印形帳)

圖三三七 九月七日 慎徳院様御法事、於専念寺執行○體裁圖二二五
事五と大差なし

圖三三七 九月十一日 臨時増浚被仰付ひニ付、御入用御差加に儀心得方事、

今日南組惣會所に通達町々年寄被召呼、惣御年寄永瀬幾代助様左に通被仰渡ひ、

此度臨時増浚被仰付ひ付、是迄も右様節々、町々組合又は一町限あり、御入用御差加に心得

ヲ以、上金又も人足差出、或は人足代銀等冥加ニ差出ひ義有之ひ處、右町名を以上金等致ひ差

ひ、此節柄に義にも有之、右等自ラ町入用ニ相響ひ義○圖二四間、是非差出ひ事と相心得ひ義にも無

之ひ間、町々年寄其趣相心得可被申ひ、土砂入用と向を申立ひひ、御浚に時宜次第可被下、

尤沖捨等も大造に義ニ付、入用ニひひ、聊々も申出ひ方、御都合にも可相成ひ、

一右御差加に廉、實々冥加を存、町人一己に申出、赤生同志と者申合、申立ひ義の勝手次第に

亘○ひ、且亦同商賣申合、仲間と年行司又も重立ひ者惣代等方申立ひ類々、是又同様可爲勝

手次第○、寄特に志有之ひも、不遂時を冥加を存ひ義も不相通、残念に可存、左様と向無之

様、於町々行届の様可被申合ひ、

御觸及口達 嘉永六癸丑年

右に趣組合町へ相通可被申事〇圖八一九及八二二を見よ

丑九月〇當番綿袋町の通達
日付は十一日なり

(御觸書承知印形帳)

圖三八 九月十二日 御中陰も相満ひに付、自身番を御免被成ひ得共、木戸火元等取締

方弛不申様可致事〇本文體裁圖一九八五と大差なし、加ふるに左の附記あり

右に通被仰出、處、未所作に致しはもの鳴物御免に御沙汰無之儀に付、旁町に物騒ありき儀無之様可致、町に木戸に義も、此節に通、暮六ツ時限りべ切可申、御組衆廻り方爰是迄に通り有之儀に付、其旨相心得、通例自身番其外共御觸面に趣申合、町内末迄入念相心得様可被相觸ひ、以上〇圖二三六五及二三七九を見よ

九月十二日申中刻

北組惣年寄

(御觸帳)

圖三八 九月十六日 和錫類御用と有無、御沙汰有之に迄り、他所へ相送ひ儀に勿論、

地賣共致間敷事、

紅毛錫に義、先達を御觸〇圖二三六三を見よ、有之、其砌所持と分差出に相成ひ處、猶又和錫御用に付、其筋取扱ひ者に申相調ひ處、錫器物潰シ品有之、右商のせりひ者と手前をいと、吹改ひを道具錫と相唱ひ由、右に類の全品劣に可有之に得共、是等品御用に可相成哉と有無、當時御調中に有之に間、折錫に仕立ひを始、都あ上品下品に不抱(拘)、古器物に共、錫類他所へ相送ひに勿論、地賣共追お御用と有無御沙汰有之に迄り、何方を注文有之に共、賣引致間敷に段可相達

町内の取締を嚴ならしむ

和錫御用

道具錫

錫類の他所送及地賣を禁ず

臨時川渡は官費を以て之を行ひ民間の上金を要せざるを告ぐ

旨、御沙汰に付、其筋携ひ者の猶更に義、素人を取り扱ひ者へも、心得方不洩様可被申聞ひ、若此上密に賣引致し者有之、の、急度御糾可被成旨に、間、其段も可被申達ひ、尤他所方買入ひ義に不苦ひ、此旨猶町に不洩様、一統へ篤と可被相達ひ、以上、但、無據義有之に其譯此方共へ書付を以申出ひ、相伺ひ上可及差圖〇圖二四一七及圖二四二三を見よ

丑九月十六日申上刻

(御觸書承知印形帳)

圖五九二 九月十七日 鳴物に儀、所作に仕はもの計御免に事〇體裁圖五四一五に同じ、尙圖五九七五を見よ

圖三三七 同日 右に付、火難盜難等無之様、取締入念可申事〇體裁圖一九八六と大差なし、尙圖二三七八及二三三八を見よ

圖三八 同日 臨時増渡に儀、都あ御入用を以御取計相成ひに付、御差加に儀不及申

出の事、

一此度市中川に御渡被仰出に付、御入用と内に御差加へに義、是迄右等と義町に方も申立有之に處、此節柄に義にも有之、町入用と差響可申付、是非差出の事を相心得ひに無之旨相達置ひ、將又一己亦も同志と者申合、或も同商賣仲間申合ひ類と、差出ひも勝手次第に趣、是又相達置〇圖三八二を見よ、ひ得共、御渡追と抄取、都あ御入用を以御取計相成ひ義に付、一己并同志又を仲間御入用差加に義も、町に同様、差出ひ義に不及旨可被申達ひ事、

九月十七日

(御觸書承知印形帳)

圖三六〇 九月廿三日 御日柄相立ひ得共、火元元入念、諸事慎方不弛様相守可申事、

口達

御觸及口達 嘉永六癸丑年

御中陰中市
中靜謐なり
しを賞す

御中陰中諸事相慎、可致穩便旨ヲ渡置ハ處、火事沙汰等々無之、町中物靜ニシ、畢竟町人共中合セ行届ハ事々相聞ハ、追々御日柄ハ相立ハ得共、猶更火ニ元入念ハ義ヲ勿論、諸事慎方不弛様、追々中渡ハ趣相守可申ハ、○圖二二七九及二三八一を見よ、右ニ通町中へ可申聞ハ、

丑九月○北組惣年寄の副書
日付は廿三日なり、

(御觸帳)

圖五八三 九月廿四日 内藤紀伊守殿御本丸へ被召連、月番加判御勤ハ事○體裁圖三三七に同じ、尙圖五九〇四及六三六五を見よ、

圖五八四 九月廿九日 御代替ニ御禮相濟ハ事○體裁圖一九四六に同じ、

圖五八三 同日 道具錫ニ儀、御用不相成ハ間、勝手次第賣引可致事、

道具錫ニ義(二付)、先達ニ達置○圖八二ハ二ハ儀も有之處、最早御用ニ不相成、間、勝手次第賣引可致旨、寄々其筋ニシモノへ可被相違ハ、(已上)五を見よ、

丑九月廿九日

(御觸書承知印形帳)

圖五八五 十月朔日 城州愛宕郡聖護院村桂女儀、御影并安産抱瘡ニ守弘ハ事○體裁圖三八六五三一至六二〇六を見よ、

圖五八六 十月二日 公事訴訟裁許ハ事○體裁圖三三三九に同じ、尙圖五九七五を見よ、

圖五八七 十月十二日 新穀入津ニ時節ニ付、米賣買方窮屈無之様、融通合專一ニ相心得、

且帳合米ニ儀も不行儀無之、正路ニ賣買可致旨被仰渡、御請證文ハ事、

被仰渡御請證文ハ事

米方年行司共

不正米仲買
の處罰

正路の賣買
は危惧ナ可
きにあらざ

米穀の融通
を計る可し

帳合米の本
意を失ふ勿
れ

米仲買共ニ内、不正ニ商内致、者共、先頃より召捕、及吟味ハ付アセ、濱方ニシ心得違ハ者トモ有之、賣買手狭ニ相成ハアセ、追々新穀入津ニ時節、諸藏入札等に差響、如何ニ事ニハ、右吟味に及ハ者共々、全一己ニ利潤に拘リ、米穀高直窮民難澁ニ時節柄をも不弁、不正ニ取斗致、故ニ儀に付、素々正道ニ商内方に於テモ、聊危踏可申筋無之、殊當年ニ作物も相應ニ趣にも相聞、新穀登高等を銘々渡世柄相弁ハ儀に付、諸藏入札不差滯様、時合等ニ儀も篤ト致弁別、可成丈け土地有米及潤澤、賣買方格別窮屈無之様、融通合等專一ニ相心得、賣買ハ勿論、都一己ニ利潤に耽リハ義無之様、急度相慎可申ハ、且帳合米ニ儀も、享保已來追々申渡、次第、正米掛繫ニ意味無忘失、聊不行儀無之様、正路ニ賣買致、々々、諸國客先氣配も進、追々市場繁榮ニ基に付、正米帳合とも平準ニ相庭相立、正路ニ賣買致、様、精々申合掛引可致、若又此上にも不正ニ取斗致、者有之、召捕嚴重可申附ハ、右之通申渡、條全承知、仲買共一統ハ能ク可申諭候○圖二二八三、圖二一九、及二二六を見よ、

嘉永六丑年十月十二日

(米商舊記)

圖三六一 十月十五日 一統物靜ニシ火難盜難等も無數ニ付、格別ニ自身番相勤ハコト不及

ハ事○圖一九八八に同じ、尙圖二三八〇を見よ、

圖五八七 十月廿七日 古金銀引替所ニ儀、猶又來寅十月迄、是迄ニ通被差置ハ事○圖五九三九及六〇二

御觸書口達 嘉永六癸丑年

二〇七五

七を
見よ、

〔三三二〕十月廿八日 慎徳院様百ヶ日御法事、於專念寺執行之事○體裁圖三二
五五に同じ、

〔補〕一九〇 十月 中山道安中宿外四ヶ宿、奥州道中白澤宿、甲州道中鶴川宿外二ヶ宿困窮ニ

付、人馬賃錢割増之事○圖五七八九及六一八七よ
り推考して、本目錄を存す、

〔五九八〕

〔補〕一九一 十一月五日 公邊御用途一時ニ差湊ひ儀ニ有之の間、御國恩を弁、銘ニ身分ニ

應一、上納金相願ひ様可致事、

〔嘉永六〕嘉永六丑年十一月五日御召被仰渡〕

御諭書

上納金諭書

異國船防禦

御大喪と將
軍宣下の大
禮

去ル子年西丸御普請ニ付あ者、御用途莫大ニ處、速ニ御出來相成、右者諸家御手傳并ニ依頼上納金、其外万石已下ニ面ニ高割上納金も被仰付ひ處、當夏浦賀表に異國船渡來ニ付、御固メト一テ諸大名出張被仰付、右ニ付あ者 公儀御入用も若干ニ儀ニ得共、右ニ面ニ失費も不少、其上防禦武備ニ御世話有之ニ付、右御手傳并ニ高割上納金等ニ分も、都御免被仰出、西丸御普請御入用者、皆御出方ニ相成ひ儀ニあ、殊ニ近年異國船度々江戸近海へ渡來ニ付、防禦御備向ニ儀者、嚴重ニ御手當無之ニあ者難相成、是又如何程ニ御用途ニ至リ可ヤ哉難斗、然處此度ニ御大喪、引續御代替、將軍宣下等ニ御大禮、都御省略難相成、就中右海防筋ニ御入用者、前後見合も無之程ニ儀ニあ、不容易大御用途一時ニ御差湊ひ儀者、是又前後見合も有之間敷、

上納金は國
恩を報ずる
所以

御城代始自分共一同深恐入痛心致ひ、大坂表ニ儀者諸國ニ無双豪富ニ者共群居致ひ、是又度々御用金等相勤、當時年割御下戻中との乍中、此時節柄も徒ニ見聞致居ひ儀者、不相成場合ニ付、猶又此度御用金等ニ御沙汰可有之趣ニ得共、前件ニ通不容易御用途御差湊ひ折柄、誠ニ不得止事次第有之ひ、於然者改め被仰出無之内、其方共心得を以、御國恩ニ冥加を弁へ、銘ニ身分相應上納金相願、今般ニ御用途御差加へにも相成、御治世太平ニ御恩澤ニ浴一、安逸ニ渡世相營ひ冥加を弁へ者勿論、殊ニ當所町人共抽寄特ニ取斗於有之者、諸國一体ニ手本にも相成、公邊御用途御操合一端にも相成、其方共身分を以、御手傳相勤ひも同様ニ儀、一廉ニ御奉公甲斐相立、如何斗規模ニ筋ニ可有之ひ、然を方一心得違猶豫いさ一、上より被仰付ひ様ニあ者、折角ニ誠意規模を失ひひ而已ならん、如何にも御恩澤御時節柄も不弁ひ様ニあ、平生有福ニ相暮ひ富豪ニ名を被唱、詮も無之、實以残念なる次第ニ付、御城代にも厚御思慮ニ上、被中合ひ次第も有之、自分共ニ再應熟考を加へ、右等ニ趣ヲ諭ひ條、能ニ會得いさ一、篤と勘弁ニ上、夫ニ身分ニ應、出格ニ上ニ上納金相願ひ様致へ一、

一改め申聞ひ迄も無之ニ得共、御城代者當地ニ御管領職、町奉行も町方其外支配ニあ、上ニ御爲者勿論、下ニ爲筋をも厚勘弁ニ上取扱ひ御役筋ニあ、土地ニ者共撫育引立方等ニ儀ニ付あ者、兼ニ厚存含專ニ中談居ひ儀も有之、旁此度ニ義も、上より御用金等被仰付ひ様ニあ者後手ニ相成、別あ此度ニ儀者、是迄ニ振合とも違、一際御國恩冥加を相弁へ廉不相立ひあ者、難相成場合ニ可有之、旁其方共心得を以上納金願出、一入寄特ニ心底も相貫、公邊御用途御操合にも

相成、其方とも身分規模にも相立、先祖以來御治世御恩澤を蒙り冥加に相叶、銘々家名永續者勿論、行末子孫に後榮にも相成の事ニ付、當座一果に私情杯に拘り、踟躕いふ儀にあり之の間敷に、是等儀御城代にも深御勘考、自分共も厚談判の上、改め御用金等不被仰出以前、前件に趣申論の條、其旨相心得可申の事、

一當時海岸防禦の儀者、素々天下國家被安の御仁恵に大本にあり、彼是厚御配慮被爲在、且万石已下御旗本に面々勝手向不如意に由達御聽、此度拜借金被下金をも被仰出、次第、莫大に御入用、且亦自然海運に便利を失ひにあり者、是又不容易儀に付、海に所々通船路堀、又者陸地運送等儀、夫々に御手當も無之にあり者相成間敷歟、旁大造に譯にあり、幾許に御入用辻に至り可申哉、實に難斗盡義有之、公儀に者末々に者迄往々安堵に相成遣度との御仁恵にあり、斯迄御苦辛被遊の事この條、おろそろお相心得にあり者、實に冥利に背に儀と存の事、

一士農工商各其職有之の事、何事時農の歩役等之苦々、心力を勞ひ得共、商賣者取分軍事に預り儀無之、産業を守、太平に御恩澤に浴し、衣食住者勿論何無不足安穩に渡世罷在、いつの時此御厚恩を報い可申哉、責め御國用を弁へに處當然に儀に可有之、旁如斯御時節、一廉に御奉公不相勤にあり者不叶筋と存の事、

右に通に譯にあり、一体於公儀も非常に御手當向の兼ね被爲在に儀に心得共、前ヶ條に申論の通、彼是不容易御用途一時に御差漚に相成、素々天下萬民被爲對の御政務筋、暫時も難被差置儀にあり、事實不被得止事次第、一同深恐入痛心致の間、實に此度者日本國中上下一体に力を合、

御安心の場合に至り様、武家者武家丈、百姓者百姓丈、町人も町人丈に粉骨を相盡、御國恩を可奉報謝者此御時節に付、右等に趣厚相弁、銘々彼是に私情を相除、御爲筋一圖に相心得、速に請ふにせし、

但、一朝一夕に儀にあり無之の間、銘々篤々勘弁の上、否に義封書を以可申立に、尤今日罷在の内、諭に趣肺腑に銘々、會得いふものも有之、いふ、前後左右に斟酌不及、速に請可致、追々御賞美に節々、其心得可有之儀にあり、

右諭に趣、難相分の儀も有之、いふ、無遠慮可申出、幾度も申論可遣の事（御川金之控）

十一月十一日 東海道岡部宿外三ヶ宿并富士川、甲州道中鶴川困窮に付、人馬賃

錢并川場賃錢共増割に事（圖五七九四及六一九七を見よ）

十一月十二日 米仲買共不限、市中米賣買に携ひ者共、無危踏米賣買可致の事、當丑年に義、夏以來稀成早魃に、場所に寄、豊凶甚不同有之とを乍や、止る處相應に作柄に由相聞に得共、國々廻米手後々、諸家新米も延着等にあり、いよ例年程に米高多賣出も無之、其上米仲買共義、追々新穀入津に時節、諸藏入札不差滞様取斗、可成丈ヶ土地有米及潤澤、賣買方格別窮屈無之様、融通合專に可相心得旨等に義、先月中品に申論（圖二二〇を見よ）の後も、何なく賣買を危踏に遺念不相去、差向市中米融通不宜趣相聞の條、總々何商賣にありも、見込商に買持等に義に可有之とあり、畢竟右に功不功を以、職業に得失をなすに義に付、一通に義に

早魃の當年
作柄に及せ
る影響

米穀の融通
宜しからず
見込商は商
家の常なり

米仲買以下
危懼する所
なく賣買す
可し

い、不正に筋も無之處、右躰賣買危踏取引手狭に相成ひある、〔自然〕諸國に米直段難行合而
已からば、廻米進方にも抱（拘）、諸般差支を生ひ筋に間、米賣買に携ひ者共、右意味合を勿論、
先月中論置ひ趣をも能く致弁別、此上融通合專一に相心得、無危踏米賣買可致旨、猶亦米仲
買共へ厚可申聞ひ、

右に通米方年行司共は申渡ひ間、米仲買共は無限、市中米賣買に携ひ者も、一統此旨を存、無
危踏米賣買可致ひ、

右に通三郷町中不洩様早に可申通ひ〇圖二五九
四見をよ

丑十一月〇次の令と共に、町中家持の
承知判形日付は十二日なり

〔御簡書承知印形帳〕

圖三八四 同日 光雲寺祠堂金貸付支配人し事、

南渡邊町

岩井屋才助借屋

大和屋清八郎

〔同上〕

光雲寺祠堂
金貸付支配
人

光雲寺貸附支配人〇圖一九二六及
二四五五を見よ

圖三八五 十一月十三日 水戸殿直仕入國産物賣捌方し事、

覺

水戸殿直仕入國産物賣捌方し義、此度取締相立、試したは、先右に内粕干鰯・鮭・寒天草・紅花紙
類等、大坂表に爲差登、堂嶋新地三丁目有之ひ水戸殿用場を取扱、其筋に問屋共へ手拂

水戸家直仕
入國産の賣
捌

相成、右代金在來に爲替等組入、品と取斗ひ趣に付、一統其旨を存、已來右用場を拂出ひ荷
物に分、無危踏取引可致ひ、尤其余彼方領民共相廻ひ荷物も、不正に品に付、決り引受申間
敷ひ、

右に通其筋に問屋商人共等へ可申聞置事、

丑十一月〇南組惣年寄の副書
日付は十三日なり

〔同上〕

圖三八六 十一月十九日 莫大に御用途被爲差湊ひ間、奇特に志願有之面、家持借屋

人にも不拘、銘と勝手にも上金可申立、事、

莫大に御用途被爲湊ひ處、浦賀表に異國船渡來、前後御見合も無之御入用、重々不容易御儀に
付、是迄御用金相勤ひ面、其外にも上金と義、於御役所重々厚御諭有之〇圖一九
一を見よひ、實以奉恐
入義に、當地に儀を四方に大洋遠く、異船等と義も遙々噂承りひ而已、安穩に土地柄
に有之、就中外に場所を譯も違ひ義に有之、奉報御國恩の義を今此時にて、此度御呼出被
仰諭ひ者に限りひ譯に無之、尤此頃右御諭と義を及承、上金願出ひも有之に間、奇特に志願
有之面、家持借屋人にも抱儀にも無之、銘と勝手にも可申立義に有之、全躰諸株御解放に
相成ひも、物價と義に下と爲を思召ひ義、又右にも却り物價不引下に付、諸仲間再
興被仰出、それは皆安民御仁惠を出ひ處に有之に間、深難有奉存、仲間にも申合ひ共上金願立、
偏に報國の義を重く様有之度、ケ様と御時節に不申上ひあり、可申上期も無之も存ひ條、於
町々年寄を厚く可被申諭ひ、以上、

上金の諭示

國恩を報ら
るは此時に
在り

上金を欲す
る者は家持
借屋人を論
ぜず申出づ
可し

但、書付出の、西寄會所に可有持參、尤上金當年相納の義を無之の、心得迄相達置の
○圖二四〇八及圖
八二六を見よ、

丑十一月十九日

掛 惣 年 寄印

(同上)

圖五九〇 十一月廿一日 上様將軍宣下御當日々 公方様と奉稱し事、

上様御事、將軍宣下御當日より 公方様と可奉稱の、

右、通從江戸被仰下ゆ條、此旨三郷町中可觸知の也、

丑十一月 〇町中家持の承知判、
形日付は廿一日なり、

信 濃

(同上)

圖五九二 十一月廿五日 米津越中守殿卒去に付、鳴物停止し事、

米津越中守 〇政盛、玉 殿今曉死去に付、今明日中道頓堀其外諸芝居相止、町中物靜に仕ゆ様、三郷町中可相觸の、

因 幡

丑十一月廿五日 〇御觸書判形帳に、南組惣年寄、
の副書日付を同日申中刻とす、信 濃

因 幡

(同上)

圖三六六 同日 順慶町五丁目山田屋儀三郎支配借屋船橋屋徳松倅傳兵衛外壹名、孝心奇

特成者に付、并木津川町上荷船乘善助外卅五名、難船助遣ゆに付、夫と御褒美被下ゆ事、

順慶町五丁目
山田屋儀三郎支配借屋

船橋屋徳松倅

傳 兵 衛

孝子傳兵衛
に錢を賜ふ

右傳兵衛義、兼お實跡成ものこゝ、兩親に意に不背相仕、父徳松義近年病氣に取合、家内多に
あ追々及困窮の義を、傳兵衛心配をせし、仕覺の職業に精ヲ出し、其身を万壹慎宜、父病氣介
抱爲行届、兩親安心のせしゆ様仕向、弟妹等と慈情ヲ竭ゆ段、孝心寄特に付譽置、鳥目三貫文
差遣ス、

山本町紙屋彌兵衛借屋
總屋喜兵衛嫁

孝女きくに
錢を賜ふ

右きく義、麴町塩屋小兵衛娘にめ、文政十亥年書面喜兵衛倅佐兵衛女房に相成、舅姑大切の
せし、食物万端心ヲ付、夫佐兵衛義兼お病身にめ、商賣向難出來に付、家裏并得意先掛合等引
請、同人介抱藥用爲行届罷在、佐兵衛義養生不叶、拾四ヶ年以前相果、葬式相應相營ゆ後も、
極老に舅姑、并實母きの義も極老にめ及老衰、打臥居ゆに付、近辺同借屋に内借受、是又前同
様大切に介抱ゆせし、孝老を竭、娘孫等をも慈愛を加ゆ、大勢に家内を致養育、其身の鹿服を
着相稼、家賃銀等も無滞相渡、身分慎方宜相聞に付譽置、鳥目五貫文差遣ゆ、

本津川町
上荷船乘

善 助 市右衛門 甚

助

虎

吉

直

吉

御觸及口達 嘉永六癸丑年

二〇八三

宇之松	平兵衛	宇兵衛	新兵衛	太吉
久次郎	安兵衛	伊三郎	善口郎	伊右衛門
多吉	仁三郎	彌三郎	長七次郎	兵衛
喜三郎	万藏	德三郎	松三郎	庄三郎
市太郎	庄五郎	儀八清	藏善七	
彦口郎	徳藏	市兵衛	勝次良	源三良
岩右衛門				

難船救助
せざる外
三十五名に
錢を賜ふに

右に者共義、先月廿四日當月廿二日同廿二日、於安治川口、廻船三艘強風なる淺瀬へ被吹付、又と沈船等相成、及難義の節、相詰且の辺に居合、早速右船に漕付、精々相働、危難を助ケル段、兼あや渡と義厚相心得の故に義に付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣、猶此上無油斷心掛の様可致ひ、

丑十一月 〇南組惣年寄の副書
日付は廿五日なり、

(同上)

補遺 八五 十一月廿七日 生錫所持の分を、早に惣會所へ可申出、

道具錫等と義、當九月他所に送ひ義を勿論、地賣等と義も致問敷旨相達、同月勝手次第賣引のせし様達置〇補遺八二 〇此處、道具錫の由を以、御用にも可相成生錫内の賣買致し趣相聞、如

生錫を道具
錫と稱し買
買するを禁
ず

右所持の者
は届出づ可

何事ニハ、和産と生錫先般中御買上相成、今以御用濟相成の義に無之、此上追々御買上相成の事ニ付、生錫所持の分の品々向寄惣會所に可申出、尤右品及見聞の、同様可申出、生錫を道具錫杯と成、紛敷仕方有之の、急度御沙汰可有之間、於町々年寄々篤々可被相達事、

丑十一月廿七日

(同上)

補遺 八三 十二月三日 公方様將軍宣下、其上御任槐と宣旨御頂戴、御作法無殘所被爲濟の事

〇體裁九二
五と大差なし、

補遺 八四 十二月四日 公方様御名 家定公と被遊御改の事、

公方様御名 家定公と被遊御改の旨、先月廿三日被仰出の段、從江戸被仰下の條、此旨三郷町中可觸知者也〇補遺八〇 〇九を見よ、

丑十二月四日

信濃

(御觸書承知印形帳)

補遺 八六 同日 上金と儀、志願無之小前と者共申勸、取集ケ間敷儀致間敷事、

御國恩ヲ弁上金と義、此度御諭と向々心得方と義に付、先達お廻狀ヲ以相達〇補遺八二 〇此處、於町々厚被諭方行届の趣に、然ル處右上金に加り志願無之小前との等を申勸、取集ケ間敷義を無之と申へ共、若右様と義有之の如何の如何の間、猶又爲心得相達置ひ、勿論志願有之向、勝手次第可被申出の事〇補遺三三 〇三三を見よ、

十二月四日

應 惣 年 寄印

御觸及口達 嘉永六癸丑年

二〇八五

將軍家詳

將軍家詳家
定と改名す

小前の者を
勤誘し上金
を出願せし
むる勿れ

(同上)

將軍代替御
祝儀能興行

圖五九四 十二月六日 將軍宣下相濟ひ爲御祝儀、公家衆御馳走御能被仰付事、將軍宣下相濟ひ爲御祝儀、去廿五日公家衆御馳走御能被仰付、最早鳴をの有之ひる不苦趣、此以後鳴物御免に觸者有之間敷、右に通從江戸被仰下、條、此旨三郷町中可觸知との也、

丑十二月六日

信濃 因幡

(御觸帳)

圖五九五 十二月十二日 將軍宣下諸御禮無殘所被爲濟事○體表圖八九五に同じ、

圖三三七 同日 大佛殿修理銀貸付所代り事、

妙法院御門跡家來

横山 伊織

大佛殿修理
銀貸付所の
變更

右伊織義、堂嶋中壹丁目豊嶋屋庄兵衛支配借屋大津屋安兵衛方止宿、大佛殿御修理銀貸附取扱居ひ處、此度同借屋富田屋彌三郎方を貸附用所に相成、伊織義前同様貸附方取扱ひに付、町中序觸に義○圖三三二・三四三九・及二四四一を見よ、

○前合と共に、町中家持の承知判形日付は十二月十二日なり、

(御觸書承知印形帳)

圖五九六・五九九七 ○圖九及一〇に同じ、

圖三三八 十二月十六日 門松注連繩等を忍こころ取り取、或の押あ貫掛ひ儀仕間敷事○圖二九九

に同

補達 八三七 同日 ろくと穴打道中双六辻寶引に類禁可事○圖三〇

圖三八九 十二月十九日 上金に儀、小前に者共を中勸ひ儀致間敷事、

口達

小前の者に
上金を追る
勿れ

此度不容易御用途被差湊ひ付、當表身元宜相聞ひ町人共は、上金に義中諭ひ趣及傳承、外町人共中合、亦銘、壹人立、右御用途に御差加に志願を以、上金に義追、願出ひ者一統寄特に事、然ル處右口、内こそ、其所に年寄共等心取違、身元と厚薄不抱、小前に者共にも一般に中勸、金銀爲差出、上金に内に差加に分も有之哉に粗相聞ひ、左ひあの一鉢中諭と趣意にも相振、如何に至付、右様に類決あ差加中間敷ひ條、是等處町に年寄共得と弁別致し、取斗可中ひ、

一前書に次第二付、町に小前に者共其旨を存、上金に加りひに不及ひ、

右に趣三郷町中不洩様早に可中通ひ事○圖八二

丑十二月 ○南組惣年寄の副書日付は十九日なり、

(御觸書承知印形帳)

圖三九〇 十二月廿二日 西高津新地九丁目若狭屋幸次郎外二名、盜賊差押ひに付、大寶寺

町年寄八幡屋伊兵衛外壹名、役儀出精相勤又の忠勤を竭ひに付、并安治川南四丁目上荷船乗友七外九名、難船助遣ひに付、夫に御褒美被下ひ事、

西高津新地九丁目 若狭屋 幸次郎 越中屋 嘉兵衛 近江屋 兵助

御觸及口達 嘉永六癸丑年

盜賊を逮捕せる若狭屋幸次郎外二名に錢を賜ふ

役儀出精の年寄八幡屋伊兵衛に銀を賜ふ

鹽屋宗七の忠勤を賞し錢を賜ふ

其方共儀、盜賊を差押、所^(奇)をのち合、召連訴出^(奇)の段、兼^(奇)お觸渡^(奇)と趣相守、寄特^(奇)と義^(奇)を付、爲

十二月五日

大寶寺町年寄

八幡屋伊兵衛

右^(奇)者義、年寄役勤方宜、町入用減方心を用ひ、公事出入可及義を、成丈不事立様取斗、其外

寄特^(奇)と取斗い、一^(奇)の段相聞^(奇)を付譽置、銀壹枚差遣^(奇)、彌此上可相勵^(奇)、

京橋貳丁目

塩屋方次郎別家手代
同町右方次郎借屋

塩屋宗七

右^(奇)者義、菊屋町河内屋伊兵衛忤^(奇)を、一幼名宗吉と^(奇)、五十五ヶ年以前寛政十一未年、書面万次郎四代以前彌兵衛時代奉公^(奇)に在付、實跡相勤^(奇)の付、三代已前彌十郎時代、別家爲致^(奇)の趣再度申聞、へ共、店方無人^(奇)に折柄^(奇)に^(奇)の連及辞退^(奇)の内、三十六ヶ年以前文政元寅年、商賣元手銀と^(奇)て三貫五百目貫請、父^(奇)右伊兵衛支配借屋^(奇)に爲致別家費、瀬戸物商^(奇)に相始、其後^(奇)に^(奇)に主家へ通勤罷在^(奇)の處、廿五ヶ年以前文政十二丑年、右彌十郎致病死、付、死跡先代万次郎改名彌兵衛儀、幼年^(奇)に^(奇)に家事向^(奇)に万端引請^(奇)の處、自宅^(奇)を掛隔^(奇)有^(奇)之、主用難行届^(奇)の付、書面^(奇)に^(奇)に丁内へ致變宅、養子貫請、渡世向爲^(奇)に相任置、主家へ無怠通勤罷在^(奇)の處、十七ヶ年以前天保八酉年、右彌兵衛義致病死、

其後居宅并掛屋敷共及類焼、其砌當主万次郎儀當才^(奇)を、一旦身上向^(奇)にも抱^(奇)の付、此者深く致心配、家事向等都^(奇)に取締爲^(奇)に行届^(奇)の付、居宅懸屋敷共普請出來立、當時^(奇)に^(奇)に掛屋敷等買求^(奇)の場合至^(奇)の段、全此者取締宜、幼主を大切^(奇)に守立、平常身分相慎、僮服を着^(奇)、物見遊藝等^(奇)を不罷越、五十年余主家四代忠勤を竭^(奇)の段、寄特^(奇)に由相聞^(奇)の付譽置、鳥目拾貫文差遣、此後も彌主家を大事^(奇)に可致^(奇)の、

安治川南四丁目
上荷舟乘

- 友 七 宇 兵 衛 長 次 良 太 三 郎 孫 三 郎
- 次 三 郎 松 兵 衛 源 七 善 七 市 藏

其方共義、當月九日於安次川口、^(奇)先^(奇)和泉屋吉兵衛所持^(奇)に廻船壹艘、強風^(奇)に^(奇)に淺瀬^(奇)に被吹^(奇)付、及難儀^(奇)の節、相詰罷在、早速右船へ漕^(奇)付、精^(奇)に^(奇)に相勵、危難を助^(奇)ケ遣^(奇)の段、兼^(奇)お^(奇)に渡^(奇)の難船助^(奇)ケ方^(奇)に義、厚相心得^(奇)の故^(奇)に義^(奇)を付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣^(奇)、猶此上無油斷心掛、様可致^(奇)の、

丑十二月廿二日 ○南組惣年寄の副書
日付は廿五日なり

(同上)

圖五九六 十二月廿九日 紀州日前國懸兩社大破^(奇)を付、修復爲助成、五ヶ國并御府内勸化御

免^(奇)の事

圖三九一 同日 市中取締宜、火事沙汰も無^(奇)之、一段^(奇)に事^(奇)に^(奇)に、猶此上無油斷世話行届^(奇)の
様可致^(奇)の事 ○圖二三一
四に同じ

御觸及口達 嘉永六癸丑年

難船を救助せる友七外九名に錢を賜ふ

安政元甲寅年

觸五九九 正月 東海道小田原宿外八ヶ宿・中山道守山宿・奥州道中喜連川宿・甲州道中白野宿

外二ヶ宿困窮ニ付、人馬賃錢割増ニ事觸五七九九及六二〇四を見よ、

觸六〇〇 正月八日 南鐔壹朱銀吹立ニ事觸六〇〇四を見よ、

觸六〇〇一六〇〇二 觸一及二に同じ、

補達 八三 正月十一日 手嶋流心學道話ニ儀、隨分ひろまり様、町内方世話可致ニ事

觸七五二に同じ、

補達 八二元 觸八〇五に同じかるべし、

達三九二 正月廿九日 攝州曾根崎村和泉屋佐助下人太吉外男女二名、盜賊差押ニ付、夫

々御褒美被下ニ事、

攝劔曾根崎村

和泉屋佐助下人

太 吉

常 吉

盜賊を逮捕せる下人太吉外壹名に錢を賜ふ

其方共主人ヲ付請、店方預ル居ル内、品被盜取ル次第、主人へ對テ無テ譯儀々、幼年ニ身分ニあ心配いゝス余り、右女ニ面躰相覺居ルを幸ニ、右ニ見當り、品可取戻テテ合、最寄ニ神

社に祈願を込、日々參詣いゝ居ル内、主人用向ニ近邊へ連立參ル途中、最前盜相働クのみを見當り、不取敢引留、盜ニ始末相尋ル亦とも、口堅テ張、逃去掛ル躰ニ付、取逃ル亦殘念ニ存、力限り猶も引留居ル内、廻り方役人其場を通り合、召捕ル仕儀ニ至ル段、幼年ニものを健氣成いゝ方、寄特ニ儀ニ付、爲褒美鳥目貳貫文差遣ス、
十二月廿九日

尼崎町貳丁目

鴻池屋百助下女

と

盜賊を逮捕せる下婢さふとに錢を賜ふ

其方儀、盜心懸ルものを捕押ル段、女ニ身分ニあを健氣ニ儀ニ付譽置、爲褒美鳥目五貫文差遣

觸三 ○南組惣年寄の副書日付は正月廿九日なり、

(御觸書判形帳)

觸六〇〇三 觸三に同じ、

觸六〇〇四 二月六日 南鐔壹朱銀通用ニ事、并切賃ニ事觸六〇〇〇を見よ、

觸六〇〇五 二月十一日 東海道伏見宿外三ヶ宿困窮ニ付、人馬賃錢割増ニ事觸五八〇二及六二〇九を見よ、

觸六〇〇六 二月十四日 道中通日雇請負仲間再興ニ事、

去ル寅年株札并問屋仲間組合ヲ唱テ義停止相成ル節、道中通日雇請負仲間も差止テ渡置觸四九一を見、然ル處今般問屋組合等再興被仰出ルニ付、道中通日雇受負仲間ニ義も同様ニ付、諸事前

道中通日雇請負人の再興

御觸及口達 安政元甲寅年

二〇九一

人員の制限
を解く

こゝ通嚴重可相心得、尤夫々名前帳差遣^(出)置^(共)、株式を^(筋)無之^(間)、人數に増減勝手次第に相心得、雇先^(姓)名并人數出立歸着又ハ渡世替等^(義)、其度毎届出、彌以通日雇^(共)の共不法重頭等無之様堅可^(付)、若相背^(ハ)ハ急度可及沙汰段、右請負人共へ^(渡)、間、一同其旨可存^(ハ)、

右通三郷町中可觸知^(モ)の地、

寅二月^(本令端書に二月十四日御觸とあり)

信濃
因幡

(御觸書判形帳)

三三三 同日 四天王寺并山村與助兩支配外^(者)、井戸普請致問敷事、

口達

四天王寺並
山村與助支
配外にて井
戸堀業を營
むを禁ず

三郷家作手傳井戸堀兼職^(モ)の共、往古々四天王寺配下^(ニ)、御用役^(廉)に付^(ル)、山村与助支配^(ハ)ハ處、右兩支配外^(ニ)、於市中井戸堀普請手掛^(ハ)ハものも有^(之)、御用役差^(節)致混雜^(ハ)由相聞^(ハ)間、右支配外^(モ)の井戸普請同職^(義)致問敷^(ハ)、

右通三郷町中不洩様可^(通)ハ事^(一六九一及二四三〇を見よ)

寅二月^(御觸帳に年寄の副書日付を十四日とす)

(同上)

三三七 三月八日 三州岡崎六所大明神社頭其外大破^(ニ)付、修復爲助成、七ヶ國并御府内

勸化御免^(事)

三三九 同日 京都正東山若王子祈禱札相對配札^(事)、

京都正^(東)本山若王子配下年行司

御池通三丁目

寶積寺

京都若王子
祈禱札の配
札

右若王子者御代々様御由緒有^(之)、永代御祈禱被^(仰)付、大峯葛城^(兩)支嶺參籠修行政、御撫物并御札を勿論、年々御星祭御札^(モ)も献上^(ハ)ハ、右星像^(儀)ハ毎歲彫刻^(ハ)ハ、道場へ安置^(ハ)ハ來處、右道場并諸堂社及大破^(付)、修復爲助成、當寅年正月來^(申)年十二月迄七ヶ年^(間)、祈禱^(ハ)ハ札壹ヶ年貳度宛、大坂三郷町中寺社^(モ)、右寶積寺^(以)配札^(ハ)ハ、間、御免勸化^(ト)ハ違^(ハ)ハ、右配札^(モ)相對次第^(事)、間、右^(趣)無急度三郷町中^(ハ)達可置^(ハ)ハ^(二四一〇を見よ)

寅三月^(八日)

(御觸書判形帳)

三三五 三月廿九日 安治川南四丁目万次郎外廿四名、難船助遣^(ハ)付、夫々御褒美被^(下)

此事

安治川南四丁目
上荷舟乘

同所北三丁目
上荷舟乘

同所上貳丁目
上荷舟乘

同所北三丁目
上荷舟乘

万次郎

市次郎

外七人

外四人

右^(者)共義、當正月廿五日同廿六日當月四日、於安治川口、廻舟四艘強風^(ニ)ハ淺瀬^(ハ)被吹^(付)、爲手當万次郎徳三郎外十三人へ五百文宛、市次郎外壹人藤吉外七人へ再度相働^(キ)ハ付、壹貫文宛差遣^(ス)、

三月廿九日

(幕令)

御觸及口達 安政元甲寅年

二〇九三

難船を救助
せる萬次郎
外廿四名に
錢を賜ふ

三九 四月八日 京都大火ニ付、米穀材木板類、其外諸色直段高直ニ致問敷事、

口 達

京都大火に
乗じ諸色直
段を騰貴せ
ずしむるを禁

去ル六日京都大火ニ儀ニ付、右ニ付於當表米穀始メ材木板類、其外都多諸色直段猥ニ高直ニ不相成様、銘ニ可相慎ハ、若徳用ニ迷ヒ、非分ニ賣方イムル者有之趣相聞ハ、急度可令沙汰ハ、

右ニ通三郷町中不洩様可申事○圖二四二

寅四月(八日)
(御觸書)

(御觸書判形帳)

三九 四月 天滿天神末社正遷宮ニ付、寄進ニ品持參ル者共心得方ニ事、

口 達

天滿天神末
社に寄進す
るに當り花
美に裝ふ可
からず

諸社正遷宮寄進物ニ義ニ付、寛政六寅年以後追々相觸ル趣も有之ハ處、此節天滿天神末社正遷宮ニ付、寄進ニ品花美ニ取傍、又右ニ事寄、風躰を替、市中横行踊歩行ハ族も有之哉ニ相聞、取締ニも拘リ、且ハ京都大火御所向炎上ニ折柄可憚處、無弁別所業ニ付、右躰ニ義無之様、町役人共ハ借屋住末ニ迄篤ク可申事○圖二六〇及圖二八五九を見よ

寅四月○前令と共に、町中家持の承知判形あれども日付を闕く

(同上)

三九 四月十日 火ニ元入念可申事、

口 達

火ニ元ニ儀ニ付ルモ、兼ニ觸達置ル趣も有之、銘ニ可入念義勿論ニハ得共、此度京都大火ニ付、

火の用心

彼地方當表へ入込ハ之の多有之哉、自然混雜ニ紛、龜略ニ儀無之様、別ル火ニ元入念、諸事心を付可申、

右ニ趣三郷町中末ニ迄不洩様可申事○圖三八三

四月○北組惣年寄の副書日付は十日なり

(御觸帳)

六〇八○圖三三

一三 四月 東海道四日市宿因窮ニ付、人馬賃錢并渡船賃錢共割増ニ事○書附留にヨリ補入す、尙圖五八〇

八及六二一
一を見よ

三九 五月朔日 石谷因幡守殿參府ニ事、

石谷因幡守儀被爲召、四五日ニ支度ニ參府ニ事、

五月朔日○南組惣年寄の副書日付は同日未中刻なり

(御觸書判形帳)

補達 八三〇 同日 佐々木信濃守様御月番被成御勤ハ事、

信濃守様、今朝日ハ御月番被成御勤、間、此段承知可有之、以上、

五月朔日未中刻

(同上)

三〇 五月十三日 天滿東寺町專念寺相對勸化ニ事、

今日通達町ニ年寄被召呼、安井九兵衛様方左ニ通被仰渡、

口 達

天滿東寺町淨土宗專念寺、當七月慎徳院様御一周忌、來卯七月三回御忌ニ處、御佛殿并土塀破

天滿專念寺
相對勸化

御觸及口達 安政元甲寅年

損ニ付修復、其外地低コシ建物落込カ場所致地上、且内陣向莊嚴佛具全備不致カ分、皆具相備
ハコ付、爲助成三郷町ニ并町續在方相對勸化相願、尤文化七午年翌未年御法事ニ砌、兩度分勸
化一度ニ相願ハコ付、日數九十日ニ間差免、間、其段町ニハ可ヲ通ハ一ニ見ヨ、
寅五月○當番南船屋町の通
連日付は十三日なり、

寅五月○當番南船屋町の通
連日付は十三日なり、

(同上)

圖六〇九 五月十七日 御役者金春八左衛門儀、來卯四月中於此地勸進能興行ニ事○體裁圖二
一三九に同
ジ、尙圖八
四九を見よ、

圖六〇一〇 五月十八日 禁裏御造營ニ付、諸材木御買上相願度者ハ可ヲ出ニ事、
禁裏御造營ニ付、諸材御遣方多分ニ義ニ付、攝河・泉・播・内運送^(便)弁利ノ國ニシテ、御料・私領・寺社
境内百姓持山諸材立木ニ分、御買上望人モ有之ハナシ、寸間木位代永共帳面ニ相記シ、尤諸材
共貳間以下書出ニ不及、長サニ儀ノ間ニ認可ヲ出、且當表材木屋共所持檜材ニ儀モ、最前取
調ヲ付ハ得共、其餘諸材御買上相願ハモ有之ハナシ、前書ニ趣相心得、急速大坂月番ニ奉行
所ハ可ヲ出ハ、
右ニ通三郷町中可觸知モの也、

禁裏造營
諸材木買上
望の者は届
出づ可し

寅五月○本令繪書に五月
十八日御觸とあり、

(御觸書判形帳)

圖六〇二 五月廿八日 在方質屋古手屋古道具屋ニ儀、當表夫ニ仲間ハ可致加入事、
去ル寅年中株札并問屋組合等停止被仰付ハ處、其以來商法取締相崩、諸品下直ニモ不相成、却
メ不融通ニ由相聞ハコ付、此度諸問屋組合とも前ニ通再興被仰付、間、是迄ニ商法ニ不流、

在方質屋古
手屋古道具
屋三商ハ當
表三商仲間
ニ加入す可
し

諸商人共物價引下方ニ儀、精ニ厚心掛、實直ニ渡世相營可ヲ旨等ニ儀、去ル亥年三月町ニハ
渡、猶又右問屋組合等再興相成ハ分シ、都メ素人直賣買不相成、間、前ニ如ク可相心得旨等
も、追メ從江戸表御觸達有之ハ、然ル處右鉢問屋仲間組合等再興相成ハ口ニ内、質屋并古手
屋古道具屋、右三商ニ儀、前ニハ攝河兩國在ニ分シ大坂へ附屬イとし、一手ニ仲間組合相立
來ハ廉ニ付アリ、町在共追メ右仲間ハ加入ハシハ之ニ有之由ハ得共、在方を別メシ儀、
今以心得違仲間ハも不加、自儘ニ三商致渡世ハ之ニ不少哉ニ相聞、不埒ニ至ニハ、右鉢御觸
達も有之上ニ、仲間ハ加リ商賣可致モ勿論、右三商ハ之ニ共取締方ニ儀、前ニ觸渡ニ趣も無違
失相守可ヲハ、若又此上ニも夫ニ仲間ハ不加、商賣イムハ之ニ有之ハナシ、早速召捕上、
嚴重可ヲ付ハ條、所ニモ之ニ共モ其旨可存ハ、
右ニ趣三郷町中ハ可觸知モの也○圖五八九四及
六〇七九を見よ、

寅五月○次の令と共に、端書に
五月廿八日御觸とあり、

信濃
因幡

(同上)

圖六〇一 同日 靈源寺祠堂金銀貸付上訴訟人ニ事、

惣持寺領

攝島嶋下郡惣持寺村

京屋善太郎

(同上)

靈源寺御祠堂金銀貸付上訴訟人

靈源寺祠堂
金銀貸付上
訴訟人

御觸及口達 安政元甲寅年

二〇九七

石谷穆清轉任
町奉行川村
修就

圖六〇二 五月廿九日 石谷因幡守殿御普請奉行被仰付、跡御役川村對馬守殿被仰付事、石谷因幡守事、御普請奉行被仰付、跡御役川村對馬守^{○修}被仰付、此旨三郷町中可觸知也。
○圖五九二一及六〇四七を見よ、

寅五月廿九日 ○南組惣年寄の副書日付は同日午下刻なり、

信濃

(同上)

圖六〇三 五月 鈴木町年寄大坂屋貞次郎外壹名、役儀出精相勤ひに付、夫、御褒美被下事、

鈴木町年寄

大坂屋貞次郎

天滿鈴鹿町年寄

綿屋甚右衛門

役儀出精の
年寄大坂屋
貞次郎外壹
名に銀を賜
ふ

右にその共儀、年寄役勤方宜、町入用藏方精々心を用、公事出入可及儀有之の節、可成丈不事立様取斗、諸事取締方行届、其外寄特成心掛有之由相聞、一段に事に付譽置、銀壹枚宛差遣ひ、

寅五月

(同上)

圖六〇三 ○圖五九二一及六〇四七を見よ、

圖六〇四 六月朔日 地車太鼓・祓り等の等飾又き藝者に衣裝、自今木綿晒を可相用事、并

右届出に上及見分事 ○圖二〇三に同じ、

圖六〇四 六月六日 東海道品川宿外六ヶ宿困窮に付、人馬賃錢割増に事 ○圖五八一〇及六二二四を見よ、

圖六〇五 同日 甲州道中玉川渡船并同道中淺川川越賃錢共割増に事 ○圖五六二五を見よ、

補遺 八三 六月十六日 一昨夜に地震に、住居も難成程致破損の家屋、并命に拘ひ程に致

怪我の者、都る可届出、且右に付浮説等を出問敷事、

地震
大破の家屋
及重傷者あ
らば届出づ
可し
浮説を唱ふ
る勿れ

一昨夜地震有之の處、破損に人家又を納屋等も無之哉、尤怪我人等も有之の趣に届も無之の、右聊に義斷の不及の得共、相損住居も難成處、并怪我いふ命に抱ひ様ともの、都る御番所并惣會所に可相斷ひ、一昨夜に後追に地震薄く相成、世上安心に躰相聞ひ、右に付銘に彌火に元又を盜賊等に用心無怠様いふ、且浮説を出し、惑ひに相成、無譯恐怖等いふの儀無之様可被申聞、以上、

寅六月十六日申下刻

(御觸書判形帳)

圖六〇六 六月廿八日 紀州熊野三山貸付金に事、

紀劬熊野三山貸附金に儀、天保七申年十二月相觸置 ○圖五二〇(兵部)九を見よ、の處、攝劬兵庫津におるく貸附に

義、先差止に相成のに付、同所東出町渡海屋治衛支配借屋貸附所引拂、貸附先返納方に儀、當

表江戸堀四丁目貸附所にお取扱ひに付、此旨可存ひ、

右に通三郷町中可觸知の也、

寅六月 ○南組惣年寄の副書日付は廿八日なり、

對馬

信濃

(同上)

御觸及口達 安政元甲寅年

二〇九九

紀州熊野三
山貸付金
兵庫貸付所
の廢止

達二四〇三 ○關二八六下
同じかるべし

達二四〇五 七月二日 新天満町大津屋伊兵衛代判別家手代瀬戸物町大津屋平兵衛外三名、忠勤を竭又ハ盗賊差押ハニ付、夫々御褒美被下事、

新天満町
大津屋伊兵衛代判別家手代
瀬戸物町

大津屋平兵衛

大津屋平兵衛の忠勤を賞し錢を賜ふ

右平兵衛義、四拾六ヶ年已前先代伊兵衛時代、奉公ニ罷越、實体相勤、三拾五年以前別家爲致貫、商賣元手銀ハ不貫請、節季毎ニ給料貫請、日勤肩入罷在ハ處、先代伊兵衛義廿四ヶ年已前病氣ニ取合、藥用介抱爲行届ハ得共、養生不叶致病死、同人女房ハ女名前、代判別家手代大津屋武兵衛相勤居ハ處、同人無間も致病死、跡代判此モの相勤、廿壹ヶ年以前、南堀江三丁目木本屋源右衛門粹伊太郎トシ者養子貫請、伊兵衛ト改名致相續、引續此モの代判イムハ處、翌末年養母ハ致病死、其節連も藥用爲行届、其後ハ猶更幼主を大切ニ守立、拾七ヶ年以前伊兵衛義拾五歳ニ相成、直判可致ハ處、病身ニ付其儘此モの致代判、家業向万更引受、召仕ハシ等へも心添イム、店方取引先氣請宜、主家取締方行届、身上向以前ニ不相替、物見遊參等ニ罷出、平常僊服を着、身分相慎、無怠主家相續方大切ニ心掛、年來忠勤を竭、寄特ハ由相聞ハニ付譽置、鳥目五貫文差遣、此後も主家を大事ニ可致ハ、

天満金屋町
天王寺屋平右衛門借屋

山城屋寅三郎

同人下人

大 吉

和

(奇) 吉

盜賊を逮捕せる山城屋寅三郎外二名に錢を賜ふ

其方共儀、盜賊を差押、所々の中合、召連訴出、段、兼ハ觸渡ハ趣相守、寄特ハ義ニ付、爲褒美鳥目貳貫文宛差遣ハ、

(御觸書判形帳)

○次の令と共に、南組惣年寄の御書日付は七月二日なり、

達二四〇六 同日 靈源寺祠堂銀貸附支配人ニ事、

靈源寺祠堂銀貸付支配人

靈源寺貸付支配人 ○關二三五九及
二四六一を見よ、

玉造半入町
備前屋善兵衛借屋

多田屋福三郎

代判 利平次

(同上)

達二四〇七 七月六日 二本松町又兵衛支配借屋民助同居娘を、孝心奇特成者ニ付、御褒美

被下事、

堂嶋新地中貳丁目茂三郎代判
喜作借屋ニ元住居イム、
當時二本松町又兵衛支配借屋
民助同居娘

を

孝女とらに銀を賜ふ

右をら儀、父民助、母を、幼年ニ妹兩人、都合五人相暮、堂嶋新地中貳丁目ニ借宅致住居ハ内、

御觸及口達 安政元甲寅年

二一〇一

父民助を經師職渡世致し、者こひ得共、近年痲症にお世事と營もいふ一兼、母とりの盲目この處、兼幼年の節より兩親の意に不背、家事賄煮焚萬端引請相營、手習稽古等罷越居の砌も、日々と食用煮焚致し、刻限を必立歸取賄、兩親へ孝養を竭、其上をく盲目相成の後、兩人の妹を出産いふ節、心配いふし、別季に妹出産およひ頃、最早とら拾三歳に相成居の付、不一形心を用、産婦に介抱万端厚取斗、兩人に妹追、成長いふに付あさ、愛憐を加へ世話いふ、其余衣類洗濯等迄爲行届、右躰父民助痲症にお前後不揃と義も有之、母をくも盲目而已からば、余病にお足痠相成の付深心配致し、兩親と藥用介抱を勿論、時に寄兩便と世話等迄も重々爲行届、殊に民助儀生得酒を好、病發後と別あし儀、晝夜酒給度趣申出、其余日用の儀も右に准、不都合と振舞も有之、其上をく前段と通身體自由不相成の屈シ、兩人共折々無譯事共申罵の得共聊不逆、父の酒買調、程能相勸、母を申歴、氣鬱不致様仕向、家業の義も相應と職人を相雇、渡世取續罷在、内、民助追と快方職業にも取懸り様相成、折柄、又の痲症再發致し、家内と目間を考、自身と刃物を以咽喉を搔切の儀有之節も、早速取留、其筋をのへ申告、奉行所に訴出貫、檢使の上、疵養生申付請の付あさ、猶又醫療無手扱介抱いふ、且右療治代諸雜費等、をら身分に取あさ一時に難賄金高、素方貧窮にお行届兼を、危急の場合不失、身賣奉公いふに成共相償の由申、所をのへ相歎、取替貫のあ手厚に醫療を盡、疵平癒爲致、其後右取替受の雜費償の内入をして、身貧に中々錢調達いふ、家主方へ持行の程に誠實を盡、其身を行狀相慎、物見遊藝等にも罷越、父母に看病不怠、妹共をも憐

と、近頃民助痲症甚敷、及深更無謂表口戶外に駈出、何角高聲に申罵杯いふに儀間と有之、度毎をらも付添出取看家内へ連歸、晝夜精々介抱いふ、痲症に父盲目と母に孝行を竭、段、心妙寄特成をのこ付、其段江戸表へ申上の處、此度依御下知爲御褒美銀七枚被下之、右に趣三郷町中不孝不實をの共教戒にも可相成、間、一同へ申聞可置の事、

七月○南組惣年寄の副書日付は六日なり、

(同上)

補遺 八三 ○圖七九五に同じかるべし、

圖六〇七 七月十七日 愼徳院様一周御忌御法事に○禮哉圖三三九〇に同じ、

圖三〇八 七月十九日 御用途へ御差加し志願を以上金願出の段、願に通被成御聞届の事、

寅七月十九日、西御役所へ年寄共御召出の上、左に通御賞譽被爲仰渡の御書取と寫、

近來莫大に御用途被差湊、別海防に御入用と前後御見合も無之事と由、奉恐入の儀に在之、右に付銘に御治世御恩澤に浴し、安逸に渡世相營の冥加を弁ひ、此御時節柄に徒に及見聞居の義に無之筈に付、當表身元宜敷相聞の町人共者勿論、右差續の者等身分相應上金願出の儀、御縁合に一端にも相成、町人共あつても規模相立、上下体裁相整の儀に付、去冬以來右に者共呼出、追々事實申諭の趣及傳承、何をも御國恩に難有儀と同様ニ付、右御用途に御差加に志願を以、其方共始夫、丁内家持借家人共と内、或は會所屋敷家守丁代共等追々申合、又と壹人立、是又身分に應、員數相進上金願出の段、一統寄特に儀に付、被爲御賞譽、右上金願に通被成御聞届の、

家持借屋人の上金出願と其許可

御觸及口達 安政元甲寅年

右に通從江戸表御下知を以て渡り條、此旨承知いさし、一統難有存、夫々丁内限上金願いもの共は不洩様可申聞ひ、尤上金當年分納比合等儀を、猶取調の上追お可及沙汰〇圖二四二一、圖二四二四、及八三四を見よ、
(御觸帳)

補達 八三 七月廿八日 川村對馬守様、來月御月番被成御勤ひ事、對馬守様、來月御月番御勤被成、間、此段承知可有之ひ、已上、

寅七月廿八日

北組惣年寄

(御觸帳)

補達 八三 閏七月朔日 町内申合願出上金、此度御聞届被仰渡ひに付あま、町別取集置ひあ不苦の間、納頃合不滞様可致事、

今日通達年番町々年寄西寄合所に被招呼、惣御年寄中左に通、

通達年番年寄に相達ひ覺

去秋以來年寄が被申立ひ、町内申合願立上金、此度御聞届被仰渡〇圖二四〇八を見よ、ひ上ま、町別取集置ひあ不苦の、追お御沙汰有之、頃合、納方不滞様可被相心得、尤金こあ申立ひ分こあ後、壹兩代六拾五匁を以相納ひ義こ有之、右上金申立有之の町々、爲心得組合限可有通達ひ事、

壬七月朔日

(幕令)

圖六〇八 閏七月十四日 川筋掟事〇圖六一に同じ、

上金は町別に取集置くも差支無し
金目にて届出の分は銀目に換算せしむ

圖六〇九 閏七月十五日 線姫君様御平産、御女子御出生事〇圖四七六〇に同じ、

圖六〇〇 同日 天保度と五兩判金、當寅十月を限通用停止被仰出の間、所持と者へ早々

差出、引替可申事〇圖五二五六及六〇二七を見よ、

圖六〇一 〇圖六六に同じ、

補達 八三 閏七月十八日 火事沙汰遠かりひへ共、猶無油斷火と用心可被申含ひ事、

火事沙汰遠きかまひに付あま、猶又無油斷様用水汲溜火消道具修復等心掛、夜番人無怠様申付、火用心厚可被申含ひ事〇圖二三九八及圖八三七を見よ、

閏七月十八日

南組惣年寄

(御觸帳判形帳)

圖二〇九 閏七月廿七日 白米小賣直段と儀、米相場に應じ、正路と直段に相改賣出可申ひ

事、

口達

此節堂嶋米相場、追々引下ケ方に相移り趣に心得共、町々搗米屋共と内こり、元附と割合を申立、小賣直段引下ケ方に及遅くひものも不少哉と粗相聞ひ、元來搗米屋共小賣直段と儀を、米相場高下と釣合、不相當と義無之様賣出可申を勿論と義こあ、既米相場相進ひ時を、元附と不拘速と直上致し、下落と節を差向容易と直段引下ケ不申段、如何と仕方こひ、總お小賣直段高直こあり、身薄とをの共難儀いふひ筋に付、能く相弁、早々正路と直段に相改賣出可申ひ、

御觸及口達 安政元甲寅年

二一〇五

火の用心

白米小賣直段は堂嶋米相場に準據す可し

尤夫、所、もの共も厚く心を付可致世話、自然此上にも心得違、搗米屋共、内不正路に取斗致、ゆゑの有之様子相聞、急度可及沙汰、兼、其旨可存、右、趣三郷町中搗米屋共、別、其外一統不洩様早、可、通、宣、○圖二三三

寅閏七月○本令端書に閏七月廿七日御觸とあり

(同上)

○圖二四〇 京都正東山若王子配札人、事、

京都正東山若王子(宮カ)室家來

此度相廻り、今、井、衛、門

右若王子配下年行司

御池通三丁目

寶、積、寺

右兩人、内配札い、事○圖二三九

○前令と共に、町中家持借屋人の承知判形あれども月日を開く、

(同上)

○圖六〇三 八月六日、長崎廻寒天并世上食用、角寒天、尼崎又右衛門へ一手取締復古、渡、

事、

長崎廻寒天并世上食用角寒天、儀、大坂町人尼崎又右衛門一手取締仕來、去、寅年都、株、札、問屋仲間、組合等停止、諸色素人直賣買勝手次第相成、御趣意を以、右一手取締と廉差止、長崎廻寒天、儀、同人へ賣上請負、付、食用角寒天、製作人共、勝手、賣出可、旨、追、相觸置

京都若王寺配札人

尼崎又右衛門の長崎廻寒天及食用角寒天、取締を復す

○圖五六〇 然、此度諸問屋組合等再興相成、付、右、准、長崎廻寒天并世上食用角寒天、如、元、右、又、右、衛、門、一、手、取、締、復、古、渡、間、一、統、其、旨、を、存、諸、事、去、ル、寅、年、以、前、通、相、心、得、不、取、締、義、無、之、様、可、致、右、趣、三、郷、町、中、可、觸、知、の、事、

寅八月(六日)

對馬

信濃

(同上)

○圖六〇三 八月十日、東海道六郷川渡船役困窮、付、渡船賃割増、事○圖五八一七及六二二九九を見よ

○圖六〇二 九月十八日、異國船相見、

異國船相見、決、驚、問、敷、且、右、事、寄、諸、色、直、上、致、問、敷、事、

口達觸

此節近海に異國船相見、趣、得、も、當、地、海、岸、の、遠、淺、に、あ、り、異、船、可、乘、寄、場、所、に、無、之、自、然、解、等、を、以、乘、入、儀、向、手、配、も、有、之、決、為、乘、入、不、手、筈、間、右、沖、合、に、異、船、相、見、歟、又、の、湊、先、等、に、滯、船、致、し、共、決、驚、騷、キ、問、敷、勿、論、猥、浮、説、等、不、觸、銘、妻、子、召、遣、の、迄、も、諸、事、心、得、違、無、之、様、得、と、示、別、火、元、入、念、可、ヤ、

一、右、跡、異、船、近、海、に、相、見、へ、事、寄、諸、商、賣、諸、取、引、等、相、滯、義、無、之、様、い、も、諸、色、直、段、等、引、上、ケ、ヤ、問、敷、

右、通、三、郷、町、中、小、前、末、の、迄、不、洩、様、(圖六〇四)「可、聞、事、○圖二四一二及圖八三六を見よ

御觸及口達 安政元甲寅年

二一〇七

右に乘じ諸色直段を懸賞せしむる勿れ

外船渡來につぎ徒に動搖する勿れ

○南組惣年寄の副書日付は九月十八日酉中刻なり、

(御觸書判形帳)

八月十九日 異國船近海へ來り沙汰有之に付、米穀其外諸品共買貯の儀致問敷事、

外船渡來につき米穀其外諸品を買貯ふ可からず

異國船近海に來り沙汰有之に付、御口達○圖二四一を以被仰出の通に儀に處、小前○圖二四一の共白米を買立の儀有之由、全無弁當然を危踏○圖二四一の方、右躰に所業有之哉に相聞の間、得を論、米を勿論諸品共買貯の儀を、甚以如何に事の間、能に相心得の様、別あ末迄に者に、心迷ひ無之、穩に致し罷在、様可被申聞の事、

九月十九日卯上刻

(同上)

同日 異國船渡來に付、町に騒敷儀を勿論、右見物に船差出の儀仕問敷、并諸廻船入津出船共、聊無危踏諸荷物運送可致事、

口達

外船渡來すと雖も動搖する勿れ

此度異國船渡來に付、兼あ爲固メ被仰付有之武家人數場所(一)に罷越に付あも、浮説等も可有之哉に得共、右を固メとして被差置の儀に、異國船に儀を願に筋有之、渡來いふに儀に付、最前相觸○圖二四一の通、町に騒ケ敷義無之様可致、

外船見物の船を出す可からず

一異國船掛り居の處へ、見物に船乗出に近寄の儀に、決あ不相成、問、所役人共嚴重に相制可申、若不相用船差出の儀有之に得共、早に可申出、

廻船積荷物の運送を危

一異國船渡來中、諸廻船入津出船共、聊差滞の儀無之筈に、問、安心いふ、無危踏諸荷物運送

俱躊躇する勿れ

可致、右に通三郷町中不洩様早に可申通事○圖六〇二五及圖二四一四を見よ、

寅九月十九日 ○南組惣年寄の副書日付は同日亥下刻なり、

(同上)

八月十九日 此節異國船渡來中に付、別あ火に用心厚可被申合の事、

今日火消年番町に年寄西寄會所へ被呼出、惣御年寄永瀬幾代助様方、左に通被仰出、

夏以來火事沙汰無之に付、先、月無油斷様達置○圖八三の處、其後も同様有之に、彌大切に心得、焚火并更ら灰風呂等、仕舞方迄も格別入念、用水汲溜番廻り方等無怠様申付、風吹の夜の猶更に事、殊に此節異國船渡來中、出火有之に別あ混雜の儀に付、火に用心に儀に厚く申合置可被申の事○圖八三を見よ、

外船碇泊中に殊に火の元を嚴重ならしむ

寅九月廿日 ○幕合に載する所、辭句本令と相違あり、 火消年番

小

(同上)

町印

九月廿五日 異國船見物に船等差出申問敷事、

此度大坂近海に異國船渡來に付、武家人數場所に出張有之に付あり、浮説等も可有之哉に得共、右を爲御固被差置の儀に、異國船に儀に願に筋有之、致渡來の儀に付、町に騒ケ敷義の勿論、諸商賣諸取引向一同相滞の儀無之、致安心、諸廻船入津并出船共、無危踏諸荷物運送可致、尤異國船掛り居の處に、見物に船乗出に近寄の儀に、決あ不相成旨等、最前大坂町中并最寄海岸附村に新田等へ、嚴重相觸置○圖二四一の儀に得共、其後も漁船又の沖合働に小船等に

外船見物の船を出すを禁ず

御觸及口達 安政元年甲寅年

乘、見物罷出ひものも有之、或近國海岸附し場所か、追々見物船乗出ひものも不少趣相聞、以し外し事この條、前段中渡し趣相弁、決り見物船等差出し間鋪ひ、自然此後も不相用様子相聞ひ、嚴重可し付、間、其旨を存、夫と所役人共も心を附、相制しひあも是又不相用ひ、其段其向し可し出ひ、

右し趣三郷町中に可觸知もの也、

對馬

信濃

(同上)

圖三四三 九月廿九日 御池通五丁目河内屋重右衛門支配借屋阿波屋菊松、孝心奇特成者こ付、御褒美被下し事、

御池通五丁目

河内屋重右衛門支配借屋

阿波屋菊松

孝子阿波屋菊松に錢を賜ふ

右菊松儀、當七拾貳歳こ相成ひ母はふと兩人相暮罷在、兼あ實躰成ものこあ、幼年し砌もり袋物仕立職仕覺、父仁衛儀(兵衛)三拾五年以前、文政三辰年致病死ひ後、右仕覺ひ職業出精いふし、母はふを相養ひ罷在、同人義七年已前申年不慮こ致怪我、身躰自由難相成、故、菊松儀攝あ難波村骨接療(治)次いふしひあの方へ、はふを脊負連行療治受、爲致平愈(癒)程こ、大切こ相仕に罷在ひ處、五ヶ年已前戌年か菊松眼病相煩、職業等出來兼、及困窮ひこ付、心配いふし、居宅表先に

雜菓子店差出ひ得共、右等し義こあき日用し凌方も難相成ひ故、按(腹)服導引習覺、右を稼こいしし、聊宛貫請ひ賃錢を以、母つるを養ひ居、内、同人儀去き子年六月頃か病氣差發、起臥も難相成、處、種々藥用いふし、好ひ食物等も困窮し中か相調爲給、介抱爲行届ひこ付、漸々及(快)快服、由、然ル處自分の次第二眼病相重、終こ盲目相成、同町二別宅罷在ひ阿波屋龜吉とやのを弟こあ、同人も至る貧窮こ相暮、子供等も有之、家内し育方も行届兼ひ得共、右躰母兄し難儀致心配、家賃錢の龜吉か相送り、心を付罷在ひ得共、素か充分し賄等力こ難及ひこ付、菊松義身分を慎、不相替母へ孝養を竭、神妙成者し由相聞ひこ付譽置、鳥目五貫文差遣、猶此上孝養を竭、行狀相慎、渡世出精可致段中渡ひ事、

○南組惣年寄の副書日、付は九月廿九日なり、

(同上)

圖三四四 十月七日 異國船出帆し旨注進有之の間、平日し通產業可相營事、

口達

寂前相觸二見よ、ひ安治川沖二碇泊罷在ひ異國船し儀、去ル三日同所出帆、彌大洋に出拂い、旨注進有之、間、安心致し、彌平日し通產業可相營と勿論、諸船出入諸取引等、彌以差滯儀無之様可致ひ、

右し趣三郷町と末と迄不洩様早と可し聞ひ、

寅十月 ○南組惣年寄の副書日、付は七日亥上刻なり、

(同上)

參 三三 十月九日 異國船渡來こ付、度々御教諭被成下ひ段、御禮上し事、

御觸及口達 安政元甲寅年

二二一

外船出帆せるを以て平産の如く産業を營む可し

昨八日三郷年番町、東寄會所に被招呼、惣御年寄中、御差圖有之、左に通御禮奉り上り、乍憚口上

今度近海に異國船渡來仕ひ付、追、御教示御觸四二四一・二被成下、御奉行様晝夜御苦勞被爲在、町人共一統安心仕、家業相營、御憐愍難有仕合奉存、此段乍憚各様方宜御禮被仰上可被下、以上、

但、右御禮に節、火に元と義矢張是迄に通、不相弛様可被相心得旨被仰渡り付、此段乍序御達り上り、

嘉永七寅年十月八日

郷中惣代

南組年番町、
北組年番町、
天満組年番町、
寄印
寄印
寄印

惣御年寄中

乍恐口上

今度近海に異國船渡來仕ひ處、町に心得方度、御教示御觸被成下り付、一統安穩家業相營、町人共末迄冥加至極難有仕合奉存、將又右異國船退帆仕、遠く大洋をも出拂、段、御觸書二四一四を見よ、趣彌安心仕、恐多も奉仰御威徳、末々いもの迄重疊難有仕合奉存、依之乍恐御禮奉り上り、以上、

嘉永七寅年十月八日

市民上書して外船の無事を謝す

市民上書して外船の無事を謝す

郷中惣代年番町

- 長濱町年寄 板屋卯右衛門 西信町年寄 倉橋屋勝兵衛 内淡路町年寄 多田屋永四郎 錦屋町 年寄病氣二月行司 尼屋定次郎
- 瓦町年寄 高安杏山 玉澤町年寄 布屋七郎兵衛 肥後島町 年寄病氣二月行司 大坂屋喜兵衛 京橋六丁目年寄 米屋又兵衛
- 南農人町年寄 綿屋吉兵衛 左官町年寄 近江屋嘉兵衛 柏原町 年寄病氣二月行司 河内屋平七 北久寶寺町年寄 伊賀屋助七
- 平右衛門町年寄 灘屋仁右衛門 孫左衛門町 年寄病氣二月行司 和泉屋吉右衛門 炭屋町年寄 豊嶋屋新右衛門 鹽谷町年寄 泉屋理右衛門
- 小西町年寄 田中屋新右衛門 天満堂心町年寄 大坂屋清兵衛 南森町年寄 八尾屋新助 船大工町年寄 神崎屋源助
- 橋通町年寄 布屋七郎兵衛 年寄病氣代玉澤町年寄

御奉行様

(同上)

十月廿八日 安堂寺三丁目槌屋榮治郎借屋辰巳屋久兵衛同居娘、同入弟久三、郎平治郎、孝心奇特成者に付譽置、た夢へ御褒美被下り事、

安堂寺町三丁目 槌屋榮治郎借屋 辰巳屋久兵衛同居娘

同入弟 久三郎

御觸及口達 安政元甲寅年

二二一三

同 平治郎

孝女たけ姉
弟を賞した
けに錢を賜
ふ

右た多儀、父久兵衛義者煙草入金物類卸小賣い(致)一渡世、母きぬ儀共家内五人相暮罷在、た多儀者生得柔和穩順成者こゝ、幼少に砌を致大切こ、親にや附を不相背、誠實に仕向罷在の内、母きぬ義六ヶ年以前酉せ十一月頃か、痲病こゝ手足引付、惣身自由難相成様追こ成行の付、薬用介抱こ心を竭、起臥等傍に引添、夜中連も寝入撫捺い、穢もの取片付、食事世話等も爲行届、久兵衛家事向をも取賄、其上年頃こも相成の付、縁談相勸の者有之のちも、母に介抱鹿略に相成のち者不宜逆、程克中斷、其身者髪に飭身形も不差構、物見遊山等こ益不罷越、身分相慎、右躰病氣に母を當時迄六ヶ年之間、晝夜無怠懈介抱い、父久兵衛こも大切に相仕へ、孝心を竭、久三郎平治郎義も姉た多に手傳い、母に介抱爲行届、父久兵衛家業をも俱に致出精の段、一同擧置、た多者鳥目五貫文取遣、猶其上孝養を竭、行狀相慎の様中渡の、

○北組惣年寄の副書日
付は十月廿八日なり、

關六〇三六

なるべし、

(御觸帳)

關六〇三六 十一月四日 今朝に地震こゝ、崩家又と怪我人等有之口こ、可届出事、

今朝丁内年寄惣會所へ被召呼、永瀬七郎右衛門様を左に通被仰渡の、

地震
崩家又は負
傷者あらば
届出づ可し

今朝地震こゝ組合町に内崩家亦者怪我人等有之口こ、御役所并惣會所へ早に相断可申、尤土藏に八卷落の段に儀者相断、儀不及の、此段組合町に申通し、有無共半紙貳ツ折に相認、明

五日五ツ時迄に相断の様被仰渡の間、御通達の上、以上、

但、家崩竈數明家迄相断可被成、尤崩家怪我人等有之、相断出のちても、右有無共書付別段

に御差出可被成の

○を
見よ、

寅十一月四日

年寄
尼ヶ崎町壹丁目

(御觸帳)

火の用心

補遺 八三九 同日 火に元儀無念無之様可被申事、

火に元儀、兼に達置の得共、今朝に地震嚴敷に付、自然此後處處相危路、混雜に紛、火に元不念に儀無之様相心得、町に念を入相見廻り、裏借屋迄も無油斷様可被申聞、事(御觸帳二四一六及三四七を見よ、)

寅十一月四日未中刻

(御觸帳判形帳)

補遺 八四〇 十一月六日 強地震こゝ川中明地面へ遁出の者、酒宴遊興ケ間敷儀致間敷、右に者に内極難澁に者、又と損所怪我人等も可届出事、并火に元盜賊等も用心事一可被申合の事、

今日町内年寄西寄合所へ被召呼、江川庄左衛門様を左に通り被仰渡、強地震に付、屋形舟四足茶舟等を借り、川中へのうき罷出、事の共通に事こ、得共、右に事寄、酒宴遊興ケ間鋪義有之のちあり、以て外に事この間、心得違無之様相心得、明地面へ障子等こ取廻し罷在の者も、同様相心得、惣に火に元別念を入(御觸帳二四一六及三四七を見よ、)可被申聞の、一通罷在、内、極難澁に者有之のちあり、篤と相調可被申聞、

御觸及口達 安政元甲寅年

二二五

避難者にし
て酒宴遊興
等の振舞あ
る可からず
避難者中の
極貧者調査

破損家屋及
査傷者の調
火の元及盜
賊の取締を
嚴ならしむ

一此間取調八三、後、損所怪我人等、尙亦相調可被申聞、
一町、廻り方別、嚴重一、火、元盜賊等、用心專一、可申合、
右、通被仰渡の間、猶又有無共御年寄中名印、上、明日晝迄、當惣會所へ差出可被成、以上、
一但シ、半紙貳ツ折、

寅十一月六日酉上刻

年番
尼ヶ崎町壹丁目

(御觸帳)

圖六〇七

十一月七日 古金銀引替所、猶又來卯十月迄、是迄、通被差置、事、五兩判

圖六〇八

金通用并引替、儀、右同斷御差延、事五九八七・六〇二
及六〇六七を見よ、

圖六〇九

同日 此度、地震津浪、品、拾取、有之、可届出事、附、明地面、
野宿致、者へ、施行致度存、無遠慮可申出事、

口達

津浪につき
流失品を拾
得したる者
は届出づ可
し

火の用心

此度當表地震津浪、付、船荷物流れ、の金銀、板、材、木、等、類、其外何、こ、よ、ら、拾、ひ、取、り、の、有、之、
の、一、早、奉、行、所、に、可、訴、出、自、然、川、内、を、立、廻、見、當、の、板、材、木、類、極、印、を、打、又、の、書、付、等、の、
一、或、拾、取、の、隱、置、の、有、之、趣、相、聞、の、一、早、速、召、捕、吟、味、上、嚴、重、可、申、付、
但、町、火、元、儀、入、念、の、様、一、昨、四、日、申、聞、置、八三
九を見よ、得、共、猶、又、心、を、付、晝、夜、不、限、重、
入、念、可、申、八四
三を見よ、
右、趣、三、郷、町、端、迄、不、洩、様、早、可、申、通、事、

寅十一月七日

避難の貧民
に施行せん
と欲する者
は申出づ可
し

物御年寄永瀬様、御演舌、被仰渡、地震、家等崩れ、明地面、野宿、い、罷、在、極
難澁、の、へ、施行、い、度、の、有、之、の、一、西、寄、合、所、に、可、被、申、出、八四
一を見よ、
(御觸書判形帳)

圖六〇六

十一月八日 東海道舞坂宿新居宿、日光道中宇都宮宿、美濃路萩原宿、困窮、付、人

馬賃、并、今、切、渡、船、賃、共、割、増、五八二
六を見よ、

圖六〇七

十一月九日 施行、申、立、類、の、都、西、寄、會、所、へ、可、被、申、出、事、并、溺、死、者、家

内親類知音方、罷在、者、取調可申事、

施行申出の
者は西寄會
所へ届出づ
可し

強地震、適合、の、男女、引續、高、沙、溺、死、い、の、不、少、然、ル、處、一、昨、七、日、施行、儀、付、相、達
置、二四一
六を見よ、の、處、出、役、場、所、に、内、粗、相、片、付、の、有、之、且、其、場、所、へ、申、出、の、有、之、右、殘、家、内、等、追、取
調、中、旁、及、混、雜、難、行、届、の間、施行、申、立、類、都、西、寄、會、所、に、可、被、申、出、の、殘、家、内、并、極、難、の、
一、追、伺、上、割、渡、可、申、間、其、旨、可、被、相、心、得、
一、溺、死、い、の、家、内、親、類、知音、方、罷、在、の、可、被、相、斷、尤、世、話、行、届、様、可、被、心、得、八四二
一を見よ、

溺死者の遺
族其親戚知
留己の家に寄
留せる者の
調査

○南組惣年寄の副書日付
は十一月九日酉中刻なり、

圖六〇八

十一月十日 安治川木津川兩河口に於て、致溺死、乘船、者、右、者、共、家、内、
の、親、類、知音、方、罷、在、者、并、極、難、澁、者、等、組、合、町、相、調、有、無、共、可、申、出、事、

(御觸書判形帳)

御觸及口達 安政元甲寅年

二二七

溺死者の調査

極貧者及溺死者遺族の調査

火の用心

兩川口の破船船撤去と船路の復舊

紅毛錫和錫等賣買勝手たる可し

市民上書して安治川木津川兩川口の航路復舊を謝す

今日年番の惣年寄中が被仰渡ひ、左に通り、

此度高汐に付、安治川木津川兩川口におゐる、乗船し者夥敷溺死いさゝか類、組合町と相調、有無共半紙貳ツ折に相認、今明日中を通達年番が可申出旨被仰渡、間、右否書付を以年番へ御届可被成、此段御通達申上ひ、

一昨夜惣會所が廻状相廻り、施行申立し類、極難澁し者へ被下分(問)、溺死いさゝかものゝ家内親類知音方(ニ)も罷居ひ者共、篤を相調、御年寄印形を、町別否惣會所へ御斷可被成ひ、但し、半紙貳ツ折に相認、

右に通被仰渡の間、此段御承知し上、早に御順達可被成、已上○圖八四、二を見よ、 通達年番 尼崎町壹丁目

(御觸帳)

補達 八四三 十一月十一日 火に元格別ニ心を用可申事、

打續き風強く吹ひ處、殊お此間より地震に付、明地面等へ遁罷在ひもの等を別あ心を付、町内が晝夜見廻り可申ひ、此間も御達○圖二四一、有之ひ得共、寒氣強相成ひに付、火に元格別ニ心を用ひ様、末に迄急度相達可被申事○圖二四二、○を見よ、

寅十一月十一日申下刻

南組惣年寄

(御觸帳判形帳)

補達 八四四 十一月十二日 兩川口に破船損船御取除方被仰付、船路自由相成の間、諸荷物

運送不滞様取計可申事、

高汐に兩川口廻船込入、破船損船不少、右に付格別御世話を以、日々取除方被仰付、安治川を勿論木津川共、船通路自由相成、間、其段問屋船宿の不及申、荷物取扱ひの相心得、荷主客先船手等無危踏相心得、様申通し、諸荷物爲登方下一方、聊不滞義專に取斗可申ひ、此旨前書に向々に相達可被申事○圖二二二、○を見よ、

(同上)

補達 二二七 十一月十六日 紅毛錫和錫共已來勝手次第賣買可致事、

紅毛錫和錫等儀、去秋中相達置○圖二二六三及圖二二七、處、已來紅毛錫和錫共勝手可致賣買旨、御達有之間、其筋をのへ可被相通、事、

(同上)

補達 二二三 同日 兩川口破船損船御取片付被成下ひに付、御禮申上ひ事、

昨十六日、西寄合所に三郷年番町々年寄被召呼、惣御年寄中が御差圖有之、左に通御禮奉申上、

一去ル五日俄に高汐漲來り、兩川口廻船川船舟糶に相成、破船損船不知數、差當り出入船と差支、市中一統大心配仕ひ處、格別に御仁惠を以、晝夜右船と相片付、全兩川口出入不差滞様相成、末に迄安心仕、冥加至極難有仕合奉存、依之乍恐私共爲惣代御禮奉申上、以上○圖八四、四を見よ、

嘉永七寅年十一月十七日

三郷火消年番町

御觸及口達 安政元甲寅年

二二一九

年 寄連印

御奉行様

(同上)

圖四一八 十一月廿三日 米切手通用事、

米切手の入替を危む勿れ

○前文圖二五 右、通明和貳酉年相觸、趣を以、文化十貳亥年にも再觸○圖一四二 差出有之處、其後年月相立、忘脚(却)の又の不相弁ものも有之哉、近來入替と唱、米切手質物ニ取、儀を不安心ニ存、追々取引差扣ひものも有之哉ニ粗相聞、條、右様ニ儀決り無之筈ニ、間、前段觸渡ニ趣厚相心得、米賣買ニ携ひもの別あり儀、其外一統無危踏取引可致旨、三郷町中不洩様早々可申通事、

寅十一月○本令編書に十一月廿三日御觸とあり、

(同上)

圖四一九 十一月廿九日 松屋町表町年寄梅屋張兵衛外七十七名、役儀出精相勤又の難船助

遣ひニ付、夫々御褒美被下事、

松屋町表丁年寄

梅屋張兵衛

役儀出精の年寄梅屋張兵衛に銀を賜ふ

右のものの、年寄役勤方宜、其上旨目ニ養母を大切ニ仕、其外(奇)寄特ニ取斗等相聞ひニ付譽置、銀壹枚差遣、事、

安治川南三丁目上荷船乗竹

藏

○原本以下六十八名を擧ぐ、本文の員數と合はざるのみか、排列の順序も不明なれば畧す、

難船を救助せる竹藏外七十六名に錢を賜ふ

右のものの共儀、當十月十一日同十六日同十九日同廿日同十一月二日同四日、於安治川口、廻船七艘強風ニあ淺瀬に被吹付、及難儀の節、相詰又を邊ニ居合、早速右船に漕付、危難を助ケ遣ひ段、兼難船助ケ方儀、厚相心得の故ニ付譽置、爲手當竹藏外貳拾九人の鳥目五百文ツ、喜兵衛外拾五人に同七百文宛、善四郎外拾八人に同壹貫文ツ、新七外拾壹人に同三貫文宛差遣ひ、猶此上無油斷心掛の様可致ひ、

寅十一月○北組惣年寄の副書日付に廿九日なり、

(御觸書)

圖四二〇 十二月朔日 火元入念可申事、

口達

十一月廿九日の大火 火の元の取締を嚴ならしむ

火元儀を兼相觸○圖四八四ニ付、銘々用心いゝ儀、得共、頃日打續風烈敷處、既昨廿九日大火有之の付、彌無油斷入念可申の、當秋已來異國船渡來又の地震津浪等變事も有之、此上大火と有之のあり、以て外儀ニ付、町々廻りものを并町役人共見廻り方の不及ず、丁内裏借屋壺人暮ものを迄、銘々厚心付、危末儀無之様、別火元入念可申の事ニ付、右通三郷町中末迄不洩様可申聞事、

寅十二月○南組惣年寄の副書日付は朔日酉中刻なり、

(御觸書判形帳)

圖四二一 十二月六日 宮門跡方其外諸名目金銀、當表貸付願濟と口と貸付方事、

宮門跡方其外諸名目貸付金銀借り受の節、彼是失費(前)のもの有之、其上返濟滞と砌、其筋に被呼出、往還等こゝ多分ニ雜費相掛り、難澁相迫、俱々欠落いゝものも有之哉ニ相聞、右元

御觸及口達 安政元甲寅年

二二二

來貸附、趣意無弁別借受の故、右躰及仕宜の義を、於當表貸付願濟と向、

一 妙法院宮御抱大佛殿修復料金貸付 ○圖二三八
 一 青蓮院宮御祠堂金貸付 ○圖二三九
 一 知恩院宮御用意金貸付 ○圖二二九
 一 靈鑑寺宮御廻向料并祠堂金貸付 ○圖二二四
 一 光雲寺祠堂銀貸付 ○圖二三八
 一 泉涌寺祠堂銀貸付 ○圖五七九
 一 靈源寺祠堂銀貸付 ○圖二三五
 一 高野山大徳院修復料金貸付 ○圖一二三
 一 紀伊殿用途金貸付 ○圖五六五
 一 紀伊熊野三山修復料金貸付 ○圖六〇一
 一 紀伊藏屋敷の取扱、江戸芝鑑連社修復料金貸付 ○圖一八〇
 一 尾羽藏屋敷の取扱、江戸芝天光院修復料金貸付 ○圖一五九

右、外諸名目金於當表に不取扱、右貸付と向、最初借り受、節利足先引の勿論、借受證文貸付所を認遣い、紙筆、墨料等の無之、且右貸付と内を、立入町人共手次を以貸渡、向も有之由、へ共、都口入料等の不爲差出、并濟方と儀を付、貸付所へ被呼寄出、共、人足貸其外、諸雜費出財の無之事を、且當表貸付所におも、他所支配場とのに金銀貸渡、

其貸付方
 (一) 利子
 (二) 證文認
 (三) 口入料
 (四) 人足賃
 其他諸雜費

(五) 鈞印
 前記以外の
 諸名目金銀
 を口入料
 旅費用等に
 用ひ可
 かりず

節、鈞印又の銀印杯を唱、金銀借受不、當表との證文に加印致、義問、有之哉に相聞、右躰と義の決有之間敷筋を付、其段貸付方とのにも中渡、條、右に次第相心得、借請、との共返濟不差滞の様、嚴重に濟方可致、尤他所の願濟と諸名目金、於當表貸付の義の無之、間、口入を勿論右貸付取扱、とのに、旅費用所等賃、儀、決る致問敷、若利徳に拘り、右に携の歟、(兼あ)願濟の外、内、に差加へ金等いとしとの有之におも、吟味と上急度可令沙汰、

右、通三郷丁中可觸知の地、

寅十二月 ○本令端書に十二
 月六日御觸とあり、

對馬

信濃

(同上)

同日 上金と儀此節上納付の事、并右日限と事、
 口達

上金の納入
 を命ず
 上金納入の
 方法
 預金銀の取
 付商品仕込

此度當表丁人、内、身元宜との并に右に差續のの其外一統、銘、壹人立又の同志との等中合、御國恩上金と義、願、通御聞届相成、付あを、當寅年納と分、先月中爲相納可やと處、地震高浪等、市中及混雜の趣、見合置、此節上納可付、間、其旨可存、尤右納と義、正銀に限ら、手形を相納のあも不苦、且一時に納方差支、年割を以上納相願の分も、是又寂前御聞届相成有之上を、旁以上納も致し易く、差向金銀融通等、差障、義決あ無之處、何角を浮説、觸、亦右に拘泥、當然入用にも無之預金銀を勿論、兩替等へ入込金銀過急に及

御觸及口達 安政元甲寅年

二二三

の差控等を
爲す可から
ず

取立、或米切手入替藥種類並合取組諸品仕入等、差扣ひきの有之ぬあり、以て外心得違ひ義に付、其段能く相弁、都ぶ金銀取引万事差支無之様可致、自然一己と異存を以、不良と取斗致ひきの相聞ひの、急度可付付ひ、右と通三郷丁中不洩様可通事、

寅十二月

上金納頃合と義、先月中可被仰出、處、地震高汐等こあ及混雜ひ趣こ付、被差延置、仍之別紙御口達と通こ、間、町と又と一己立上金、來ル八日天滿組、九日十日南組、十一日十二日北組分、郷と惣會所へ銀手形を以、朝五ツ時方四ツ半時迄、年寄可有持參、諸仲間と分引續北組惣會所に差出、積、是の日割近日可達、月迫と義こ付、右と通差略被成遣、義こ可有之ぬ、將又其外と向と上納と義の、十六日已後當月下旬迄、追こ上納日割いぬ、廻狀を以相達、間、右こ應と取斗方可有之ぬ、尤納方と義の前同様相心得、惣御口達と趣篤と相弁、万端不
差障様專一こ事(圖二四〇
八を見よ)

寅十二月〔六日〕

掛リ
惣年寄

(同上)

參考

二三

十二月十三日 小便引請直段一人前二百五十文と相極、右直段に應と、先前方掛來ひ品と差出度旨、攝河二百三拾三ヶ村小便直請村と出願と事、

巡章

一當月六日南年番町と内、北久寶寺町壹丁目東地方御役所に御召出と上、別紙と通被仰渡、趣披露有之ぬ間、此段御通達と上、右御承知と上無御留置、早と御順達可被下、以上、

寅十二月十三日

乍恐御訴訟

- 攝河近村貳百卅三ヶ村と内
- 肥小便直受場取村、年番惣代共
- 川上金吾助殿御代官所入組
- 住吉社領攝河東郡島村庄屋
- 願人 彌三右衛門
- 土屋采女正殿御役知
- 同 島同郡今福村庄屋
- 同 九郎右衛門
- 脇坂淡路守殿御役知河島美田
- 郡横堤村庄屋病氣二付年寄
- 同 喜右衛門
- 増田作右衛門殿御代官所
- 攝河西成郡海老江村庄屋
- 同 市右衛門
- 同 島同郡同村福
- 崎新田支配人
- 同 多兵衛

肥小便請入家所價直平均款願

一市中出肥小便と儀と、往古々難有蒙御趣意、近村百性共へ請入來ひ處、去ル寅年諸株御取解被爲仰付、右こ付小便肥も請入勝手次第と相成ひこ付あを、價甲乙掛込箇所糶取、遠在、持歩行渡世仕ひきの追と及増長ひこ付、請入家所と相改、難澁至極と折柄、去と子年三月中再興(圖五
九一五)を見、御趣意被爲仰付、百性一統御仁惠と程冥加至極難有奉存、然ル處請場所價甲乙有之、糶賣と類不少、御觸面こも差響奉恐入、種々平等柔和と引合仕ひあも、御取解中一旦價甲乙掛込

小便引請解
放中の流弊

御觸及口達 安政元年寅寅年

小便壺人分の平均直段を二百五十文に定めんとす

、仕癖ニ泥、仕入し時節に向ひあも、兎角糶賣糶買ニ類出來、商内物同様ニ成行儀ハ、全價
甲乙ガ事發儀ニあ、既ニ町方内ニも旧家向、價ニ不拘、御趣意守リ、先前ガ仕來ニ通賣
物不致故、旧來ニ百姓不相替請入罷在、何分近村向ハ小便肥ノ無之、外肥ニあモ作付生たち
かさく、不斗天保度遠近在及出入ハ節も、其譯奉申上、處、被爲聞召譯、近村向ハ直請場取
村、又遠在ニ向ハ買村等立譯、和談相整、近在一同難有奉存、然ル處家所混雜仕ハあモ、手
當肥ニ相放、百姓ニ難盡^(難盡)申盡、迎モ此儘ニあハ御田畑相續ニ相拘、歎ケ敷奉存、得共、下ニあ
甲乙無之様平等ニ取締行届かぬ、不恐願奉歎願、何卒格別ニ御憐愍ヲ以、攝河數方ニ百姓^(姓)乍
恐御救被爲成下、下尿同様ニ振合を以、壹人別價貳百五拾文直平均ニ御沙汰奉頂戴度、然ル上
ハ先方ニ任届、先前ガ掛來、品々、御定被爲成下見積りを以、町在應對次第、先方勝手相成、
品掛込様成行ハ、百姓一統肥手差支永續仕ハ義々、御厚恩ニ程、生ニ世ニ難有仕合可奉
存、以上、

嘉永七寅年十月廿七日

御奉行様

乍恐口上

右願人

彌三右衛門

○以下四名は前掲に同じ、

肥小便請入村年番

惣代共

小便直段を二百五十文と定めたる理由

從來の掛物直段の不同

小兒六歳以下は計算に入れず

一肥小便價直平均ニ義、先月廿七日奉歎願ハ處、今日私共御召出ニ上、願ニ筋口ニ御糺ニ付、乍
恐左ニ奉申上ハ、

一願面ニ壹人前價貳百五拾文ニ相立、譯柄御糺ニ御座、此儀ハ壹人前壹ケ年小便出荷凡七荷、
直段四季平均百荷ニ付當時五拾目位、代銀壹人分三匁五、内百文明ケ子人足貨、引残り貳百
五拾文ニ見積ニ御座、

一掛物價儀々、餅白米壹人前壹升ハ貳升五合位迄、錢壹人前百文ハ貳百五拾文位迄、實綿壹人
前百五拾目ハ貳百五拾目迄、^(繰)操綿四拾目ハ六拾目迄、香ニ物大根三拾本ハ五拾本位迄、^(ニカ)
右ニ通品、不同掛來リ、混雜難盡仕ハ付、前書直建元附貳百五拾文平均奉願上ハ義々御座、
外ニ茄子々々兩品掛入ハ代錢百文斗ニ品々御座、此兩品相止、貳百五拾文見究相場直段ニ
御座、付、矢張下尿同直段ニ品柄ニ奉存、尤價替物ニ品々年々相場を以、平均直段見積を以、
掛込ニ心得ニ御座、

一小兒儀々是迄壹人前七才已上掛來リ、六歳以下ハ無代ニ心得ニ御座、
右口ニ御糺ニ付、有躰奉申上、何卒右ニ段御聞濟被爲下、ハ、難有奉存、以上、

川上金吾助様御代官所入組
住吉社領攝務住吉郡島村庄屋

彌三右衛門

脇坂淡路守殿御役知
河島美田郡横堤村年寄

喜右衛門

御觸及口達 安政元甲寅年

二二二七

御奉行様
乍恐口上

一私共今日被爲御召出、攝河近村貳百三拾三ヶ村之内、肥小便直請場取村、年寄惣代共方肥小便請入家所價直平均歎願儀被仰渡、奉畏、然ル處組合町、一同相談等仕付、來卯年二月十五日迄御日延奉願上、何卒御聞届被爲成下、ハ、難有奉存、以上、

- 三郷火消年番町之内
- 北組五町貳丁目年寄
- 高安 杏山
- 京橋六丁目年寄
- 米屋 又兵衛
- 南組北久寶寺町一丁目年寄
- 伊賀屋 助七
- 天満組南森町年寄
- 八尾屋 新助
- 川上金吾助殿御代官所
- 攝河住吉嶋村
- 彌三 右衛門

(同上)

御奉行様

圖六〇三〇 十二月十四日 年號改元爲安政旨、御弘有之御事 ○體裁圖一六〇五に同じ、

圖六〇三〇一六〇三三 〇圖九及、

圖三三四三 十二月十六日 門松注連繩等を忍々こそつ取、或ハ押ハ貫掛ハ儀仕間敷事 ○圖一七、

禁裡違營につき米穀其
他諸色直段
を賤賣せし
む可からず

本年市中の
静謐なりし
を賞す

補達 八四五 同日 ろくと穴打道中双六辻寶引と類禁可事 ○圖三〇

圖三三四三 十二月廿七日 此節禁裏御造營ニ付、米穀始メ諸色賣直段不相當儀無之様可致事、

口達

米穀并諸色直下儀を、兼お取締付置 ○圖二一五、ハ處、當夏京都大火、砌、猶又米穀始メ材木板類其外都諸色直段、狼高直ニ不相成様、銘、可相慎旨口達觸 ○圖二三九、差出ハ付、非分賣方ハハハ義有之間敷、得共、此節禁裏御所御造營ニ付、江戸表方諸役人被差登、諸國カ諸職人等相集ハ付あを、當表方米穀始メ「諸色追、可積登間、尙又賣直段」不相當儀無之様可致、若徳用ニ拘、違背ハハハ有之趣相聞、ハ、急度可令沙汰ハ、

寅十二月 〇本令端書に十二月廿七日御觸とあり、

(御觸書判形帳)

圖三三四四 十二月廿九日 當年市中取締行届ハ付、惣年寄并町役人共御賞美事、

當年を度々變事等有之ハ得共、市中取締宜惣躰穩趣、畢竟精々世話行届、故儀々、一段事ニ存、

〇以下圖二二五、

寅十二月 〇南組惣年寄の副書日、付ハ廿九日戌中刻なり、

(同上)

圖六〇三三 十二月 日光道中中田宿困窮ニ付、人馬賃錢割増事 ○圖五八三、

圖六〇三四 同 月 甲府柳町困窮ニ付、人馬賃錢割増事 ○圖五七九、

御觸及口達 安政元甲寅年

圖六〇五 同 月 東海道沼津宿外拾三ヶ宿、中山道板橋宿外拾貳ヶ宿并河渡川、甲州道中
小原宿外三ヶ宿、人馬賃錢船賃共割増事○圖五八三六及六二四八を見よ、

安政二乙卯年

補達 八四六 正月六日 舊臘江戸表出火有之ハ事寄、諸色直段引上間敷事、

今日通達町、年寄當郷惣會所へ被招呼、惣御年寄中ハ左ニ通被仰渡ハ、

旧臘廿八日江戸表ニ出火有之由、格別ニ事ニ無之處、右ニ更寄、諸色直段引上ニ不シ様、其

筋ニ者ニ通置可シ旨、組合町ニ可被相達ハ事、

○寅十二月當番當珍町の
通達日付は正月六日なり、

(御觸書承知印形帳)

圖六〇三六 〇圖一及
二に同じ、

補達 八四七 正月十一日 手嶋流心學道話ハ儀、隨分ハろマりハ様、町内ハ世話可致ハ事

○圖七五
二に同じ、

補達 八四八 同 日 〇圖八〇
〇圖八〇 同 日 〇圖八〇
二に同じ、

圖六〇三八 二月朔日 此度勢嘉海岸并當地近海爲見分、御勘定奉行石川土佐守○政
平被差遣ハ

ニ付め、無益ハ失費不相掛様可致事

圖六〇三九 〇圖三
二に同じ、

圖六〇四〇 三月三日 布海苔元草ハ儀、尼崎又右衛門へ一手取締ヲ付ハ付、右元草廻着ハ

度毎同人へ致通達、正路ニ賣買可致事、

和産荒物染
草仲間

布海苔元草不取締ハ儀ハ有之、右品を賣買仕來ハ當地和産荒物染草仲間ハ者共、渡世向差支ハ

尼崎又右衛
門に布海苔
元草の取締
を許す

ニ付、寒天同様當地町人尼崎又右衛門一手取締世話受度旨、右仲間ハ者共ハ出ハ趣を以、寒天

布海苔製造
方の舊弊と
其影響

同様一手取締等ハ義、先達中又右衛門願出、取調ハ上聞届相成ハ處、元來布海苔元草ハ寒天草

自今布海苔
元草は廻着
毎に又右衛
門へ通達す
可し

似寄ハ海草ニあ、諸國海濱より取揚、諸廻船を以當地ニ致運送ハ品ニ付、荷主船頭并廻着間屋

其影響

其外一統、又右衛門一手取締ハ義不相弁ハあ、荷物散乱糶買等ニ相成、直段引上ハ而已ハから

其影響

以、布海苔干職ハ者共下品ハ寒天草を打交製ハ流弊も不相止、自然不正ハ品柄相成、前書和産

其影響

荒物染草仲間ハ者共、右品を買受職業ニ相用ハ者共迄も、致難義ハ旨を以、猶又取締方ハ義又

其影響

右衛門願出ハ趣も有之、無余義筋ニ相聞ハ間、前書廻船間屋共ハ別ハあ、義、其外一統其旨を存、

其影響

以來布海苔元草廻着ハ度毎又右衛門ニ致通達、右元草外向ハ不致散乱、元附直段不相當ハ筋ハ

其影響

勿論、糶買ケ間敷取斗等も無ハ様ハあ、寒天同様又右衛門一手取締ハ義相弁、正路ニ賣買可

其影響

致ハ、

其影響

右ニ通三郷丁中可觸知者ハ也○圖二四二
七を見よ、

卯三月○町中家持の承知判
形日付は三日なり、

對馬 信濃

(御觸書承知印形帳)

圖六〇四一 三月六日 去寅十月、遠州榛原郡金谷河原町與次内女房ハよハ及殺害ハ、忰與右
衛門人相書ハ事ハ圖

御觸及口達 安政二乙卯年

圖六〇三 三月十三日 諸國寺院と梵鐘を潰し、大砲小銃を可鑄換と旨被仰出の間、銅鐵の
 勿論錫鉛硝石等も無之の事も相濟の品を、右類を製し儀、無用之事。○圖六〇六
 一及圖二四
 二五を見よ。

補遺 八四 三月廿四日 金春八左衛門興行勸進能棧敷代、疊代、木戸札代銀之事、

覺

於天滿天神社内勸進能興行

金春八左衛門

晴天六日

- 一通 棧敷 代金五兩
- 一通 疊 代金壹兩三步
- 一日 棧敷 代金壹兩壹步
- 一日 疊 代銀貳拾五匁
- 一木戸札 代銀貳匁
- 一同三日目五日目 代銀三匁

平野町三丁目

札賣場 丹波屋六兵衛

右札賣場所に明後廿六日代銀持參、引替に可罷越ひ、尤立方に義を付、先例に通疊壹疊を付銀
 壹兩宛、祝義持參可有事、

勸進能棧敷
 代疊代及木
 戸札代

札賣場

祝儀

木戸札を豫
 め町々に分
 配す

一 勸進能の節、木戸入口を札代銀受取の處、混雜なるものも付、近例に通前以ては通札相渡
 置、興行相濟の上、残り札を以勸定致度の間、持參有之度旨、金春八左衛門に立有之、尤取集
 出張所に義を、追々出の筈の事、

當町疊場所 二 三 四
 但、組合に義を付日割の上、

當丁當日 初日 二日 四日 六日

右に通御座ひ、尤木戸札預り有之の間、御越の節會所へ御出可被下ひ。○圖六〇〇
 但、初日來ル四月十一日、
 (御觸書承知印形帳)

圖二四五 三月廿六日 無益の器具を銅鐵錫鉛硝石杯を用、或は右等も無之の事も相濟
 の品を、右類を製し儀、無用之事、
 (以原)

海岸防禦のため、此度諸國寺院と梵鐘を、可鑄換大砲小銃の旨被仰出、右の武備御充實に御趣
 意あり、此外銅鐵を勿論錫鉛硝石等、何れも必備の品を付、右等も無之の事も相濟の品ヲ、
 右類を相製し儀、自今不相成旨等と義、御觸二を見よ、有之の付あり、當表銅鐵錫鉛其
 外右類地の多賣買、并細工職渡世と者共、又丹白粉製方硝子職人共、年來に渡世取續方
 (拘)抱、殊に夫の下職人共は何れも身薄と者共、別混雜なるもの趣を付、心得方に義伺出ひ、
 右を無益の器具小供手遊ひ等、銅鐵錫鉛硝石杯を用ひ、或は右等も無之の事も相濟の品
 を、右類を製し儀を、自今被差止の義あり、必用の品を別段に義を付、其段に弁別、夫を

御觸及口達 安政二乙卯年

既具に銅鐵
 錫鉛硝石等
 を用ひ或は
 他の材料を
 代用し得る
 ものを使用
 せず

梵鐘を以て
 銃砲を鑄造
 す

差支無之様得々可被示候、

三月廿六日

(同上)

三月廿九日 安治川北貳丁目上荷船乘新兵衛外廿六名、難船助遣候に付、夫々御褒美被下候事、

安治川北貳丁目上荷船乘

同所南壹丁目上荷船乘

目印山二罷在候

新	兵	衛	宇右衛門	平	七	伊	助	權	次	良
茂	兵	衛	忠	助	喜	兵	衛	久	三	郎
万	吉	喜	兵	衛	久	五	郎	源	太	郎
清	七	重	藏	庄	次	郎	仁	三	郎	伊
長	七	波	同	卯	八	太	平	猪	助	
德	三	郎	仁	三	郎					

右に者共義、當正月九日同二月廿四日、安次川口おひく、廻船貳艘強風に淺瀬へ被吹付、及難義の節、相詰亦の邊に居合、早速右船に漕付、精々相働、危難を助遣、猶又同月十七日御用材筏にゆる積登候節、強風に御用材所へ散乱候ゆる節も、早速取集候段、兼あや渡候義、厚相心得候故に義に付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣候事、

三月 ○次の合と共に、南組惣年寄の副書日付は廿九日なり、

(同上)

同日 尼崎又右衛門一手取締寒天草并布海苔元草取扱會所候事、

難船を救助せる新兵衛外廿六名に錢を賜ふ

尼崎又右衛門取締寒天草并布海苔元草取扱會所

尼崎又右衛門一手取締寒天草并布海苔元草取扱會所候義、瀬戸物町大津屋平兵衛支配借屋借請、會所に取補理候趣に付あま、以來右元草廻着度毎、又右衛門宅に申出候あま手遠儀も有之候間、右會所へ向相達可申事 ○圖六〇四

三月

(同上)

同日 青蓮院宮貸付所候事、

尾張坂町

泉屋源兵衛家守

山田屋榮藏

青蓮院宮貸附取扱所 ○圖三三一〇及、
付は三月廿九日なり、
○南組惣年寄の副書日

(同上)

三月 瓦町貳丁目京屋伊八借屋田中屋武左衛門白燐硝製法願出候儀、聞届候事、

口達書

瓦町貳丁目

京屋伊八借屋

田中屋武左衛門

田中屋武左衛門に白燐硝の製造を許す

右武左衛門義、燐氣有之候土を以、白燐硝製法に義願出、聞届候間、同人義士買取に義ヲ談ひ、無危踏相對可致事 ○圖二五五

卯三月

(同上)

御觸及口達 安政二乙卯年

二一三五

四天王寺並山村與助兩支配外の者を家作手傳に雇入るるを禁ず

三四三〇 四月二日 四天王寺并山村與助兩支配外に者、家作手傳に雇入問敷事、口達

三郷家作手傳職に者共、往古か四天王寺配下にあ、右に者共一同井戸堀兼職のふしに付、御用役に廉に付あま、山村与助致支配の處、近來他國が當表に致出稼、右職業相働の者多、當表職分の者共業跡差障の而已から、井方御用役差に差支にも相成、混雜のふしに趣相聞の間、向後右支配外他國の者、家作手傳に雇入の義致問敷の、右に通三郷町中不洩様可申通の事○三四三九

卯四月○南組惣年寄の副書日付は二日なり

(同上)

三四三一 四月四日 去寅八月八日夜、江島高嶋郡小荒路村百姓平七へ疵爲負逃去の、同人

悴金藏人相書に事御

三四三二 四月十二日 川村對馬守殿參府に事、

川村對馬守義被爲召、四五日に支度にあ參府に事、

四月十二日

(御觸書承知印形帳)

三四三四 四月十六日 京都枳座福井作左衛門枳改仕法に事○三四三二に同じ、但し、文化八未年中同様に觸置とあるを、弘化四年同様に改む

三四三五 同日 川村對馬守様御出立に事、

備達 八五〇 同日 川村對馬守様御出立に事、

川村對馬守様、今朝御出立被成の間、此段承知可有之の、以上、

卯四月十六日

南組惣年寄

(御觸書承知印形帳)

三四三三 四月廿五日 往來又と建家續明地面等にあ、子供翫に花火焚申問敷事、

(御觸書)

花火の取締

道路並建家續明地に於て子供花火を焚ぶを禁ず

御城近辺を勿論諸御役所迄、其外川内并縦令川幅廣キ所にあも、大造に花火を揚、川添に人家屋根等に火に子落散の義有之、火に元無覺束の間、右跡に義有之の、急度可令沙汰旨、毎に申渡、猶又以來建家有之場所にあの、花火線香の外決無用に可致の、尤川幅廣キ所にあも、先を申渡に通相守、大造成花火揚の義致問敷の、万一不用者有之の、急度可令沙汰旨、天保十三寅年相觸置○三四四九の處、近來往來又と建家續明地面等にあ、子供翫に花火焚由相聞、火に元不用心、且の無益に費に付、右跡に義無之様所役人共相制、取締可申の、自然等閑に相聞の、所役人共迄も嚴重可令沙汰の、右に通三郷町中端迄も不洩様可申通の事○三四四八一を見よ、

卯四月○南組惣年寄の副書日付は廿五日なり

(同上)

三四三三 四月廿六日 賣賣屋并旅籠屋渡世に者、賣女屋同様渡世致問敷事、

口達

去ル亥年間屋組合に義、都の前を申通再興申渡のに付、賣賣屋并旅籠屋等に仲間に加りける者共

賣賣屋並旅籠屋にて賣

御觸及口達 安政二乙卯年

二一三七

女屋同前の業を替むを禁ず

内、天保以前に悪弊に習ひ、又其外にも心得違、表口への正路に商業書顯懸行燈を出、内實の賣女屋同様と渡世のふいふ者も有之哉。風聞有之、隱賣女に紛敷、不届に至、全夫と仲間組合し者共致穿鑿、心得違に者共有之の早に爲相止、若不用者有之の所し者共可訴出、尤組し者も繁に爲相廻ひに付、及見聞ひ、無用捨召捕、所し者共迄も嚴重可及沙汰の條、後悔不致様可相心得ひ、

右に通三郷丁中端迄迄請負地等迄も、不洩様可申聞ひ事○圖二二八ハを見よ。

卯四月○町中家持の承知判形日付は廿六日なり。

(同上)

圖六〇四 五月八日 東海道馬入川渡船役村に困窮に付、渡船賃割増し事○圖五八四五及六二六八を見よ。

圖六〇四 五月十日 川村對馬守殿長崎奉行被仰付ひ事、

川村對馬守長崎奉行被仰付ひ、此旨三郷町中可觸知をのせ○圖六〇一二及六三一九を見よ。

卯五月十日

信濃

(御觸書承知印形帳)

圖六〇四 五月十二日 奥州道中白川宿困窮に付、人馬賃錢割増し事○圖五八五〇及六二八七を見よ。

圖六〇四 五月廿九日 久須美六郎左衛門殿大坂町奉行被仰付ひ事、

久須美六良左衛門○祐大坂町奉行被仰付ひ、此旨三郷町中可觸知者也○圖六三四三を見よ。

卯五月廿九日

信濃

(御觸書承知印形帳)

圖三四三 五月晦日 上本町貳丁目年寄和泉屋忠兵衛、役儀出精相勤ひに付、御褒美被下ひ

川村修就轉任

町奉行久須美祐篤

役儀出精の年寄和泉屋忠兵衛に銀を賜ふ

事、

上本町貳丁目年寄

和泉屋忠兵衛

右に者義、年寄役勤方宜、丁入用減方心を用、其外寄特に致取斗の段相聞ひに付譽置、銀壹枚差遣ひ、彌此上可相勵ひ、

○南組惣年寄の副書日付は五月晦日なり。

(同上)

圖六〇五 同様に同じ、

圖三四三 六月朔日 地車太鼓、祓りもの等飾又と藝者に衣裝、自今木綿晒を可相用、右届出に上及見分ひ事、并地車行逢ひ節、曳違を唱、事六ヶ敷中掛間敷事○圖二一七ハに同じ。

圖三四三 七月朔日 七夕短冊竹精靈祭に品々、川へ捨間敷ひ、尤右品々を公儀御入用

こめ船を出し、取捨させひ事○圖二八六に同じ。

圖六〇五 七月六日 千日參七墓廻に者、鉦太鼓を携ひ儀可爲無用ひ事○圖七九五に同じ。

圖六〇五 同様に同じ、

圖三四三 七月十日 暑氣に節こまひ得共、無油斷火に元入念可申事○圖二二九九

圖六〇五 七月十七日 慎徳院様三回御忌御法事に夏○圖六〇六

圖六〇五 同様に同じ、

圖三四三 七月廿九日 天滿伊勢町年寄天滿屋安兵衛外女壹名、役儀出精相勤又ひ貞節を竭

御觸及口達 安政二乙卯年

ひこ付、夫と御褒美被下事、

天満伊勢町年寄

天満屋安兵衛

役儀出精の
年寄天満屋
安兵衛に銀
を賜ふ

右安兵衛義、年寄役勤方宜、町入用減方精と心を用、公事出入可及義有之節も、可成丈ケ不
直立様取斗、諸事取締方行届、其外寄特と取斗等相聞ひこ付譽置、銀壹枚差遣ひ、

安堂寺町五丁目
大文字屋重兵衛支配借屋
池田屋彌三郎女房

貞婦いわに
錢を賜ふ

右ひり義、夫彌三良長と眼病相煩、終に盲目同然に相成、兼あり渡世難相成ひ處、此者義手職
と勿論、乍女青物荷ひひ所と賣歩行、格別出精相稼、右躰病身と夫を大切と介抱、萬事爲行
届、貞節を竭し、身分慎方も宜、寄特成者、由相聞ひこ付譽置、鳥目五貫文差遣、此上貞心を
竭、行狀相慎、渡世出精可致旨申渡、

卯七月○南組惣年寄の副書
日付は廿九日なり

(御觸書承知印形帳)

觸六〇五

八月十四日 松平和泉守殿松平伊賀守殿就病氣、願、通御役御免、帝鑑間席被仰

觸六〇五

付事○體裁四五・五四に同じ、尙四五七
八五・六二・九・六六・六七を見よ、
觸六〇七に同じ

觸六〇五

八月十九日 久須美六郎左衛門殿諸大夫被仰付、佐渡守と相改ひ事、

久須美佐渡
守

久須美六郎左衛門事、去月廿八日諸大夫被仰付、佐渡守と相改ひ、此旨三郷町中可觸知をの地

○御觸帳に下札あり、
四五二六の下札に同じ

卯八月十九日

信濃

(御觸書承知印形帳)

觸六〇五

九月四日 奥州道中白坂宿困窮に付、人馬賃錢割増事○四五八五九及
六二九二を見よ

補達 八五三

九月十二日 薩島江戶表へ御取寄被成ひ異國形と船、此度國元へ御差返相成

ひこ付あり、當表近海へ相見へ共、決り驚中問敷事、

惣年寄中か通達町に、左と通被仰渡ひ、

一先達江戶表へ御取寄に相成ひ、薩島を作立ひ異船作りと船、此度國元へ御差送被成ひこ付
あり、自然大坂近海邊に相見へひ更も難斗ひ得共、決り可驚譯に無之事、

○通達當番南笠屋町の通
達日付は九月十二日なり

(御觸書承知印形帳)

補達 八五三

同日 久須美佐渡守様御到着事、

佐渡守様、今日當表御到着被成ひ間、此段承知可有之ひ、以上、

九月十二日

(同上)

觸六〇五

九月廿六日 東海道熱田宿外二ヶ宿日光道中大澤宿甲州道中駒木野宿外壹ヶ宿

中山道碓氷川、右宿と并川場困窮に付、人馬賃錢・船賃錢・川越賃錢共割増事○四五
六三及六二
九七を見よ

觸六〇五

同日 高野山大徳院貸付所代り事、并妙法院宮貸付所増置事、

御觸及口達 安政二乙卯年

二一四一

薩藩製造の
外國形船
近海を出没
するとも懸
疑する勿れ

高野山大徳院貸付所、南新町壹丁目鷹野屋覺兵衛宅こゝ、大石富三郎上田仲次郎取扱來處、此度

右福松方こゝ貸附取扱ひ事、

南間屋町

綿屋重三良代判林兵衛借屋

京屋福松

北渡邊町

河内屋清兵衛借屋

大和屋忠一郎

右宮家士

横山伊織

妙法院宮貸附所

右貸附所堂嶋中壹丁目こゝ有之い處、右忠一郎方こゝも貸附取扱ひ事○圖二三八七及二四七九を見よ、

○前令と共に、南組惣年寄の副書日付は九月廿六日なり、

(御觸書承知印形帳)

圖六〇五 十月七日 本壽院殿御事、向後本壽院様と可稱事、

本壽院殿○監子、家定生母御事、向後本壽院様と可稱旨、先月廿三日被仰出い段、從江戸被仰下い條、此旨三郷町中可觸知をの地、

卯十月○町中家持の承知判形日付は七日なり、

佐渡

信濃

(同上)

圖三四〇 十月八日 江戸表地震大火ニ事寄、諸色直段引上り間敷事○體裁圖二二五二に同じ、

圖六〇六 十月十二日 本寺并名器時鐘ノ外、釣鐘一同 公儀へ可差上事、并萬石以上領内寺院ノ分り其所ノ領主こゝ鑄換、御料所寺社領方石以下知行ノ分り、於公儀鑄換被仰付い事○圖六〇四を見よ、

圖六〇六 十月廿日 堀田備中守殿連判ノ御列并上座被仰付い事○體裁圖四〇六九に同じ、尙圖五五九二及六一六七を見よ、

圖三四一 十月廿八日 妙法院宮貸付所代りい事、

堂嶋中壹丁目

豊嶋屋庄兵衛支配借屋

富田屋彌太郎

右彌太郎方ノ相詰い

妙法院家士 横山伊織

醫師 大澤宗二

南渡邊町

糠屋新兵衛支配借屋

岩井屋政七

右同斷此度取扱所

右政七方へ前書伊織宗二相詰い○圖二三八七及二四七三を見よ、

御觸及口達 安政二乙卯年

二二四三

○南組惣年寄の副書日
付は十月廿八日なり、

(御觸書承知印形帳)

補達 八番 同日 久須美佐渡守様、來月御月番被成御勤ひ事、
佐渡守様、來月御月番被成御勤ひ間、此段承知可在之ひ、以上、
卯十月廿八日

南組惣年寄

(御觸書)

觸六六三 十月 今般蝦夷地御開拓こ付、彼地在住こ上、御國益こ、可相成儀取立度存ひ者
共、其筋へ可願出事

觸六六三 十一月朔日 壹分判銀手摺こ分、歩合引方等請取、引替こ間敷ひ、尤全手摺極印
不見分ひ、壹朱銀こ引替遣、燒ひ分こ是迄通こ定法こ歩合引方を以、引替可遣ひ
間、銀座へ差出引替可こ事

觸六六四 ○觸六六三
に同じ、

觸三四三 十一月四日 土屋采女正様御忌服こ事、

土屋采女正様御母御實方御叔母様、堀丹波守直様こ奥方様、御病氣こ處、御養生不被こ為ひ、
去月廿三日御死去被成ひ付、半減こ御忌服御請可被成處、日數相立ひ付、今日御遠慮被成
ひ旨被仰出ひ間、此段承知可有之ひ、以上、
十一月四日

南組惣年寄印

(御觸書承知印形帳)

觸六六五 十一月十四日 川筋掟こ事觸六六一、

觸三四三 十一月十六日 禁裏御遷幸こ事、

口達

禁裏遷幸に
つき町中靜
肅たる可し

來ル廿三日卯こ刻、禁裏遷幸、准后○雅子、號
新待賢門院御移徙御治定こ由こ、一統此旨を存、同日町、
騒ケ敷義無之様致こ、別こ火こ元入念可こ、
右こ通三郷町中不洩様可こ通事、

卯十一月 ○町中家持の承知判
形日付は十六日なり、

下ケ紙

夏以來火夏無之、町こ中合行届ひ義こ相見へ、追こ風烈こ時節相成ひ付、此上番人廻り方
用水汲溜等厚可被こ合ひ事、
(御觸書承知印形帳)

觸六六六 十一月廿日 金銀具こ儀、公儀并武家一統こ於ても、格別減省相成ひ間、其余こ、

者猥こ相用こ間敷、無據分ひ奉行所こ差圖請可こ事觸二一〇、

觸六六七 同日 古金銀引替所こ儀、猶又來辰十月迄、是迄こ通被差置ひ事、五兩判金通

用并引替こ儀、右同斷御差延こ事觸六〇二七及
六〇九一を見よ、

觸六六八 同日 古金銀引替差出方こ儀、道法こ遠近こ不拘、爲手當増歩被仰付ひ事觸六
及六五六
三を見よ、

觸三四四 十一月晦日 安治川南三丁目上荷船乘徳三郎外四十七名、難船助遣ひ付、夫こ、

御觸及口達 安政二乙卯年

二一四五

火の用心

御褒美被下之事

安治川南三丁目
上荷船乗

德三郎	松次郎	利兵衛	善次郎	惣左衛門
甚三郎	友七郎	利兵衛	政次郎	市三郎
庄次郎	孫七郎	目印山ニ罷在 權次郎	善兵衛	喜兵衛
與之助	忠助	牛六	爲右衛門	榮次郎
鶴松	芳助	定吉	爲藏	與三郎
長兵衛	安五郎	富藏	清次郎	彌助
源七	嘉兵衛	吉兵衛	文三郎	庄三郎
太助	清次郎	幸三郎	吉三郎	庄次郎
庄三郎	重次郎	善次郎	嘉兵衛	宇右衛門
伊助	宇兵衛	與兵衛		

難船を救助
せし徳三郎
外四十七名
に錢を賜ふ

右に者共義、當九月十九日同十月廿一日當月三日同九日、於安治川口、廻船入艘強風ニ淺瀬へ被吹付、及難義の節、相詰又邊ニ居合、早速右船に漕付、精々相働、危難を助ケ遣ひ段、兼難船助ケ方義、厚相心得の故に義に付譽置、爲手當徳三郎外九人の鳥目壹々五百文ツ、兼太三郎幸三郎外貳拾壹人の同壹々文ツ、庄三郎權次郎喜兵衛外拾貳人の同五百文ツ、差遣

ひ、猶此上無油斷心掛の様可致ひ、

卯十一月 南和惣年寄の副
書日付は晦日なり、

(御觸書承知印形帳)

關六六九 十二月九日 日光道中粕壁宿中山道洗馬宿外壹ヶ宿困窮ニ付、人馬賃錢割増之事

○關五八七三及
六三二〇を見よ、

關六〇七〇一六〇七一
○關九及
一〇〇〇〇同、

關三四五 十二月十六日 門松注連繩等を忍々こそつ取、或の押お貴掛の儀仕問敷事○關一
二九九
に同

關八五 同日 ろくと穴打道中双六辻賣引の類禁可事○關三〇
一に同

關六〇七三 十二月十七日 山城攝州兩國の穢多共、白革師の買廻方差妨の儀致問敷事、

右に通去ル西年六月觸渡○關五八一の處、其後新規船宿相始ひもの、或右觸渡に趣致忘脚ひもの
等有之哉、又近頃及流弊、船頭并船宿の等々合、當表に積登の鹿革類、着船以前、川筋
沖手等に穢多共出張、猥に賣買いさし、白革師共買廻方差支の由相聞、以て外に事なほ條、早
々相改、以來前段觸渡に趣嚴重相守、右躰不埒に賣買方の勿論、白革師とも買廻方差妨の義、
決あいに問敷ひ、尤右に趣穢多共にも中渡の間、若此後も是迄に弊風に泥ま、如何に取斗ひ
まゝの義相聞、いゝ、急度可令沙汰の間、聊心得違無之様可致ひ、
右に趣三郷町中不洩様可觸知者之○關六三七
を見よ、

卯十二月 町中家持の承知判
形日付は十七日なり、

佐渡

御觸及口達 安政二乙卯年

山城攝津兩
國の穢多白
革師の營業
を妨ぐるを
禁ず

信濃

(御觸書承知印形帳)

關六〇七三 十二月十九日 神善四郎賣出の諸秤の内、銀秤の定直段へ貳割五分増、皿秤の貳割増、千木秤の壹割五分増を以、當卯年々來未年迄五ケ年之間、引續賣出の事

五八四七及六、二八一を見よ、

關四四六

十二月廿二日 順慶町五丁目松嶋屋仙之助別家手代同町松嶋屋嘉助外四名、忠勤又の役儀出精相勤の付、并安治川北三丁目上荷船乗宇兵衛外五十二名、難船助遣の付、夫々御褒美被下の事、

順慶町五丁目
松嶋屋仙之助別家手代

同町

松嶋屋 嘉助

松嶋屋嘉助の忠勤を賞し錢を賜ふ

右に者義、先代仙助方へ奉公に有付の後、同人病死の由、悴菊次郎事仙助相續の由得共、若年上病身の付、別家手代松嶋屋彌助店方差配致しの内、此者商賣手馴の付、万端引受實躰に相勤、仙助母や病氣の節、介抱爲行届、同人病死後打續仙助義も病氣に取合、追々身上不如意の付、主家親類相談の上、奉公人相減、間狭し上此者下人別あり、諸取引見込薄の逆別宅の由、仕分銀聊も不貰受、晝夜相詰、介抱等無油斷手を盡し得共、仙助終に病死の由に付、葬式佛事等相應に相營、死跡の仙助嫁を可嫁合積の由、博勞町堺屋文六同居左太吉を養子に貰請、仙之助を爲致改名、此者代判の由、幼主を守立、相續方大切の心掛、鹿服を着、

物見遊參等不罷越、身分相慎、忠勤を竭の段、寄特に付譽置、鳥目五貫文差遣の、此後も彌主家を大事に可致の、

卯十二月五日

天満大工町年寄

伊丹屋 吉兵衛

立賣堀四丁目年寄

和泉屋 源四郎

役儀出精の年寄伊丹屋吉兵衛外寄名に銀を賜ふ

右に者共義、年寄役勤方宜、町入用減方心を用、公事出入に可及義の、成丈ケ不事立様取斗、吉兵衛義の、老母へ孝心を竭、其外一同寄特に取斗の由の段相聞に付譽置、褒美として銀壹枚ツ、差遣の、彌此上可相勵の、

卯十二月

安治川北三丁目
上荷船乗

宇 兵 衛 太

南傳法濱
上荷船乗

吉 音 次

目印山に罷在の

郎 萬 作

其方共義外四拾九人、先月十五日同十八日廿七日當月八日、於安次川口、廻船三艘并上荷船貳艘強風の浅瀬に被吹付、及難義節、相詰又を辺に居合、早速右船に漕付、精々相働、危難を助ケ遣段、兼難船助ケ方共義、厚相心得の故に義に付譽置、爲手當宇兵衛外九人共再度相働に付、鳥目壹匁文ツ、太吉音次郎萬作外四拾人に同五百文ツ、差遣ス、猶此上無油斷心掛

難船を救助せる宇兵衛外五十二名に錢を賜ふ

御觸及口達 安政二乙卯年

様致せ、

天滿拾丁目年寄

吉野屋九右衛門

安治川南三丁目年寄

近江屋傳兵衛

役儀出精の
年寄吉野屋
九右衛門外
壺名に錢を
賜ふ

右九右衛門傳兵衛義、年寄役勤方宜、丁入用減方精と心を用ひ、公事出入ニ可及義有之の節も、可成丈々不事立様取斗、諸事取締方行届、其外寄特と心掛有之由相聞の間譽置、銀壹枚宛差遣ひ、

卯十二月○南組惣年寄の副書
日付は廿二日なり

(御觸書承知印形帳)

三四七 十二月廿九日 市中取締宜、火事沙汰も無之、一段と事こひ、猶此上無油斷世話

行届の様可致事○三四七三四に同じ、但し、下ケ紙こゝ、町々會所表へ張い義こゝ無之事の十九字を加ふ、

安政三丙辰年

三四八 補達 八五七○三四八三四に同じ、但し、下ケ紙こゝ、町々會所表へ張い義こゝ無之事の十九字を加ふ、

三四九 補達 八五七○三四九三四に同じ、但し、下ケ紙こゝ、町々會所表へ張い義こゝ無之事の十九字を加ふ、

三四〇 補達 八五七○三四〇三四に同じ、但し、下ケ紙こゝ、町々會所表へ張い義こゝ無之事の十九字を加ふ、

三四一 参考 三二四 二月朔日 四天王寺寄進物町内家別に取集可事、

四天王寺諸
堂修復につ
き毎町家別
に寄進を募
る

新春に御慶目出度奉存ひ、然も昨年大地震こゝ、當山内諸堂社殊外及破損、就中鼓樓龜井堂等急、再建仕度ひ得共、何分大造と儀こゝ、中、難及自力、依之去秋兩度と彼岸御志料五ケ年間御納被成下ひ、右以助成追と諸堂再建修(復)覆仕度、因て三郷御町と諸靈追善、并に去冬地震高浪等こゝ横死と靈、右兩様とも永代彼岸毎、別段に大施餓鬼相營度奉存ひ間、何卒御尊配を以、御町内御家別御取集御納被成下ひ様、奉御頼上ひ、以上、

卯正月

四天王寺(寄)寄進處懸り

役 人
世 話 方

別紙と通、四天王寺を去春以來被頼出ひに付、組合町と相談ひ得共、區と相成、治定不致、其後度と世話方中か又と被頼出ひに付、尙又再應相談と上、組合こゝを不取扱、町別こゝ取集可事決定仕、外町こゝを去年以來被取集ひ向も有之ひ、依之町内義も當春彼岸か家別に取集爲致、間、志と輩を多少に不限、御(寄)寄進可被成、以上、

辰二月朔日

年

寄

(御觸帳)

三四二 補達 八五七○三四二三四に同じ、但し、下ケ紙こゝ、町々會所表へ張い義こゝ無之事の十九字を加ふ、

三四三 補達 八五七○三四三三四に同じ、但し、下ケ紙こゝ、町々會所表へ張い義こゝ無之事の十九字を加ふ、

三四四 二月廿八日 俗と身分こゝ、一心一向と禮拜と唱、異法を相勸ひ者有之、此度御仕置付ひ、以來右躰異風と法義に被惑不様可致事、

御觸及口達 安政三丙辰年

俗人にて一心一向の禮拜を勸誘せる者の處刑

正法異法の區別

俗に身分こそ、淨土宗并本願寺派兼學と秘授、一心一向と禮拜を唱、異法を相勸はるの有之、吟味の上、此度引合し者一同御仕置付ひ、元來右様と傳法を、諸人ヲ誑惑いさしめ義に付、勸方唱事等品と相替、珍敷教も可有之哉、何程尊く有かき教旨を、俗人を勿論出家等が申勸はと云、且那寺住持へ承り、亦致傳法はるのと同流一寺住持、あるひと其本寺等に相尋、正法と寄風(異カ)の儀を可相分事し、若又密に儀に付、格別秘し、由申聞、得き、必異風邪義を相心得、可訴出ひ、自然心得違、異法信仰いさしめ義相顯、いさしめ、其身并妻子等迄(科)罪料に可被處、其旨急度相守、末々をの并召仕し男女に至まき、不洩様兼所し者可論置ひ、右に通三郷町中可觸知をの也(圖四九八五を見よ)

辰二月○本令端書に二月廿八日御觸とあり

佐渡

信濃

(御觸帳)

圖六〇六

見

三月十九日 東海道掛川宿并中山道河渡宿困窮に付、人馬賃錢割増し事○圖五八八二及六三三三を

圖二四八

致事

三月廿二日 正銘唐物を荷物買持并並合引當等と取組し儀、聊無危踏出精取引可○前文圖四三三一六に同じ、右に通文化と度相觸、其後も都正銘物におゐるを、買持並合取組等し儀、更ニ危踏可中筋無之儀に付、並段觸渡し通相心得、右賣買筋しもの亦者素人におゐる、同様無疑念、銘し見込次第、十分出情可致取引旨追々相觸○圖二〇三七二一、一、然ル處近來唐船欠年相續、藥種類等拂

唐船入津の途絶

去冬以來唐船の入津多し

正銘唐物の買買を獎勵す

古銅古道具屋仲間に加らずして右渡世を營む可からず

底相成、別み大黃麻黄と類格外直段相進ひに付あ者、當表商人ども彼是混雜あよひ次第も相聞ひ處、去冬以來長崎表に藥種反物其外多分と荷數持渡有之由に共、當表賣人共買持并荷物並合引當等と取組危踏ひあ者、融通と差響、別み藥種し儀者、病用第一と品に付、旁兼あ觸渡し趣厚相心得、右賣買筋に携はるのを勿論素人におゐる、持渡し品買持并に荷物並合引當等と取組聊無危踏、手廣に賣買いたし、銘し見込、十分に出情可致取引ひ、

右に通三郷町中不洩様早と可中通事○圖二六七一を見よ

辰三月○本令端書に三月廿二日御觸とあり

(御觸帳)

圖六〇七

三月廿九日 古銅古道具屋し儀、仲間へ不加して右渡世致間敷事、

右に通去ル寅年相觸○圖六〇一を見よ、一ひ處、其後も三商と内、古銅古道具屋し儀、今以仲間と不加、渡世致ひ者不少、或仲間外におゐる、晝夜に不限往來道端等へ猥店差出、商ひいせし、甚敷に至ひあを、所(二)寄市立し場所、仲間にも不加、素人ども押あ立交ひに付、其筋し者方相制ひあも不聞入、却あ惡口難言あよひ、口論にも可相成儀、間と有之由相聞、以て外し儀におゐる、重と不埒に至ひ條、早と相改メ、前段觸渡し趣無違失相守可中、若此後も心得違し族有之におゐる者、早速に召捕、遂吟味、嚴重御答可中付ひ間、夫と所役人も精と心ヲ付、右轉し者無之様可心掛ひ、

右に通三郷町中不洩様可觸知をの也、

辰三月○本令端書に三月廿九日御觸とあり

佐渡

御觸及口達 安政三丙辰年

二一五三

信濃

(同上)

三四九 三月 京都泉涌寺鎮守劔大明神社、修復爲助成、五ヶ國相對勸化事、今日北組惣會所に通達年番町、年寄被招呼、惣年寄中左に通被中渡、

京都泉涌寺

京都泉涌寺
相對勸化
養龍丸

右泉涌寺鎮守劔大明神社、修復爲助成、山城大和和泉攝津五ヶ國、御料私領寺社領諸寺社在町共、中七ヶ年之間、相對を以、万病平癒養龍丸と丸藥賣弘儀、御免被仰付、當辰年中七ヶ年之間廻行可致、尤相對次第事之間、其旨相心得、無急度可申通事、

辰三月

(同上)

三四五 同月 安治川南四丁目上荷船乘傳三郎外廿二名、難船助遣ひに付、夫と御褒美

被下事、

安次川南四丁目

上荷船乘

傳三郎

又

同所南登丁目

上荷船乘

又

同所北三丁目

上荷船乘

又

新右衛門

平

藤

吉

長次郎

卯兵衛

市三郎

孫

七喜

助

太兵衛

茂

八卯

八次郎

清

七

入

八次郎

三右衛門

萬次郎

勇次郎

龜吉

宗吉

吉

松

吉

右者共儀、先月廿四日當正月廿四日、於安次川口、廻船式艘強風に淺瀬に被吹付、楫を損

難船か救助
せる傳三郎

外廿二名に
錢を賜ふ

高波打込、及難義、節、相詰又の邊に居合、早速右船へ漕付、精に相勤、危難を助ケ遣段、兼難船助ケ方厚相心得の故に儀に付譽置、爲手當鳥目五貫文ツ、遣ひ、

辰三月

(同上)

三四五 同月 日本橋五丁目大黒屋次兵衛借屋播磨屋政吉、孝心奇特成者に付、御褒美被下事、

日本橋五丁目

大黒屋次兵衛借屋

播磨屋政吉

孝子播磨屋
政吉に錢を
賜ふ

右政吉儀、河邊澁川郡久寶寺村百性さん孫にあ、廿七ヶ年已前寅年六才に節、播磨屋久兵衛養子相成ひ所、生得實跡成ものこゝろ、養父母に意に不背、其上幼年に砌に養父久兵衛手代り、同人渡世に青物荷ひ賣仕覺、追々成長に隨ひ、商用に透こを仲仕勤飛脚等も被雇、出情相稼、右儲錢を自用に不遣捨、不殘養父に相渡、實直に仕向、養父を大切に致しに付、久兵衛も安全に上、追々同人名前退政吉へ跡相續爲致、久兵衛も實家と家号を唱、同借屋致別宅に得共、兼お持病有之、渡世向難出來に付、始終政吉方に罷在、疝症強差發に節も、他をのへ對し、無譯義を申張、及口論の儀等毎々有之、度毎政吉心配いとし、久兵衛を申宥、先方へも程能相詫、不事の様取扱來、近年同人持病打沈に間合こを、傘仕立職相始ひ得共、抄々敷義も無之、兎角我儘而已事の趣に共、是又意に不背、程能仕向、近頃疝症相券引籠居に付あを、藥

御觸及口達 安政三丙辰年

用介抱手厚ニ爲行届、久兵衛相好、品を買調相与へ、夜分附添按磨等致し、趣臥(起)も心を付、養母きぬをも同様大切(心)に、養方弟久吉同妹はきをも慈愛を加へ、其身を鹿服を着、物見遊參等(奇)も不罷出、慎方よろし、家内陸間敷相暮し、右躰年來養母へ孝を竭(奇)の段、寄特ニ付譽置、鳥目五々文差遣、

辰三月

(同上)

四月八日 於薩島製造被仰付の大船貳艘、爲修復、紀島并當表兵庫津に内へ差廻相成(見紛)の哉、異船と見紛、騒立申間敷事、

今日當郷惣會所へ通達町年寄被相呼、惣御年寄中左に通被仰渡の、

於薩島製造被仰付の大船貳艘、此度江戸表へ乗廻相成の處、去月廿一日阿島於牟岐浦、及難舟の處、御舟別條々無之の得共、帆檣相損の付、時宜ニ寄、紀島并大坂兵庫津に内へ差廻、修復可致哉難斗旨、薩島藏屋敷詰方届出の付、自然差廻の節、異船と見紛、騒立不々様、無急度筋へ申聞可置事(見紛)八六

町々會所表に張置の儀こそ無之事、

○本令端書に四月八日口達とあり、

(同上)

○圖四六〇八〇なるべし、

四月廿八日 町々こゝろ異説違變盜難、又の手先者不直不法の儀、并音曲會仕法講其餘諸集會相催の等儀、持場手附に内へ被届出度の事、

異説變事盜難及手先の不法は持場の手附へ届出づ可し音曲會仕法講其他諸集會も右同斷たる可し

町中には不及相觸、手附中が町役人に頼參りの書附に寫也、

一町々こゝろ異説違變并盜難迷惑筋、其外手先者勿論、都め役威を以不直不法及所業居の儀御座のり、早々持場手附に内へ爲御知可被下の、且又音曲會仕法講其餘諸集會、近比寺院或は町家こゝろ猥々相催のり不少、追々御取調に相成、右々全躰手附ども行届兼ね、諸注進及達御用弁不相成連、今般各方に被仰渡の儀に付、自今御手數に得ども、是迄諸注進仕來に外に、書面に廉々荒増即刻御聞シ被下度厚頼上の、將亦御役所へ御届に相成の儀も、何事不寄、同書付壹通持場手附に内へ御差遣可被下の、尤右書付を其儘御月番にさし上、御非番へを寫を以御注進および、東西様御手元を定供を差上の届書と合躰に上、御聞濟相成の條、被仰渡の付め、此上不都合の儀在のり者、甚心痛仕の付、右次第深々御配慮被下の様、組合町々御通達被下度、何分專一の御取取斗方吳々頼上の、以上、

辰四月廿八日

手 附 中

覺 書

法師渡講の届出
淨瑠璃會の届出
舞渡の届出

一法師さらへ講届の儀者、町御目附様を座方に御申附相成の由、依之催の節、座方亦者法師方を町内に可申出答、其節丁内を持場御手附に申出(申出)事、
一淨瑠璃會届の儀、於師家質素に稽古同様催し是迄通り、少しこゝろ目立催のり可届出事、
一舞さらへ右同様事、

御觸及口達 安政三丙辰年

二二五七

寺社講の届
出
盗難の届出
淨瑠璃舞
仕法講等は
其貸席主よ
りも届出づ
可し
出火の届出

一 寺社講届儀、町内ニ不抱、講元ハ御ヤ附相成由、依之講催ニ節々、講元カ可届出筈、
一 被盜物届持場ニ書附出し儀者、是迄ニ通り、外ニ今一通り雛形ニ振り合ニあり、御手附方ニ出
し儀事、尤御役所ニ訴出前、可相成丈早ニ可ヤ出事、品柄巨細ニ認ルニ不及ハ、委敷御調可
相成筋、ハ、御手附中其町へ被罷出可被聞取由、
但し、此届定供衆方ニ届出不及ハ、
一 淨瑠璃舞さらへニ類、席貸カ料理屋カも可届出由、仕法講も同様ニ事、
一 強盜并被盜之届書調印ニ不及申、
一 出火手過チ届、是迄ニ通心得儀事、
強盜并忍入盜賊筋、爲御知被下ハ振合左ニ、

何町

盗難届案文
(其一)

右方ハ昨夜何時比、強盜脇さ一抜持、或者出刃庖丁其外何品を携押入、衣類取交何點金銀錢何
程被盜取、則今日訴出ハ付、此段

(其二)

異說變事の
届出

右方今曉起出由所、表ノ戸明有之、家内相改ハ處、衣類取交、余ニ同斷、
右ニ外盜賊這入方ニ模様一寸御認、反古を以相對、手附中ニ表書いた、御差出被下度ハ、
一 異說違變都爲御知被下儀者、他見相憚ハ付、前同様反古を以封書いたハ、

覺書

淨瑠璃會及
舞渡會の届
案文

來ル幾日
一 淨瑠璃稽古さらへ仕度奉存ハ、
一 舞さらへ仕度奉存ハ、

何町何屋誰カ一
催主 何屋何兵衛

何町

料理屋渡世
席貸主

催主町内

何

町印

右ニ通中出ハ付、此段上ハ、以上、

何何月

右ニ綴手紙ニ相認、町内付添不及、本人カ持參、尤催主町内持場ニ御手附中方ハ、本人さ
支有之者、相心得ハ代人持參在之度、模様ニ寄、被相尋度儀も御座由、

覺

何寺
何社修復講

講元

何町

料理屋渡世
席貸主

右講元

印

右ニ通相催し度奉存ハ、此段御届上ハ、以上、

圖三四三 四月廿九日 日本橋壹丁目年寄京屋源兵衛、役儀出精相勤ハ付、并善左衛門町

御觸及口達 安政三丙辰年